
仮面ライダー龍騎～ライダーとアイドルとぷちどる日常～

鳴神 ソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー龍騎〜ライダーとアイドルとぷちどる日常〜

【Nコード】

N0720V

【作者名】

鳴神 ソラ

【あらすじ】

それは幾つ物ある世界での本来の歴史とは違った流れを歩んだ龍騎士が歩む物語

最後のバトルで自分を除いた13人のライダーの契約モンスターをも契約し、ライダーバトルを勝ち抜いて、それを無くした城戸 真司の進む物語は…アイドル達とそんなアイドル達に似た不思議な生物『ぷちどる』達との日常！？
そんな彼等の日常をご覧ください

プロローグ（前書き）

真司「あれ！？始まった！？」

士「大体分かった。作者は忘れない内に書こうとしてるんだろ？」

剣崎「おいおい…」

巧「今回はなぜ、真司がなった経緯だな」

真司「俺行くの確定で！しかも話しちゃったんですか！？龍騎の事を！？」

大久保の言葉に真司は驚いて言う。

ちなみに大久保がなぜ知ってるかと言うとライダーバトルが終わった後にちよつとした事で先輩の令子に龍騎に変身して戦う所を見られたのでOREジャーナルで龍騎は知られている。

大久保「ああ、なぜ話したかというと…」

大久保から話された事に真司は驚く。

二日後

大久保の知り合いが社長を務める765プロで日夜トップアイドルを目指すアイドル達と事務員の音無 小鳥は社長に集められていた。

そんなアイドル達に社長はコホンと咳を付いた後に言う。

社長「皆に集まって貰ったのは他にもない。プロデューサーを雇ったので顔合わせしようと思い、集まって貰ったのだ」

小鳥「ホントですか？それでその人は？」

社長「ドアの外で待機して貰っている…入って来てくれ！」

社長の言った事に小鳥が聞き、社長がドアの外に呼びかける。

そして入って来た人物に全員驚く。

伊織「(ええ!?)」

真「(うそ...)」

社長「紹介しよう...君達のプロデューサーを勤める...」

龍騎「仮面ライダー龍騎です!プロデューサー新人だけど宜しく!」

社長の紹介の後に真司こそ龍騎は挨拶する。

これが...真司こそ仮面ライダー龍騎のアイドル達との出会いであった。

プロローグ（後書き）

巧「と言う訳で始まったな」

剣崎「ホントな……」

士「んで次はぶちどるとの出会いだな……」

津上「いや〜どうなるんでしょうね」

ヒビキ「だな〜」

ミラー「…ぷちどるのゆきぽとあぶうとの出会い（前書き）」

巧「最初のぷちどる達との出会いだな」

剣崎「大変だよな真司」

真司「ホントね…」

ミラー1：ぶちどるのゆきぼとあふうとの出会い

龍騎「ふう〜色々と出来たな…最初は大変だったよな」

龍騎はデスクに座り、自分がプロデューサーになった日を思い出して仮面の中で苦笑する。

プロデューサー仮面ライダーになって数日過ぎ、龍騎は765プロのアイドル達とも上手く付き合えて、765プロの人気も上昇したのであった。

龍騎は思い返していた時…

真美「にーちゃんにーちゃん！ゆきぼを拾った！飼ってもいい？」

龍騎「何その子!？」

いきなり、765プロ所属の双海 真美が抱えたダンボールの中にいる小さい子に龍騎は驚き、椅子からずり落ちる。

龍騎「ゆきぼって…何か雪歩に似た子だな…」

真美「うん！だからゆきぼ！ねえ飼ってもいい？」

椅子を支えに立ち上がって真美の抱えたゆきぼを見て呟く龍騎に真美はそう言っただけで聞く。

龍騎「う〜ん、社長ならともかく、律子が認めるかな？それに一匹だけじゃあ寂しくならないか？」

椅子に座り直しながら腕を組んで龍騎はそう言った後に真美にそう聞くこと…

亜美「そう思っつて、あふう拾つてきたよー」

あふう「ナノー！」

龍騎「今度は美希に似た子!？」

今度は双海 亜美が頭に美希と似た子に乗せて来て、龍騎は驚く。

真美「にーちよーん」

亜美「いいしょー1匹じゃないしー」

龍騎「うーん、律子に聞いて、ちゃんと世話するなら俺からも頼み込んであげるよ」

ゴロゴロと両側から猫なで声で聞く双海姉妹に龍騎は腕を組んでそう言う。

双海姉妹「いえーい」

あふう「ナノー」

龍騎の言葉を聞いて2人はゆきぽとあふうを胴上げする。

数分後

律子「ダメです（キツパリ）」

戻って来た律子に龍騎と双海姉妹はあふうとゆきばの件を言つと一
刀両断された。

律子「何勝手に決めてるんですか！社長もいないのに！」

龍騎「そうだけど……」

腕を組んで龍騎に言う律子に龍騎は頬を掻き、その間にあふうが律
子の背中をよじよじ登っている。

律子「だいたいちゃんと世話できないでしょ！食費とかどーすんで
すか!？」

龍騎「ああ…そこがあつたか…」

あふう「あふう〜」

くどくど言う律子の言葉に龍騎は頭を掻き、あふうは律子の頭に登
ると欠伸をした後に眠りだす。

律子「なんですか！何か文句でも!？#」

龍騎「……いえ何も…」

キツとあふうを頭に乗せたまま睨む律子に龍騎は冷や汗掻いて言う。

それを律子と共に帰ってから見ていたナイトが口を開く。

ナイト「…おい、説教するのも良いが…もう1匹が床に穴を開けて寝てるぞ」

律子「ちよつと真美！コツチ来なさい！#」

穴を開けて寝ているゆきぽを指してナイトが言った後に律子も「！と怒った後に真美を呼ぶ。」

1分後

律子「ほら見なさい！結局面倒が増えるだけじゃない！」

穴からゆきぽを出し、ダンボールに移した後に律子が双海姉妹に言う。

律子「床の修繕費、いくらすると思ってるのよー」

真美「律っちゃん」

は と長いため息を吐いて肩を揉む律子に真美が呼びかける。

律子「もー今度は何よー？」

真美「えーつとね……アレ」

呼ばれた律子は真美に振り返り、真美はある方向を指すと…

あふう「ナノー」

あふうが大暴れして、机の上の物を散らかしまくっていた。

ナイト「いら」

すかさずナイトがあふうを掴み、律子に手渡す。

律子「まーったくこの子はとんでもないわね#」

あふう「やーっ!」

じたばたするあふうを見て律子は言う。

すると…

あふう「びえ〜」

律子「へ!?!」

あふうが泣き出す。

律子「な、何よ?そんなに強くしてないでしょ…?」

あふう「(にやり)」

それに驚いた律子が力を緩めた瞬間…

あふう「ナノー(ダッ)」

律子「あっ!?!?ちょコラー!」

龍騎「嘘泣きかよ!?!」

律子の手から抜け出しあふうは駆け出し、律子は慌て、龍騎は追いかける。

インペラー「何だ？」

龍騎「丁度良かった！」

律子「インペラーさん！その子を捕まえてー！」

あふう「ナノー」

ドドドと駆けるあふうの前にインペラーが通りかかり、律子が頼み込む。

インペラー「？なんか分かんないけど…：よーしよし、ここに来い」

手を出し、あふうを捕まえる体制に入るが…

ド！

インペラー「ぽっ！？（くきっ）」

龍騎「あっ」

あふうがインペラーの男の急所とも言える場所に突撃し、それに龍騎は顔を青ざめると同時に…

ズシャアア

双海姉妹「えっへん」

龍騎「んで掛かるんだ；」

すぐに律子のおにぎりに食い付いたあふうに双海姉妹は胸を張り、龍騎は律子と共に脱力する。

1分後

律子「はー…やっと静かになった…」

あふう「ZZZZZ」

おにぎりを食べ終えて寝始めたあふうに律子は息を吐く。

龍騎「それにしても食べたら寝るって…猫みたいな子だなあふうって…」

律子「そう言う問題じゃないですよ」

あふうの様子に苦笑する龍騎に律子は疲れた表情で言う。

亜美&真美「ね〜飼ってもいいでしょー？ちゃんと世話するから〜」

律子「あー…もう好きにして」

お願いする双海姉妹に律子は頭に手を置いてそう言った後…

律子「でもその前にあれを片付けてからね #」

真美の頭を掴んでぐいっとあふうのせいでごちゃとなった机と資料を指してそう言う。

あふう「ああふうう」

双海姉妹が片付けをしている間、あふうは欠伸をした後に起きる。

あふう「(じーーーーー)」

ゆきぽ「(すうすう)」

そして隣でダンボールに寝てるゆきぽを見て…

あふう「(にやり)」

またもにやりと笑った後…

あふう「ZZZZ」

ダンボールの蓋を閉めてその上に寝始め、ゆきぽは出ようと慌てて暴れる。

それに気づいた律子があふうを掴み…

律子「もー次から次へと…」

あふう「ナノー！ナノー！」

ゆきぽを助け出し、逆にあふうをダンボールに入れてすっかりビールテープで止めて閉じ込めた後に律子はゆきぽを抱えたままは—

――と長い息を吐く。

律子「（あーあ…結局私が世話することになるんだろっなあ…）」

椅子に座りながらそう考えてる律子の後ろでゆきぽがとてと歩き、律子の座ってる椅子の背に立つと…

ゆきぽ「（とんとんとん）」

律子「あ…」

肩叩きをする。

それに律子は頬を緩め…

律子「（…まあ、それもいいかもね）」

ふふっ？と笑い、ゆきぽの肩叩きを受けるのであった。

数分後

亜美&真美「おそうじかんりょーしまちた！（ビシッ）」

律子「ウム！」

お掃除を終えて敬礼する双海姉妹に律子は満足げに綺麗にされた所を見た後に…

律子「それじゃ飼ってもいいわよ！」

亜美&真美「ほんと!?!」

律子の許可に双海姉妹は顔をぱあと顔を輝かせる。

律子「ただし!世話はもちろんと2人でやること!」

亜美&真美「はい」

龍騎「(良かったな2人共)」

その様子に龍騎は笑った後…

律子「食費はプロデューサーのお給料からもらうこと!」

亜美&真美「はい」

龍騎「どうえ!?(ガーン)」

律子の言葉に龍騎はショックを受ける。

西洋洗濯舗 菊池にて

龍騎「ねえファイズ!律子ってちょっと酷いと思わない!俺の所大樹帯だからきついのにさ!」

巧「ああ、確かにきついな、ってか今仕事だからかけるな」

レオ「何やらイヌイさんの親友さん、さらに苦勞が増えた様ですね」

啓太郎「そつだね」

龍騎からの電話に眉間を揉む巧の姿があったのであった。

ミラー１：ぶちぶちのゆきぽとあぶつとの出会い（後書き）

真司「ホント…どうしよう」

剣崎「大変だな城戸」

巧「だからって俺にかけるな」

真司「だって剣崎よりたっくんにしかかけられないんだよ！」

巧「たっくん言うな！」

士「次回を楽しみにな」

ミラー2：美希とあふうと大暴れ（前書き）

剣崎「美希ちゃんがあふうと初邂逅する話だな」

巧「大変だよな城戸は…」

シンジ「ホント城戸さん、大変だよな」

ミラー2：美希とあふうと大暴れ

あふうとゆきぽの出会いから翌日

龍騎「ホント元気ありすぎだね」

律子「そうですね」

さつきまでどたばたして今は律子の頭の上で寝ているあふうに龍騎は書類を整理しながら言い、律子も疲れた表情で言う。

美希「ただいまなのー（みっ）」

そこに麦藁帽子をかぶって海外ロケに出ていた美希が敬礼して言う。

律子「美希おかえりー海外ロケお疲れ様」

あふうと欠伸びながら鞆とバッグをどすつと降ろす美希に律子は労いの言葉をかける。

亜美&真美「ミキミキおつかえりーおみやげはー？」

美希「あるよー」

早速お土産を強請る双海姉妹に美希はバッグをゴソゴソあさりながら言い

美希「コレなのー！」

龍騎「(何でお面?)」

真美「(どこでロケしたの?)」

美希のぬつと出したどこかの部族が使うお面の様なのに龍騎と真美は心の中でツッコミを入れた。

美希「はーやっぱり日本は落ち着くねー」

早速お土産のお面を付ける双海姉妹を背にん〜?と背伸びする美希

小鳥「あれ?そう言えば社長とゾルダさんも一緒じゅなかったかしら?」

美希「あー社長は用事があるって言ったの。ゾルダさんはその付き合いなの」

小鳥の問いに美希はそう答える。

美希「でもミキがチケットを買って渡したからそのうち戻って来るの!」

ナイト「(絶対間違えてるんだろうな)」

インペラー「(別の場所に行ってるんじゃないか?)」

笑顔の美希の言葉にナイトとインペラーはそう思ってる頃

その本人達は…

社長「……………」

ゾルダ「ありやりや、美希ちゃん、ちゃんと見ないと駄目だね」

目の前の光景に社長は冷や汗を流し、ゾルダは苦笑した口調で言う。

社長「（美希君に任せるんじゃないかな…）」

ヒュウウウウ…と吹き荒れるエジプトの風を受けて社長はそう呟くのであった。

戻って765プロ

小鳥と話した後に美希はあ、社長また経費でのん…とぶつぶつ呟く律子の頭にいるあふうに気づく。

美希「ねえねえ、律子…さん、これなんなの？」

律子「何って…あふうよ？」

でれーと涎をたらしているあふうをひよいと掴んで聞く美希に律子は振り向かずになんか言う。

美希「へー」

あふう「ZZZZ」

律子「イジメちゃダメよー」

まだ寝ているあふうを赤ちゃんを高い高いする様に持ち上げてる美

希に律子は注意する。

そして一通り終わって、律子は振り返ると…

美希「へー」

あふう「ZZZZ」

律子「こら#」

あふうを逆さまにする美希に律子は怒る。

美希「ねー律子…さーん、おなかすいたー」

律子「何よもーだらけっばなしじゃない」

ソファーにもたれてホケーとした美希に律子は呆れた顔をする。

美希「だってーミキ日本に戻ってから何も食べてないもん」

律子「んー…そう言われてもねえ…」

プーたれる美希の言葉に律子は顎に手を当てる。

亜美「律っちゃんのおにぎりならまだあるよー」

律子「またアタシの！」

美希「食べるの！」

亜美が出した律子のおにぎりに本人の叫んでる間に美希が笑顔で言った瞬間…

ビュッ（あふうが美希の腕から飛び出た音）

ガッ（あふうが飛び出た際に美希の頬がぶたれる音）

ぱくっ（そして亜美の手にあるおにぎりにあふうが食いつく音）

素早い速さであふうが先におにぎりを取った。

ナイト「（やっぱりな…）」

それにナイトは予想していた様であった。

美希「あああ…ミキの…みきのおにぎり…」

インペラー「（いや、それ律子のだから…）」

あふう「（もっきゅもっきゅ）」

おにぎりを食べるあふうに美希は涙目になり、インペラーが心の中でツッコミを入れる。

美希「返すのっ！（バツ）」

あふう「（ひらり）」

美希「返すのっ！！#（ぶんっ）」

あふう「（ひらり）」

美希は最初に飛び掛るがあふうはそれをかわし、次の美希の左アッパーもあふうはかわす。

そうやってる間に2人の争いでどンドン散らかって行く。

龍騎「騒がしいけど何が起こってるんだ！」

律子「あっ！プロデューサー！」

そこに別室で仕事をしていた龍騎が来る。

龍騎「うわぁ…何がどうなってあんなったんだ!？」

ナイト「それはだな…」

争っているあふうと美希の様子に驚く龍騎にナイトは詳細を話す。

律子「お願いします。あれを止めて来て！」

龍騎「俺!?!まあ…プロデューサーとして止めないと行けないけど普通のじゃあ無理そうだし…」

律子のお願いに龍騎は驚いたが頭を掻いた後に美希とあふうの争いを止める為にカードデッキからカードを取り出し、ドラグバイザーに装填する。

ドラグバイザー「アドベント」

真司の家にて…

ドラグレッダー「ん？マスターからの呼び出しですね」

メタルガラス「ありやあ珍しいね。確かこの時間は仕事じゃなかつたけ？」

もきゅもきゅとお菓子を食べていた赤髪の肩まで来る髪に赤のチャイナ服を着た少女な姿になっているドラグレッダーが顔を上げ、それにゲームをしていた背中に来て来る銀髪にサイのイラストが入った銀色のジャケットを灰色のタンクトップの上に羽織った女性なメタルガラスが聞く。

ドラグレッダー「何かあったんでしょ。それじゃあ行って来るです」

メタルガラス「いつてら」

言った後に少女の姿から本来の姿に戻って龍騎の元に行くドラグレッダーにメタルガラスは見送るとゲームを再開する。

戻って765プロで

ドラグレッダー「ギャオオオオオ！」

律子「うわあ！どこからでも出るんですね」

龍騎「ドラグレッダー！あの子達を説教したいから威嚇して止めてくれないか？」

現われたドラグレッダーに律子は驚いた後にそう呟き、龍騎はまだ争っているあふうと美希を指してお願いする。

それにドラグレッダーは頷くと2人に近づき…

ドラグレッダー「ギャオオオオオオ!!」

美希&あふう「ナノ!!!」

ドラグレッダー「ギャウ!?!」

威嚇したが逆に威嚇されてドラグレッダーはビビった後…

ドラグレッダー「(ガタガタブルブル)」

龍騎「おいドラグレッダー:」

インペラー「無双龍が普通の人間とちっさい子に逆に怯えさせられるってどうよ:」

律子の後ろに隠れてガクガクと震えるドラグレッダーに龍騎は冷や汗を流し、インペラーも冷や汗を流して呟く。

結局、2人は律子が止めたのであった。

龍騎「はゝ結局律子が止めたな」

ナイト「ホントだな」

ドラグレッダーを帰し、律子の説教を見ながら龍騎はため息を吐き、

ナイトは同意する。

亜美「それにしてもにーちゃんって色々と連れてるよね〜」

真美「だよ〜面白い子もいるよね〜」

亜美が龍騎と契約しているモンスターを思い出して呟き、お面を付けたままの真美は同意する。

美希「ねえ、そこのちっこいの」

ガミガミガミと怒る律子の説教を受け流して美希は右目で横のあふうを見て小さい声でボソボソと話しかける。

美希「ミキからおにぎり奪うとはいい腕してるの。キミなかなかやるの」

あふう「ナノ」

ミキの褒め言葉にあふうも褒める様に鳴く。

美希「今度は負けないの!」

あふう「ナノ!」

お互いになや〜と笑い、今度のおにぎり争奪に負けないといき込んでる前で…

律子「ほー…雑談する余裕があるんですかそうですね…#」

美希&あふう「(びくっ)」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴと聞こえるかもしれない黒い気迫を纏った律子に2人は頭に角が見えたのであった。

その後に2人は拳骨を受けた後に罰として散らかった物の後片付けを命じられたのであった。

龍騎「う〜ん、俺プロデューサーだけでもうちよい止められる様にしてないとな…特に暴れてる時とか」

ソファに座って呻く龍騎にダンボールに入って寝ていたゆきぽがおぶおぶとダンボールから出た後に龍騎にとととと近づくと…

ゆきぽ「(なでなで)」

龍騎「ん？慰めてくれてるのか？ははっ、サンキュー」

自分の足を撫でるゆきぽに龍騎は苦笑した後ゆきぽの頭を撫でる。

亜美「ねえ真美！ミキミキの靴見たくない？」

真美「お、いいねえー何かイカタコしい(正しくはいかがわしい)ものがあるかもっ」

んっふっふ〜と笑って提案する亜美に同じく笑う真美は同意する。

亜美&真美「てなワケでーん！」

双海姉妹が勢い良く美希の鞆をバンツと開けると…

????「シャー！」

美希の鞆から何か飛び出し、亜美の顔にガバツと飛び付く。

龍騎「今度は千早似の子!？」

美希「そう言えばすっかり忘れてたの！」

ナイト「忘れるなよ」

亜美の顔に張り付いたまま疑問詞を浮かべまくって周りを見る如月

千早似の子に龍騎は驚き、片付けを終えた美希が笑顔で言い、ナイトはツツコミを入れる。

彼女の詳細は次回に続く。

オマケ

ドラグレッダー「シクシクシク」

ボルキャンサー「なあ、何でドラグレッダー泣いてるん？」

体育座りして泣いてのの字を書いているドラグレッダーに16歳位のオレンジのショートカットで蟹の絵柄が入った着物を着た少女なボルキャンサーが聞く。

メタルゲラス「何でも、止める様に呼ばれたけど、威嚇したけど逆

に威嚇を返されたんだってさ…しかも女の子に」

ギガゼール「無双龍が威嚇返されるってどうよ、しかも女の子につて…」

ゲームをしながら訳を言うメタルグラスに同じ様にゲームをしている目つきの悪いリリなのシャマルに似た顔つきの茶色の首まで来る髪のレイヨウの絵柄が入った暴走族な格好の女性なギガゼールは冷や汗を流す。

ドラグレッダー「今度は負けないです！絶対に脅かすです！」

ダークウイング「まあ、頑張ってくださいまし、お菓子入りますか？」

ドラグレッダー「います！」

顔を上げて言うドラグレッダーに黒髪の膝まで来るのに背中に蝙蝠の翼が付いた黒いゴスロリを着た少女なダークウイングが呆れ顔で言い、お菓子を出すとドラグレッダーはすぐに食い付き、それに他のモンスターはやれやれと息を吐く。

ミラー2：美希とあふうと大暴れ（後書き）

良太郎「次回は新しいぷちどるの子の経緯と名前だね」

ヒビキ「それにしても凄いな〜あの子達」

キバット「よお〜やるよだな」

ワタル「おにぎりがかかると執念ですね」

アスム「ホントですね」

ミラー3：ちひゃーと千早と新たな新人アイドル（前書き）

剣崎「今回は千早の登場と前回名前が出なかったちひゃーの回だな」

巧「まあ…他にもな…」

カズマ「城戸さんは大変だなホント…」

ミラー3：ちひゃーと千早と新たな新人アイドル

亜美「でさーこの子何ー？」

自分の頭にまだ乗って周りをきよるきよる見てる千早似の子を見て聞く。

律子「てゆーか…どこから拾ってきたのよ？」

美希「んー…」

根本的な疑問である事を聞く律子に美希は唸った後に…

1分経ち…

美希「（にこっ）」

龍騎「（あれ、忘れたな）」

インペラー「（忘れてるな…）」

律子「ちょっとハリセン持って来て」

真美「ラジャー」

キラキラと輝かせる笑顔をする美希に龍騎とインペラーは悟り、律子は真美にそう指示し、真美も敬礼した後にハリセンを持って来る。

そしてはたかれた後に思い出した美希は話す。

帰国前日

美希「フフフン　フーフフー　…の？」

鼻歌を歌ってご機嫌で歩いていた美希はある奴に視線が止まった。

座っている千早似の子であった。

美希「何コレ？お人形さん…かな？」

疑問を浮かべながらも美希は千早似の子に近寄り…

美希「ちよつとカワイイかも…」

そう言つて右手を伸ばすと…

がぶ

右手を噛まれた。

パーン

その後に美希の隣にお面をかぶつた2人が来て大当たりと書かれた横弾幕を広げた。

その後、社長とゾルダに部族の首長が来て首長が千早似の子の事について話す。

首長「森で拾つたんじゃが…ばいんばいんな子にかみつくクセがあ

って困つとるんじゃない？…貰ってくれんかの？」

美希「ばいんばいん？」

首長の言葉に美希は噛まれながら分からない顔で言う。

社長「ふうむ…しかし連れて帰るわけにもいかんしな…」

ゾルダ「と言うか律子ちゃんが認めるかね？」

美希「んー」

困った顔をする社長の後にゾルダが律子を思い浮かべて言い、美希がまだ右手に噛み付いてる千早似の子をぶんぶん降るが離れない。

すると首長がすぐに美希が即決する言葉を言う。

首長「今なら又シがよく食べとるおにぎりをつけるぞい」

美希「もらっのー！」

社長「えっ!?!？」

ゾルダ「ありやりや、そう言われたら美希ちゃん即決しちゃっよ」

おにぎりー？と千早似の子をそのまま鞆に入れ、社長は驚き、ゾルダは苦笑した口調で言う。

回想終了

美希「 …… と言う訳なの（にばーー） 」

律子「（キリキリキリキリ）#」

龍騎「どろどろ…」

インペラー「落ち着け、美希のおにぎり好きは仕方がないって、」

バットの絆創膏を付けて笑顔で話し終えた美希に律子は静かに怒り、それを龍騎とインペラーが宥めに入る。

数分後、律子が落ち着いた後に千早が呼ばれた。

龍騎「と言う訳なんだよ」

千早「…話は大体分かりました」

龍騎の説明に千早はそう言った後にけど…と続ける。

千早「何で私が飼わなきゃいけないの!？」

千早似の子「くっくっ（パシパシ）」

律子「まあ、その…いろいろとね…?」

頭に自分に似た千早似の子に叩かれながら訳を聞き、それに律子は苦笑する。

律子「わ、私でもよかったのよ?でも…ホラ、あの…体型的に…ね?ダメらしくて…」

千早「(ぶつぶつぶつぶつぶ) #」

千早似の子「くっ?」

言葉を濁して言う律子に大体分かった千早は#マークを付け、千早似の子は千早を見る。

美希「千早さんはス「はたくわよ?」」

千早似の子「?」

美希が言おうとして千早が低い声で遮り、それに龍騎たちは冷や汗を流す。

千早「まあ…飼うのはいいですけど、すぐにつてわけには…」

そう言った後に千早はソファアに座り、千早似の子はすたと千早の頭から下りる。

話し合っている千早から離れ、周りを見ていると小鳥に目が向く。

小鳥「コーヒーマルク切らしちゃってるし、これでいいかなー?」

正確にはその手にある牛乳にだが…

千早似の子「(じーーーーー)」

小鳥「ふえ?な、何……?」

見られてる事に気づき、小鳥は戸惑うが千早似の子はまだ見る。

千早似の子「(じーーーーー)」

小鳥「あう、はうう…」

キラキラした目で見る千早似の子に小鳥は顔を真っ赤にする。

ひよい

千早似の子「くっ?」

そんな見ていた時に千早似の子はいきなり背中を掴まれる。

律子「ほーら！お仕事の邪魔しちゃダメでしょー!」

千早似の子「(くわっ)」

めっと叱る律子に千早似の子は驚き、くわっとする。

律子「あなたのはこっちにあるから」

そう言っつて律子は千早似の子をパンとスプを置いたテーブルへ下ろす。

その隣で亜美がおいしそう…と呟いている。

律子「はーやれやれ…」

千早似の子「……」

左肩を揉みながら離れる律子を千早似の子は見た後にパンとスープに目を向ける。

それ等をじっくり見た後に匂いを嗅ぎ、棒でつんつんした後には害はないと判断したのかパンを手に取りもくもくと食べ始める。

小鳥「(だばだばだばだば)」

龍騎「ちよっ！小鳥さん！鼻血鼻血！！」

インペラー「滝の様に流れてる！」

それを見ていた小鳥が鼻血を出して、龍騎とインペラーが慌ててテイツシュを詰める。

ナイト「しかし…こいつ等は何だ？アイドル達に似てるが…種族として『ぶちどる』とでも命名するか？」

龍騎「まあ、確かにぶちつとしたかわいいアイドルだよな」

インペラー「…そうすると…何か他の子に似たぶちどるも出そうだな…」

ナイトがあふうとゆきばに千早似の子、千早似ぶちどるを見てそう言い、龍騎も同意して、インペラーがそう呟く。

亜美「んでんで！千早おねーちゃん！名前とかどーすんの？もう決まった？」

千早「そうねえ…」

そんな3人の会話を尻目に亜美がそう聞き、千早は考え…

千早「(ピーン)ゴンザレス」

亜美「えー…なんかそれオツチャンみたいだよー」

千早「ごんたくれ」

亜美「ゴンから離れようよ…てゆーか名前ですらないよー?」

龍騎「(千早って…良太郎君と同じなんだな…:」

千早のネーミングセンスに龍騎は別世界の自分の仲間を思い出して
心の中で呟く。

同時刻、別世界

良太郎「はつくしゅん!」

モモタロス「おいおいどうした良太郎?いきなりクシャミして」

デンライナーで皆と話していた良太郎がいきなりクシャミしたのに
モモタロスが訝しげに話しかける。

良太郎「いや、誰かに噂された気がして…何か名前関連で」

リュウタロス「確かにそれで噂されても仕方ないよね」

ウラタロス「（と言うか何でそんなに近いの？）」

キンタロス「（そんだけ良太郎と同じネーミングセンスを持った人がおるちゅうわけやな）」

良太郎の言葉にリュウタロスが笑って言い、ウラタロスはツッコミを入れて、キンタロスはどんな人物なのか想像する。

戻って765プロ

ナイト「他の名前にしろ、後ゴンから離れる」

千早「そう言われても…」

インペラー「それにもう決まってるようだよ」

ナイトの言葉に千早は困った顔をして、インペラーが千早似ぶちどるを指して言う。

律子「ほらこつちよちひゃー」

千早似ぶちどる　ちひゃー「くっ」

亜美「ホントだね」

律子の呼びかけに千早似ぶちどる、ちひゃーは返事してとててと律子を追いかける。

龍騎「まあ、名前が決まって良かったな」

ナイト「美希には威嚇してるが…」

おいでー？と手を出す美希にシャーと威嚇してるちひゃーを見て龍騎はそう言い、ナイトはその様子を見て言う。

インペラー「反面、気に入った子には頭に抱き付いて叩いてスキンシップを取ってるよな」

タイガ「何時の間にか変わった子達がいるね」

龍騎「おっ、タイガ、仕事終わったのか？」

千早の頭に抱き付き、ペしペし叩くちひゃーの様子にインペラーがそう言うどひょっこり現われたタイガがぶちどる達を見て、龍騎はそう聞く。

タイガ「うん、真と響も元気にやったよ」

龍騎「そうか、2人は仲が良いからな、雪歩がいると何か響と一緒に怖くなるけど」

ミラーライダーズ「(ホント鈍いな龍騎)」

タイガの言葉に龍騎は笑って言い、後半の言葉にインペラー、タイガ、ナイトは心の中で呟く。

その間に律子の頭から離れたちひゃーがあふうに近寄る。

ちひゃー「くっ」

あふう「ナノ！」

お互いに挨拶を返すと…

あふう「（じーーーーー）」

ちひゃー「？」

あふうがちひゃーのある部分を見て、ちひゃーはなぜ見てるのかに疑問を浮かべていると…

あふう「（ハン）」

ちひゃー「（ピシッ）」

笑うあふうにちひゃーは何を見ていたのか分かって怒り…

ちひゃー「くっくっくっー！#」

あふう「ナノナノナノー！」

大喧嘩を始める。

龍騎「うわあ！いきなりどうした!？」

インペラー「（なんとなく分かった）」

タイガ「大差ないと思うんだけどな」

ゆきぼ「？」

ナイト「気のせいだと思え」

いきなりの喧嘩に龍騎は驚き、インペラーは原因が分かり、ゆきぽを抱えたタイガはそう呟き、ナイトが言う。

その後、喧嘩を収めた後にちひゃーと千早は自分の家へ帰ったのであった。

亜美「行っちゃったねー…」

真美「うん、ちよっち寂しいね」

見送った双海姉妹は寂しい顔でドアを見る。

律子「何言ってるのよ。すぐにまた会えるでしょ？」

龍騎「そうそう」

亜美&真美「え？」

律子と龍騎の言葉に双海姉妹は疑問の声をあげる。

タイガ「そりゃあ765プロの仲間だから明日にまた会えるさ」

亜美&真美「そうか！」

タイガの言葉に分かった双海姉妹は笑顔になる。

数分後

龍騎「あゝやつと終わった」

仕事を終えた龍騎が自分の家にミラーワールド経由で戻り、肩を回した後に変身を解く。

真司「ただい「マスターあああああ！」「ぐほっ！？」

言おうとして自分の腹に突進して来たドラグレッダーに真司は呻く。

ドラグレッダー「お願いがあるんです！だから寝ないでください！
！」

デストワイルダー「いや、気を失ってるんだよ君が原因で！」

ゴルドフェニックス「だから落ち着け」

ゆっさゆっさと気を失った真司を揺らすドラグレッダーに白銀の首まで来る髪に青の白い虎のマークが入ったビスチエを着た女性なデストワイルダーがツツコミを入れ、黄金の不死鳥のマークが入った袖なしのオレンジ色のドレスを着た女性なゴルドフェニックスが宥めに入る。

ドラグレッダーが落ち着いて、真司が目覚めた後に全員1つのテーブルに集まる。

なお、真司は社長と大久保の計らいで広い部屋のあるマンションに住んでいる。

真司「それで何だ？ドラグレッダー？お願いって？」

バイオグリーザ「まあ、拙者達のお願いでもあるんでござるが」

白鳥のマークが入ったメイド服を着た女性なブランウイングの入れた紅茶を飲んだ後にドラグレッダーに聞く真司に黄緑のくのいちの服を着たバイオグリーザが指をツンツンさせて言う。

それにダークウイングとボルキャンサーも頷く。

マグナギガ「実はね…」

首を傾げる真司にどことなくリリなのシグナムに似た顔つきの緑色の膝まで来る髪で牛のマークが入ったパーカーを緑色のタンクトップの上に羽織った女性なマグナギガが苦笑して言った事に真司は驚く。

翌日

律子「どうしたんですプロデューサー？」

亜美&真美「何があるの？」

千早「何かあつたんですか？」

事務所に集まった双海姉妹に律子、千早が呼ばれた龍騎を見て聞く。

ちなみに美希もいるがソファーにあふうと一緒に座って寝ている。

龍騎「あゝ今来てる皆に新しい仲間を紹介したいんだ…ちなみに社長には電話で話してその仲間になる子を写真で知らせて了承を貰っ

てるから、ちなみに小鳥さんにも話し済みで…入って良いよ」

頭を掻いて龍騎はそう言ってからドアの外にいる子に言うと言って来たのは…

ドラグレッダー 龍美「城戸 龍美たつみです！よろしくです！」

ダークウイング 翼「城戸 翼よくと申します。宜しくお願ひしますわ」

ボルキャンサー 美蟹「城戸 美蟹みかやで〜美しい蟹と書いて美蟹やで〜」

バイオグリーザ メオ「拙者、城戸 メオと申す。よろしくでござる」

名前を変えたドラグレッダー達で亜美と真美はよろしく！と挨拶して、千早は観察して、律子にはぎやかになりそうと呆れた顔で見えていた。

ベルデ「いや〜中々賑やかになりそうだな」

龍騎「お前はお前で何時の間にいるかな（大丈夫かな？）」；

龍騎の隣に何時の間にかいたベルデが笑って言い、龍騎はベルデに言った後にハラハラしながら美希とあふうに強烈なライバル心をつつけてる龍美を見て心の中で言う。

ミラー3：ちひゃーと千早と新たな新人アイドル（後書き）

ユウスケ「色々大変だよな城戸さんって」

タクミ「そうですね…」

ワタル「と言うかあの人は鈍すぎですよね」

シヨウイチ「苦労が増すな…」

ミラー4：伊織とやよいと分裂ぶちどる？（前書き）

剣崎「今回は城戸から離れたお話だな」

巧「原作じゃあな…」

ミラー4：伊織とやよいと分裂ぶちどる？

龍騎「と言つ訳で765プロにテレビ来たぞ!!」

亜美&真美「いえ〜い!!」

ちひゃー「くっ」

じゃーんと置かれたテレビに龍騎が言つてそれに双海姉妹は喜び、ちひゃーがテレビの裏に引つ付く。

律子「それじゃあ早速見ましようか」

タイガ「どんなのがやってるんだ？」

ちひゃー「くっ」

早速、律子はテレビの電源を付け、タイガがそう言った後に出るのは

無人島DE生活!!

72TV日曜特番

このあとすぐ!

やよい』(キラッ)』

伊織』……………」

タイトルと共にポーズを取るやよいとその後ろでやよいを見ている伊織が映った。

龍騎「そう言えば…2人共、今無人島だったけ。」

インペラー「だな。」

タイガ「他に誰が行ってたっけ？」

ナイト「確かガイにオーディンにアビスに王蛇だったな」

テレビを見て思い出した龍騎にインペラーも冷や汗を流し、タイガの問いにナイトは答える。

此处で変わって伊織達へ行く。

side 伊織

テレビ…これだとパソコンね。パソコンの前の皆さんこんにちは水瀬伊織です。

私は今、なぜか無人島にいます。

今こうやって波の音や鳥の鳴き声がしています。

ことの発端は彼女、高瀬やよいに…

回想

伊織『んー！んー！』

「やよい」

袋に入れられてやよいに引かれる伊織

回想終了

…と回想の通りになかば強制的に連れて来られたのです。

此処でナレーションに返すわ。

side 伊織 終了

ガイ「まあせつかくだし楽しんでいこうぜ！な？」

伊織「アンタは馴染み過ぎよバカ犀#」

海を見ている伊織に話しかけるガイに伊織は振り向かずに言う。

と言う訳で無人島生活2日目

「やよい」とれたうー！！」

海からやよいが銚子で突いた魚を持って飛び出る。

「アビス」やったなやよい！」

その後にアビスも大量の魚を網に包んで飛び出て言う。

「やよい」きょーおもおっさかつなー たいりょーたいりょー」

ガイ「やよいの奴適応してるな…それに引き換え…」

お魚を引き摺るやよいを見てガイは呟いた後に雨宿を作っている伊織を見る。

トントントン、ガンッ

伊織「(うー)」

ガイ「(流石はスーパーウルト(略)美少女アイドル、かわいいな)」

釘打って指を打った伊織にガイはそう思う。

765プロで

龍騎「いや！手当てしろよ！」

龍美「誰に言ってるんですか？」

龍騎「何か突っ込まなきゃあいけない言葉が流れた気がして…」

ツッコミを入れる龍騎にお菓子をほお張る龍美が聞き、そう返す。

戻って無人島

王蛇「そっちはどうだ？」

オーデイン「こちらは食べられる物を集めて置いたぞ」

アビスが伊織の指を手当てしている間に王蛇とオーディンがその手に大量に果物を持って来る。

やよい「こつちも大量ですよ！」

ガイ「雨宿も作っておいたぞ」

やよいとガイがそう言っただけで、見せた後に夕食作りが始まった。

やよい「それじゃあ私お鍋の用意してるから伊織ちゃんはお魚の調理をお願いしまーっす！」

伊織「えっ！？（デチヨン）」

お鍋を持ったやよいがそう言っただけで伊織にお願いし、それに伊織は驚いた後に魚を見て、包丁を持ち、恐る恐る魚に包丁を…

ぶにゅ

オーディン「落ち着け、我がやるからじっとしておくのだ」

魚に差し込んだ時点でオーディンに抱き付き、ガタガタと振るえる伊織にオーディンは伊織の頭を撫でた後に調理にかかる。

そしてご飯を食べた後の就寝時間

伊織「や…やっとならねられるわ…もうクタクタ…」

ふらふらとしながらねおつとする伊織だったが…

あったのはゴザに草が引かれた思いつきり寝心地悪そうなベッドであつた。

やよい「オヤスミー伊織ちゃん」

伊織「……………それでいいのやよい？」

ミノムシな寝袋に入ったやよいに伊織はそう言う。

王蛇「さて、寝るか」 ハンモック

ガイ「だな」 同じく

アビス「オヤスミー」 手作り草のベッド

オーデイン「……………」 手作り椅子に寝転がる。

伊織「ちよつと待ちなさいよ#」

ミラーライダーズの奴に伊織は怒った後にアビスとオーデインが作った草のベッドで寝たのであつた。

そんなこんなで4日目

伊織「…よし！」

目の前の奴に伊織は腕を組んで言う。

王蛇「ほーう…器用だな」

伊織「当然でしょ！」

目の前の木彫りうさちゃんに王蛇は関心の声をあげ、作った本人である伊織は腕を組んだまま胸を張って言う。

王蛇「これで後4日は乗り越えられるだろう…」

ヒュ、ガッ！

それ見た王蛇はそう呟いた後に飛んで来た包丁を首を反らして避け、それは王蛇の後ろにいた蛇に当たる。

伊織「なにボーっとしてんのよ。危ないわねえ」

王蛇「分かっていたからあえてさせたんだよ」

投げた本人である伊織の言葉に王蛇はそう返す。

その後、伊織はライダーズが仕事をやるので暇になり、無人島を探検する事にした。

すると…

ポッポッ

伊織「ヤダもう…スコールかしら？」

探検していた伊織は降って来た雨に眉を顰めた後に…

ザアアアア

本格的に降って来た。

伊織「ああもう！着替え少ないんだから勘弁してよねー！」

それに伊織は慌てて雨宿り出来る場所を探して走ると…

目の前に古いお堂が映った。

伊織「何これ！？お堂…？まあいいわ。ここにしましょ。」

驚いた後に伊織は扉を開けてお堂の中に入る。

伊織「あー…もう、一時はどうなるかと思ったわ…」

入って早々に伊織は床に座り込み、少し休憩した後立ち上がる。

伊織「…でもやむのかしら？」

ドアを開けて雨の様子にそう言う伊織の後ろに黒い影が…

伊織「いやあああああ！…！」

はたして伊織に何が！？次回に続く！

伊織「勝手に終わらせるんじゃないわよーっ！…！」

すみませんでしたm()m()m

気を取り直して…

伊織「な、何よ…いつたいなんなのよ…」

いきなり現われた黒い影に伊織は振るえ…

伊織「…あれ？」

目が暗闇になれるとそこには…春香似ぶちどるがいた。

春香似ぶちどる「かつかー!」

元気良く鳴く春香似ぶちどるに伊織は目を丸くした後に我に返り…

伊織「な、何よアンタ…?子供がなんでこっ「かつ?」「

びよん(春香似ぶちどるがジャンプする音)

もちゅっ(伊織の顔に春香似ぶちどるがくっつく音)

伊織「#* : ^ + #” @、 + # + \$ +” +! ! ! ! !」

いきなりもちゅくとされた伊織は声にもならない叫びを上げ、ドタンボタンと動く。

はたして伊織の運「だから勝手に終わらすなあああ!」「…またすいませんでした! ! m (| — | :) m

伊織「だっしやあああ! ! !」

春香似ぶちどる2「かつか！」

春香似ぶちどる3「かつー！」

伊織はこれでもかと言う程全力で走り、それを春香似ぶちどる集団は追いかける。

伊織「（も、もうダメだわ！やよい…っ！助けてやよいーっ！）」

追いかけられる中、伊織はやよいに心のSOSを送る。

やよい + はと言つと…

やよい「うっうー！」

アビス「しぶといないっ！」

やよいとアビスは巨大な魚と戦っていて…

王蛇「なかなか骨のある果物だな」

ガイ「って言うか硬いなこの枝」

オーデイン「そうだな」

王蛇、ガイ、オーデインは巨大な果物の採取に苦戦していた。

その後、巨大魚を取ったやよいとアビスは海から出て来る。

ポツポツ

やよい「あっ、雨やんだー」

アビス「ホントだな」

さっきまで勢い良く振っていた雨が止み、やよいとアビスは上を見上げ…

伊織「やよいいいイイイ！！！！」

春香似ぶちどる1「かつか！」

春香似ぶちどる2「かつかー」

春香似ぶちどる3「かつかつかつ！」

やよい「伊織ちゃん」

アビス「なんじゃありやあああああ！？」

そこにドドドドドと伊織と春香似ぶちどる集団が来て、アビスが驚いている隣のやよいは驚かず伊織だけを見ていて…

やよい「おみやげですー」

伊織「あらありがとっ…ってちがーっ！っ！」

ぶうんと巨大魚を伊織の方にやよいは振り、それに伊織が礼を言って我に返った瞬間…

…ウウン

アビス「あっ」

やよい「？」

巨大魚に伊織は乗っかられました。

それが私の最後の記憶でした（by伊織）

数分後

伊織「生臭っ！（デチヨン）」

そう言っつてオデコに絆創膏を張られた伊織がガバツと起き上がる。

やよい「あ、オハヨー伊織ちゃん」

オーディン「目が覚めたか」

それに気づいたやよいとオーディンが声をかける。

伊織「…え？アレ…？夢…？」

王蛇「何言ってるんだお前？」

ハテナマークを浮かべる伊織に王蛇はそう言っつ。

アビス「（あれだな…）」

やよい「待っててくださいー今ご飯の用意するからもうちょっと寝
てていいですよー?」

伊織「(まっいつか…(あ、うん…ありがとう)」

アビスは心の中でさっきの出来事を思い出して呟き、やよいがそう
言い、伊織は礼を言ってやよいの方を向き…

伊織「(あつ、夢じゃなかった)」

置かれた巨大魚に伊織はそう呟いた。

伊織「夢じゃない…ってことはあのちっこい生き物は!?!?!ど!?!?」

やよい「あの子ですか?」

起き上がる伊織にやよいは言う。

やよい「伊織ちゃんの足元にいますよ?」

春香似ぶちどる「かつかー?」

伊織「うわああ!?!?!アレ?」

自分の下にいるお鍋をかぶった春香似ぶちどるに伊織は驚いた後に
ある事に気づく。

やよい「なんかお日様が苦手なんです。しょうがないからお鍋で隠
してるんです!」

伊織「え？ああそう…いやそうじゃなくて…」

春香似ぷちどる「かつかー？」

やよいの言葉に伊織は納得しかけて近寄って来る春香似ぷちどるをにっししながら聞きたかった事を聞く。

伊織「アレだけいっぱいいたの…どうやって戻した…の？」

やよい「聞きたい？」

伊織「ゴメンナサイ！」

春香似ぷちどる「はるかつか？」

振り向かないで聞くやよいのあまりの威圧感と目を逸らすオーデイ
ンとガイ、アビスの様子に伊織は謝った。

そして最終日

伊織「あー…やっと帰れるわー…」

王蛇「そんなに辛かったか？」

迎えの船に乗って涙をダバダバ流す伊織に王蛇はそう聞く。

伊織「…でも本当にその子連れて帰るの？」

やよい「はいっ！」

伊織は振り返って、やよいの膝の上で寝ている春香似ぶちどるを見て聞くとやよいは言う。

やよい「だってあそこに1人じゃかわいそうかなーって…それにこの子も伊織ちゃん好きみたいですし！」

伊織「好かれても迷惑なだけよ？まったく…やよいにはかなわないわね…」

アビス「確かにそうかもな」

やよいの言葉に伊織はふうーと息を吐き、アビスは苦笑した口調で言う。

そんな訳で伊織とやよい + の無人島生活は終わったのであった。

ミラー4：伊織とやよいと分裂ぶちどる？（後書き）

良太郎「新しい子が出て来たね」

五代「変わった子だね」

津上「手伝いには良いよね」

アスム「ちゃんと動くでしょうか…」

ミラー5：春香とはるかさんとフチ切れ律子（前書き）

剣崎「ホント大変だな城戸は……」

巧「今回はさらにだな」

ヒビキ「真司も大変だな」

ミラー5：春香とはるかさんとフチ切れ律子

リュウガ「どうなってるんだ？」

ライア「俺の占い通りだな…」

シザース「ってか何でこんな状態なんだ？」

目の前の事務所の光景にそれぞれ仕事を終えたリュウガ、ライア、シザースが口々にそう言う。

真「おはようございまーす！菊池真でーす！」

そんな彼等の後ろから真が元気良く挨拶した後に…

真「って……うおっ!？」

3人の前に出て、驚く。

目を回してきゅ〜になってる春香とピヨピヨと が回っているガイとインペラー、アビスに倒れた双海姉妹、レオ、龍美、美蟹と散らかったデスクや椅子に道具の山を見ている律子と龍騎、ナイト、王蛇、翼がいた。

真「ちょ、ちょっとどうしたの春香!？何があったの!？ねえ!？」

慌てて真が目を回してる春香を抱えて聞く。

春香「はっ、はるかさんが…(カクッ)」

真「はるかさん！？どうしたの春香！？」

リュウガ「何があつたんだ？」

王蛇「それは…俺達が無人島のロケを終えて2時間ほど前に帰った時だった…」

何かを呟いて気を失う春香に真が驚いている間にリュウガが代表でこの状況になつた理由を聞き、王蛇が言う。

2時間ほど前

伊織「やっだいまー…」

龍騎「お帰り」

律子「あ、伊織ロケお疲れ様」

疲れた表情で事務所に来た伊織に龍騎が気づいて言い、律子は労いの言葉をかけた後に…

春香似ぶちどる「かつか！」

律子「…ってまた妙なものを拾ってきてー…」

やよいが抱えてる春香似ぶちどるに律子はそう言う。

やよい「それですね。この子の名前に名前をつけたいんですけど…」

春香「はるかさんがいいと思うよ」

やよいのお願いににょんと出て来た春香がそう言う。

律子「いや春香…それは…」

春香「はい！決定ー！」

オーデイン「強引だな」

アビス「そうだな」

律子が言おうとするが有無を言わせず、春香がそう言い、オーデインとアビスはそう言う。

春香「わっほーれ」

はるかさん「かつかー」

律子「いやでも…名前同じだと色々混同するし…アナタと」

ナイト「それより何でひらがなにした名前を付けるんだ？」

はるかさんを胸上げする春香に律子が言い、ナイトが聞く。

春香「だってこの子は千早ちゃんに似てるでしょ？」

ちひゃー「くっ？」

インペラー「そりゃあ似てるな」

春香「で、この子は私にちょっと似てる」

はるかさん「（もにゅもにゅ）」

龍騎「そうだな」

ナイトの問いに春香は左手でちひゃーを指してインペラーはそう言い、次に春香は頭にくっ付いてるはるかさんを右手で指し、龍騎は同意する。

春香「だからこの子ははるかさん！（キラキラ）」

律子「……」

輝く笑顔で言う春香に律子や他のメンバーがなんとも言えなかった時…

バーン！

千早「やはり私はゴンザレスが！」

律子「却下」

春香「ごめん、千早ちゃんの提案でもその名前は却下」

千早「そう…」

龍騎「どんだけゴンにこだわるの…」

タイガ「だよね。」

勢い良く来た千早に律子は速攻で却下し、春香も申し訳ない顔をしてから却下する。

落ち込んでる千早に龍騎とタイガは冷や汗を流す。

伊織「…で、本当にはるかさんって呼ぶの…?」

亜美「そうじゃない?」

ふんふーん?とご機嫌な春香を見て伊織はそう聞き、亜美がそう言う。

春香「はっるつかさーん ご飯とお水持ってきたよー」

伊織「(ぶっ!)」

龍美「どうしたんですか?(モグモグ)」

翼「あなたも良く食べますわね。」

美蟹「ってか3袋目やで。」

春香の出した奴に伊織は吹き、お菓子を食べながら龍美が聞くと翼はそう言い、美蟹がそう言う。

伊織「だ、ダメよ春香!その子に水あげちゃ!」

龍美の問いに答えず伊織は慌てて止め様と駆け出すが…

春香「あっ」

どんがらがっしょーん

何も無い所でこけ、そして水がはるかさんに降り注ぐ。

伊織「（あーーーーー）」

メオ「（嫌な予感がするでござる…）」

戻って2時間後

真「……はるかさんはなんで増えるの？そこに疑問もとうよ…」

亜美「さあ…？」

ライア「聞く限り、不思議な生物だなぷちどるは…」

シザース「確かに」

真の言葉に亜美はそう言い、ライアとシザースははるかさんやちひやーを見て言う。

真「なんで…いったいなんなの？この子って…」

亜美「うーん…よくわかんない」

リュウガ「謎は多いって事か…」

寝そべってるはるかさんを見てそう言う真に亜美はお手上げと言い、リュウガは顎を摩ってそう言う。

真「…それで…この子はどうやって戻したの？」

亜美「あー…えっとね。それは…」

はるかさんを指差して聞く真に亜美が言おうとして…

がっ

律子「聞きたい？」

顔に影を差して言う律子に真は振り向けなかった。

またまた2時間前

春香「いやははは、またやっちゃった」

伊織「（ガクガクガクガク）」

美蟹「あわわわわわわ…」

翼「何んですかこれは!？」

たははと苦笑する春香の後ろで起こってる事に伊織は振るえ、美蟹は口を呆然と開いて、知らないメンバーは驚く。

春香「どしたの伊織に皆?変な顔をして?」

通り過ぎた後には…踏まれた律子と龍騎がいた。

龍美「マスターああああああ！？律子さああああん！！」

翼「今は逃げるが先ですわあああ！！」

それに龍美が叫んだ後に翼が龍美の手を引っ張って伊織と逃げる。

伊織「はっ！そうだわっ！やよい！やよいならきつと…！」

前回の事を思い出し、伊織はやよいを探し…

見つけた瞬間…

伊織「やよいいいい！たあすけてええええ！」

ゆきぽを抱えたやよいに涙目で叫ぶ。

やよい「まっかせてください！伊織ちゃん！」

それにやよいはやる気満々で答えた後…

やよい「さあ！」

伊織「どうしろって言うのよーっ！！！」#

美蟹「飛び降りろって事かいな！」

ジャカジャカジャンと事務所の窓を開けて言うやよいに伊織は叫び、

美がそう言ったが開けていた。

その瞬間、翼がミラーワールドに飛び込んだ瞬間、メンバーははるかさん集団に飲み込まれた。

龍騎「あいたたた…」

律子「うはっ！何があったの!？」

頭を摩って龍騎は起き上がり、律子はメガネの右側にヒビが入っていたがぱつと飛び上がり…

律子「…って」

龍騎「うわぁ…」

そこには散らかった山に埋まるメンバーと何を逃れたナイト、オーディン、タイガ、翼、王蛇の姿があつて…

律子「(あ……プロデューサーから貰ったお皿……)」

その中に龍騎が見つつけて律子にプレゼントしたお皿があり…

ぷちん

その瞬間、律子の何かが切れた。

律子「こらーーーーー!!!!」

その瞬間、事務所の鏡が割れる程の律子の怒鳴り声が響いた。

律子「ふーーーーーふーーーー」

はるかさん集団「(ガタガタガタガタガタ)」

黒いオーラを纏い、荒い息を吐く律子にはるかさん集団は振るえ…

律子「整列!!(ぱぁん!!)」

はるかさん集団「(ザッ)」 整列する音

律子が手をパンとさせた後に…

律子「戻れ!!(ビッ)」

はるかさん集団「(ビュン)」 1人に戻る

両手を真横に広げるとはるかさんは元の1人に戻った。

そして現在

律子「…とまあ…そう言うわけでなんとなかったの…」

真「あは…は、大変だったね。」

はあとため息を吐く律子に真は苦笑して同情する。

ちなみに伊織はやよいとオーディン、タイガが介抱している。

真「…でもなんで律子の言う事聞いたんだろ？」

律子「私も分からないのよねえ……」

はるかさんを抱えて疑問詞を浮かべる真に律子もなんでかしらと人差し指を頬に当てて考える。

春香「きつと愛ですよ！愛！愛の力で戻ったんですよ！」

そこに復活した春香が自信満々にサムズアップして言う。

律子「(ゴゴゴゴゴゴゴゴ) #」

春香「……ってプロデューサーさんが……」

龍騎「えっ!?!」

ミラーライダーズ「(その嘘は苦しいだろ)」

律子の無言の怒りに春香はペコちゃん顔をして龍騎に擦り付け、ミラーライダーズは心の中でそう呟いた。

真「で、この子の名前、はるかさんでいいの?」

はるかさん「ヴぁーい」

律子「いいんじゃない?」

真の問いに一通り春香に説教した律子はそう言う。

亜美「はるっちゃんに1票!」

真美「はるにゃーに1票！」

律子「もういいから！」

名前を出す双海姉妹に律子は振り向かずになんと言ひ…

千早「やはり私はゴルブレスが！」

律子「アンタもしつこい！まだいたの！？」

ライア「どれだけごを付けたいんだ…！」

チヒャー！と名乗り出る千早に律子に叫び、ライアは呆れた口調で言う。

千早「で、でもまだゴメスとかごんべえとか…！」

真「はいはい…」

律子「退場」

今だに名乗り惜しい千早に律子の指示により真に押されて退場した。

なお、後日、春香が千早にゲームでの主人公の名前決めやペットで千早を訪ねる事になるが些細である。

させ、後日だが…はるかさんの世話はやよいが見る事になった。

春香はまたはるかさんを増やそうとするが龍騎や律子により厳しく

止められてるのであった。

ちなみに、伊織がはるかさんの戻し方の練習をしているのを小鳥は目撃したのであった。

くオマケくはるかさん騒動の後の真の家での会話

真「はあ…今日は別の意味で疲れたな…」

雪歩「お帰り真ちゃん」

響「お帰りだぞー」

真「あれ、2人共？遊びに来てたの？」

雪歩「ううん、真ちゃんが響ちゃんといないか確かめに…」

響「自分も大体同じ理由だぞ」

真「…」

雪歩「それで真ちゃん…今日、何かあったでしょ？」(ニコッ)「」

響「ちょっとお話しするぞー」(ニコッ)「」

真「いや、2人が思ってる様な事なかったからね…」

ミラー5：春香とはるかさんとフチ切れ律子（後書き）

真司「ホントに大変だった…」

巧「ご苦労さん」

シヨウイチ「真って子も苦労してるな…」

ワタル「（ですね）」

アスム「（それにしても…やよいさんってどうやって戻したんだろ？）」

サイドミラー1：龍騎とぶちどるとちよつとした休日（前書き）

ヒビキ「真司の休日だな」

良太郎「だけど…」

士「大体分かった…まただな」

真司「酷くない!？」

サイドミラー1：龍騎とぶちどるとちょっとした休日

龍騎「は〜今日は休日だな」

道路を歩きながらぐーと背を伸ばして龍騎は言う。

色々と忙しさもある日もあったが今日は皆の計らいで休みを貰ったのだ…

龍騎「…この子達と一緒にだけど」

はるかさん「かつかー！」

ちひゃー「くっ」

あふう「ナノー」

ゆきぽ「ぽえー」

そう呟いて龍騎は自分の後ろを付いて来るぶちどる達に頭を掻き…

龍騎「つかゆきぽ喋った!？」

ゆきぽ「」ぽっ」

驚く龍騎にゆきぽは顔を傾げる。

龍騎「まあ良いか…それにしても…」

気を取り直して龍騎は周りを見る。

ちよっとひそひそ話してる人がいてライダーである龍騎の耳には自分や千早達の事を言っていた。

龍騎「() やっぱりこうなるよな…() …皆、離れない様に付いて来るんだぞ」

はるかさん「ヴぁ〜い」

あふう「ナノー」

ちひゃー「くっ」

ゆきぽ「ぽー」

龍騎の言葉に4匹のぷちどるは返事をした後に移動を開始する。

ほとんどトラブルもなく逆に色々と人気で…

龍騎「…こんなに貰って良いのかな？」

ちひゃー「() ぽりぽり」

あふう「() がっがっ」

ゆきぽ「() コリコリ」

はるかさん「() もぐもぐ」

目の前のぷちどる4匹が貰った食べ物（むろんタダ）を見ながら龍騎は呟いた。

ちなみに今ちひゃーはひもの、あふうはおにぎり、ゆきぽはたくあん、はるかさんはウインナーを食べている。

浅倉「……………何やってんだお前？」

そこに元王蛇の浅倉が来る。

ちなみにこの小説に出ている王蛇は実は神埼が龍騎に新たに与えたカード『ライダーベント』で呼び出したライダーで他の13ライダーズ+アビスもそうなのである。

ちなみに今浅倉はOREジャーナルの影の従業員である。

龍騎「ああ、浅倉…休みだから散歩してるんだよ」

浅倉「ふう〜ん…んでそいつ等は何だ？」

龍騎の言葉に浅倉は頬をポリポリ掻いた後にぷちどる達を見る。

龍騎「ああ、この子達は最近事務所で飼ってるぷちどる達だよ」

浅倉「ぷちどる？」

龍騎の言葉に浅倉はぷちどる達をまた見る。

見られたゆきぽはびくびくして、あふうは欠伸び、はるかさんとちひゃーは顔を傾げてる。

浅倉「まあ…頑張れや」

そう言つと浅倉は手をひらひらさせて去つて行く。

龍騎「…あつ、あいつさりげなくちひゃー達の貰い物から一部取つてる」

見送つた後に龍騎はぶちどる達が貰つた貰い物が減つてる事に気づいて呆れる。

????「ぎゃおおおん！」

龍騎「!?この叫び声は！」

突如来た悲鳴を聞いて龍騎は走り出し、ぶちどる達も続く。

そして…

????「逃げるよ夢子ちゃん！」

犀型のオルフェノク『ライノオルフェノク』から赤色の服を着た少女の手を握つて逃げる少女が映る。

ドラグバイザー「ソードベント」

龍騎「しゃあ!行くぜ！」

すかさず龍騎はドラグセイバーを呼び出すと2人の少女を飛び越える。

少女1「龍騎プロデューサー!!」

龍騎「涼君! 夢子ちゃん! そっちに逃げるんだ!!」

ちひゃー「くっ! くっ!」

夢子「何あれ!?!」

少女、涼がライノオルフェノクを押さえる龍騎に驚き、引っ張って
いた少女、夢子と共にちひゃー達の所へ向かう。

龍騎「おりゃあ!」

ライノオルフェノク「ふん!」

ガギン!

龍騎が振り下ろしたドラグセイバーをライノオルフェノクは腕を受
け止めると龍騎を吹き飛ばす。

龍騎「なんて硬さだ!」

握っていた右手をぶらぶらさせて苦く言っ。

そこに…

ファイズ「はっ!」

そこにファイズが現われ、ライノオルフェノクを殴り飛ばす。

ファイズ「大丈夫か？」

龍騎「ああ……」

ライノオルフェノク「ぬおおおおー！」

ファイズの問いに龍騎が答えた後にライノオルフェノクは突撃して来る。

ファイズ「悪夢を終わらしてやるよ」

ファイズポインター「Ready」

そしてファイズはファイズポインターを右足に付け、ミッションメモリーを装填した後にファイズフォンの『ENTER』を押す。

ファイズフォン「Exceed Charge」

そして龍騎も王蛇のマークが入ったカードを装填する。

ドラグバイザー「ファイナルベント」

音声の後に龍騎が走り出すと後ろからベノスネーカーが現われ、龍騎は後方宙返りをしながら高くジャンプし、体を起こしたベノスネーカーが、毒液を浴びせる形でライノオルフェノクに向けて龍騎を弾き飛ばす。

ファイズ「はっ！」

ファイズも飛び上がった後にファイズポインターからライノオルフエノクに向けて赤い光線が打ち込み、赤い円錐がライノオルフェノクを捕獲する。そして、飛び蹴りの体勢でファイズは円錐に飛び込み…

龍騎「おりゃあー!!」

ファイズ「はあああああ!!!」

龍騎のベノクラッシュとファイズのクリムゾンスマッシュが決まり、ライノオルフェノクはの紋章と共に全身を青い炎が燃やし尽くし、灰となった。

ファイズ「ふう…」

龍騎「サンキューファイズ」

手首をスナップさせるファイズに龍騎はそう言う。

ファイズ「んじゃ俺、仕事あるから」

ファイズはそう言うとき来たオートバジンをバイクモードにした後に乗って去って行く。

涼「龍騎プロデューサー!」

そこにぶちどる達と来る涼と夢子が来る。

龍騎「涼君に夢子ちゃん、大丈夫だったかい？」

涼「あつ、はい」

夢子「涼の叫び声にあいつが驚いた後にすぐさまね…」

龍騎の安否を聞く問いに涼は頷き、夢子の言葉に涼は顔を赤くする。

彼女達は876プロのアイドル達で龍騎と仕事で何度も合った事がある。

それに涼は律子のいとこで仕事以外でも会っているのだ。

涼「それにしてもこの子達がぶちどるか…」

あふう「ナノ？」

夢子「かわいいわね」

ゆきぽ「ぽえー」

最初に休んだ公園で涼はあふうを持ち上げて眩き、夢子はゆきぽの頭を撫でる。

龍騎「俺達もどこで生まれたのか分かんないんだよね」

夢子「ふうくん」

涼「（何かこの先、律子姉さんに似たぶちどるが出そうだな…まさかね）」

龍騎と夢子が話してる隣で涼がそう予想してぶんぶんと顔を横に振

るがその予想が当たる事になるのはこの時の本人は知らない。

龍騎「それじゃあ俺達は戻るよ」

涼「あつ、それじゃあ僕も」

夢子「涼が行くのなら私も行くわ」

龍騎の言葉に涼と夢子がそれぞれ言った後に765プロへ戻ったのであった。

龍騎「ちよつとゆきぽちゃん、穴ほつちゃ駄目！あふうも走り回らない！美希もちゃんと見て！」

涼「うわぁ……」

夢子「元気爆発ね」

そこではしゃぎまくるあふうや驚いて穴を掘ろうとするゆきぽを停止するのに奮闘する龍騎を見たり……

龍騎「春香ちゃん！不用意にはるかさんを増やさないでって律子ちゃんに言われたでしょ！」

春香「あはは……」

ふえまくったはるかさんを前に龍騎はそう言って春香を説教する。

夢子「さらに苦勞してるわね龍騎プロデューサー……」

涼「ホントだね。」

それを見て2人は冷や汗を流したのであった。

サイドミラー1：龍騎とぶちどるとちよつとした休日（後書き）

ヒビキ「と言う訳で城戸のちよつとした休日でした」

渡「あれ…休日かな…」

アスム「見えませんね…」

剣崎「だな…」

ミラー6…響と貴音とぶちぶると「タシ」(前書き)

真司「今回は響と貴音の初登場だね」

カズマ「(まあ前者はオマケで出てるけど)」

真司「ちなみに俺…出番後半1回です」

ミラー6…響と貴音とぶちむるとコタツ

side 響

はいさい！自分は我那覇 響！沖縄から来たんだぞ！

職業はアイドル！けっこー売れっ子なんだぞ！

同じ事務所にいる雪歩とちよつとしたライバルなんだぞ

今日は美希に呼ばれて事務所にいるけど…

此処でナレーションに返すぞ。

side 響 終了

響「……ねえ…ここ事務所だよな？」

美希「そうだよ〜」

響はコタツに入った状態で目の前にいる美希に聞く。

やよい「は〜いお鍋できましたよー」

そこにお鍋を持ったやよいが来る。

響「……ねえやよい〜、いいのか？こんなことしてて…」

やよい「さあ〜？」

お鍋をコタツの中心に置くやよいに響は聞いて、そう返される。

美希「いいのいいのー今日はうるさいのもいないしー」

響「美希はもう少し緊張感もとうよ」

ほへ〜とする美希に響はそう言う。

貴音「響、そのような些細なこと、気にしてはなりません」

龍美「その通りです」

何時の間にかいてお代わりを要求する貴音がそう言い、龍美が同じくお代わりを要求して同意する。

響「ってかなんで貴音までいるんだよ？後、最近入った新人も？」

貴音「秘密です」

龍美「ご飯の匂いがしたので」

響の問いに2人はそれぞれ答える。

美希「まーまー、いいのいいの多いほうが楽しいの」

響「美希は平和だな…」

笑顔で言う美希に響は呆れた顔で言う。

貴音「大らかであるということとはよいことです。響も学びなさい」

美希「だよー」

お茶を飲んでふつと一息付く貴音に美希も同意した後：

美希「でも呼んでもいないのになんているの？龍美ちゃんはともかく」

貴音「秘密です」

にぱつと笑って言う美希に貴音はぶいっと顔を逸らす。

あふう「ナノ！」

響「お？」

そんな時、あふうが来てそれに響が気づく。

響「おー！こいつが真の言ってたぶちどるか！カワイイなー！」

あふう「ナニヨー」

響がむにーとあふうの頬を掴んで引っ張り、それにあふうはされたまま鳴く。

美希「そうそう、種族名命名したのナイトさんでソレは事務所で飼ってる1匹なのー」

響「へえー」

あふう「?」

手をひらひらさせて言う美希に響はひょいとあふうを持ち上げて見て…

響「いいなコレ！気に言ったぞ！よろしくなもじゃげ！」

龍美「ちゃんとした名前ありますよ」

ぎゅつとあふうを抱き締める響に龍美はそう言う。

響「そうかそうか、君はあふうって言うのかー」

あふう「ナノ！」

抱えたままコタツに入り、美希からあふうの名前を言ってあふうは答える様に鳴く。

千早「やっぱりゴルベージがいいわよねえ…」

レオ「いや、まだ引張るでござるか」

龍美「と言うか何時の間に…」

何時の間にかコタツに入ってる千早に同じくいたレオがツッコミをいれ、龍美がそう言う。

その後、やよいにより千早は退場された。

響「カワイイなー貴音もそう思うだろ？」

ぶによーとあふうの顎をコタツに押し付けながら響は貴音に聞く。

貴音「食べ物でない物など興味ありません（しじょ）」

響「何気にひどいな貴音」

お茶を飲んでから言った貴音に響はそう言う。

龍美「ご馳走様です！」

レオ「おいしゅうございました」

響「っはーごちそうさまー…で、いまさらだけども」

あふう「ナノー」

3者別々にそう言つと響が美希を見る。

響「本当にいいの？事務所にコタツ置いて…」

美希「ほーん？」

そう聞く響に美希はあふうと欠伸した後…

美希「だってすっごく寒かったの！（キリッ）」

響「真顔で言うな」

レオ「ござるな。」

真顔でそう言う美希に響はズバツと言う。

やよい「すみません片付け手伝ってもらって」

貴音「…いえ」

一方で食べた後の後片付けをやよいと貴音がしている中…

貴音「(……………花)」

じーとやよいの頭にある花を貴音は見て…

貴音「(なんと美しい…)」

そう評価した後

やよい「もって帰っちゃダメですよー」

貴音「な、なんのことでしょう？わ、私は別に、その」

心を読んだのかタイミング良く言うやよいに貴音は視線を逸らして言葉を濁す。

戻って美希達

あふう「ZZZZZ」

美希「……………」

寝ているあふうを美希は半目でじーと見て…

あふう「ZZZZ」

きゅ（美希があふうの口を摘む音）

あふうの口を掴んだ。

あふう「あふっ！あふっ！」

それにあふうはふるふるすると震えだす。

響「イジメんなつて」

美希「によーー」

あふう「びゃー！」

響が美希の後ろに回り込んで梅干しをしてぐりぐりとお仕置きし、あふうが泣いてる間、美希も涙目になったのであった。

貴音「…ふむ」

ゆきぼ「？」

響によるお仕置きが終わって丁度に戻って来た貴音が来たゆきぼを抱き抱える。

貴音「こちら事務所まで養っておられるのですか？」

美希「え？うん」

いたいのと響に梅干しされた場所を押さえてる美希に貴音はゆきほも頭を撫でながら聞き、美希はそれに頷く。

貴音「では響を置いて行きますのでこの子をいただいてまいります」

響「なんで！？自分関係ないだろ！？」

貴音の言葉にガーーンとなつて貴音を見る響に…

貴音「衣食住、不自由しませんよ？何か問題でも？」

響「(ひどい)」

龍美「と言うか人的にどうかと思うのです…」

レオ「やな…」

にごおと笑つ貴音に響は心の中で言い、龍美とレオがそう言う。

美希「と、いうわけで…暇だからトランプでもするの」

響「いやその理屈はおかしい」

レオ「と言うか唐突過ぎるでござる…」

あふうとゆきほがじゃれあつてる間に美希がトランプを出してそう提案し、響とレオがツッコミを入れる。

貴音「トランプ…トランプといえば確か……」

美希「おー知ってるの?」

右手の上に左肘を乗せて思い出す様に呟く貴音に美希が聞くと…

貴音「負けた者が衣服を脱いで行くという……」

美希&響&龍美「違う」

レオ「それはマージャンではないでござるか?」

貴音「そうですか?」

貴音の言った事に美希、響、龍美が否定してレオがそう言う。

それでやよいを含めて交代制でババヌキをする事に最初は美希と貴音、響とやよいである。

美希「(むむむ…ババきちやったの…これをこっちに持っていつて…)」

そんな中、美希はジョーカーが来て、移動させると…

あふう「ナノナノナノ」

響「え?右端ババ?サンキューだぞ」

美希「アレ?」

美希の頭にいるあふうが鳴いて響がそう言つと美希は疑問を浮かべ…

響「？何？」

貴音と美希に見られ、響は？マークを浮かべる。

美希「え？しゃべってることわかるの！？」

響「わかるぞ？」

レオ「マジでござるか！？」

美希「なんで！？」

驚いて聞く美希に響はあっさりと答え、レオも驚き、美希がまた聞く。

響「なんでつて…普通にわかるよな？やよいー？」

やよい「はい！」

龍美「やよいも分かるのですか！？」

ねーと聞く響の問いにやよいは元気良く答えて龍美は聞く。

美希「なんでー？ミキには全然わかんないのー？」

あふう「ナノ！」

貴音「……」

あふうを見て聞く美希にあふうが鳴くのを見た後に…

貴音「人語以外を理解する…あなたたちは物の怪なのですね」

響「（やっぱひど）」

レオ「それはどうよと思うのでござる…」

貴音の言葉に響はまた心の中で言い、レオはそうツッコミを入れる。

貴音「とはいっても、この子も言葉はわかりませんよね？」

響「あー、しゃべんないしねえ」

龍美「（あれ？確かマスターが休みの時に喋ったと聞いたんですけど？）」

抱き締めてるゆきばを見て聞く貴音に響はそう言い、龍美は首を傾げる。

一旦貴音から離れたゆきばはぱつぱつと手旗信号をした後に…

ゆきば「（ぶあ〜）」

ラッパを吹く。

貴音「…まあしゃべらずとも變くるしいのでよこしめしゅう（一）」

レオ「貴音殿、鼻血が出てるでござる…」

貴音「ありがとうございます」

その様子に貴音は鼻を押さえ、レオはティッシュを指し出しながら言う。

小鳥「ただいまー、はー外寒かったわー」

そこに外出していた小鳥が戻って来て早速コタツでのんびりしているメンバーを見る。

やよい「まーまー」

小鳥「え？え？ちょっと！何で事務所にコタツがある…」

戸惑う小鳥をやよいは背中を押してコタツへ導く。

貴音「ささ、お茶でも…」

小鳥「え？え？あっはいどうも…」

レオ「（流されているでござるよ小鳥殿）」

貴音に湯飲みを渡されてお茶を入れて貰う小鳥にレオは心の中でほろりとする。

律子「あー、寒い寒い！ただいまー！」

次に律子が帰って来て…

律子「今日は寒いですねー、お、コタツですかー！いいですねー、よっこらせ…と」

コタツを見ると流れる様に入り…

律子「（ガミガミガミガミ）」

小鳥「何で私まで…」

龍騎「あれ？どうしたの？」

龍騎が事務所に帰って来た時にコタツを出した美希＋貴音になぜか巻き込まれて律子に説教されてる小鳥の姿があったのであった。

ミラー6：響と貴音とぶちどると「タシ」(後書き)

アスム「何か小鳥さんご愁傷様ですね。」

ワタル「陳情ですね。」

シンジ「ワタル、バラは出すなよ。」

シヨウイチ「と言うか流れる様に入ったよな。」

ミラーノ・千早と貴音と冬毛ぶちどる(前書き)

剣崎「今回はぶちどるのちょっとした変化と新たなぶちどるの登場だな」

渡「後、千早ちゃんのちょっとした悩みですね」

士「だな」

ミラーフ：千早と貴音と冬毛ぶちぎる

とある日の事、響と美蟹、リュウガはやよいに呼ばれた

響「やーよいー自分達に何か用かー？もしかしてペットになってくれるとか？」

美蟹「後半なんでやねん！」

やよい「あ、響さんに美蟹さんにリュウガ代理プロデューサーどうもです。後ペットにはなりません」

リュウガ「それで…本題は？」

響の問いに美蟹はツッコミを入れ、やよいがそう言うところリュウガが聞く。

なお、リュウガは龍騎がいない時の代理プロデューサーを務めている。

やよい「えっとですね…じつは千早さんが相談があるって…」

響「おー！あの千早が？」

やよいの言った事にへえーと響は相談しないと思う人物に声が出る。

響「あはは案外カワイイところもあるんだな！」

美蟹「確かにそうやな…」

響「それでそんなに内容なんだ？」

うははと笑う響の言った事に美蟹も同意した後に響が聞く。

やよい「こんなです」

っ、たすけて

響&美蟹「いろいろヤベー!!？」

リュウガ「何があったんだ？」

やよいが出した紙に書かれた事に響と美蟹は叫び、リュウガはそう言う。

というわけで一同は千早とちひゃーの家へ向かったのであった。

リュウガ「千早、リュウガだ。やよいに頼まれて一緒に来た」

響&美蟹&やよい「こーんにちはー」

リュウガがドアを叩いてそう言い、響と美蟹、やよいが挨拶する。

千早「…はい？」

ギィィと扉を開けて半目で陰が入った顔の千早が出て来る。

美蟹「（目がやばい!）」

響「（こわっ！）」

それに美蟹と響がそれぞれ心の中で言った後に千早は4人を見た後…

千早「……どっぞ」

ぶつぶつぶつぶつ言いながら千早の後を動じなかったやよいとリュウガが続き、美蟹と響もおずおずと続く。

千早「さつきはごめんなさい。最近ちよつと寝不足で…」

響「ちゃんと寝ないとダメだぞ？」

リュウガ「その通りだ。アイドルは体調管理万全にしないとダメだぞ」

入った後に頭を掻いて謝る千早に響はそう言い、リュウガが注意する。

美蟹「それで相談って何や？」

千早「その相談だけど…この子についてなのよ」

響「やよい」「この子？」

美蟹の問いに千早の言葉に2人が？マークを浮かべた後に千早が指した方を見ると…

ちひゃー「くっ」

服が変わって髪がもさつとなったちひやーがいた。

貴音「ありがたくいただいてまいります」

ちひやー「シャー！」

響「ちょっと待て貴音ー!？」

美蟹「何時の間にいたん!？」

リュウガ「後、鼻血を止める」

いきなり現われて鼻血を流しながらちひやーを抱えて行くこととする
貴音にちひやーは威嚇し、響が待ったをかけ、美蟹が現われた貴音
に驚いた後にリュウガがそう言う。

貴音「あら響、何か問題でもあると言っているのですか？」

響「あたりまえだぞ」

美蟹「やな」

ギャーギャー騒ぐちひやーを抱えたままで鼻にティッシュを詰めて
普通に疑問ですと首を傾げる貴音に響は疲れた顔で言い、美蟹も同
意する。

貴音「

.....そ、そんな（ガーーーーーン）」

リュウガ「長い間だな」

響と美蟹の言葉に何時の間にかティッシュを抜き、変わらない顔でシヨックを受ける貴音にリュウガはそう言う。

貴音「このようにフサフサでも問題があるか？」

ちひゃー「ギャー」

響「イヤそれ、全然関係ないし」

美蟹「ホントに関係ないな」

ちひゃーの耳の様な形の髪の毛部分を摘んで言う貴音に響と美蟹がそう言う。

貴音「おしりもこのように愛おしいのに…？」

ちひゃー「ギャー」

響「だからそうやってイジメな！#」

美蟹「と言うかどんだけ気にいったんや！」

ちひゃーのおしりをパンツと叩く貴音に響は怒り、美蟹は叫ぶ。

やよい「大丈夫ですか？千早さん」

そんなギャーワーと叫んでいる外野を尻目にやよいは寝ぼけ眼でぐ~~~~と眠りかけな千早に聞く。

千早「ええ、大丈夫よごめんなさい心配かけて…」

そんなやよいに千早は苦笑してコンツと自分の頬に右拳を軽く叩く。

やよい「悩み事ですか？」

千早「ええ…じつはちょっとね…」

リュウガ「何だ？」

やよいの問いに千早は間を置いた後に言う。

千早「ゴツタンかゴンザレスかで悩んでしまっ…(チヒヤ)」

リュウガ「まだ引き摺るかそれを」

真顔で言う千早にやよいの頭の草がへによりと萎れ、リュウガは顔を押しさえる。

千早「やっぱり名前はゴの字がいいと思わない？最近春香がゲムので名前を付けてくれで頼みに来るけど…」

やよい「え…えーと…そのう…」

リュウガ「お前はどれだけゴを付けるのが好きなんだ？」

ねえと同意を求める千早にやよいは困り、リュウガがそう言う。

貴音「この子には名前がないのですか？」

ちひゃー「くっ」

千早「あー、そうじゃないのちひゃーって呼ばれてるわ」

疲れてる響と美蟹を背に貴音が貴音に慣れたちひゃーを見て聞き、千早が苦笑して言う。

貴音「ふむ…」

ちひゃー「？」

それを聞いて貴音はちひゃーを見てちひゃーは？マークを浮かべていると…

貴音「…スメラトラトスギなどどうでしょうか？（しじょ）」

ちひゃー「」

リュウガ「お前もか貴音…」

貴音の言った事にちひゃーは驚き、リュウガはまた顔を抑える。

ガシツと握手しあってる2人にちひゃーはぶんぷんと怒りながら響の所へ向かう。

響「しっかし君、髪すごいなーフサフサだぞ？冬毛か？」

ふつと息を吐くちひゃーの髪を摘んで響はそう言う。

響「ほかの子も冬毛とかあるのかな？」

やよい「さー?」

リュウガ「見てないからな…」

美蟹「気になるな」

響の疑問にやよいもそう言い、リュウガと美蟹がそう言つと…

貴音「しっぽは生えたようですが?」

ゆきぽ「?」

響「(えー!?)」

どこからか狸のしっぽばい尻尾が生えたゆきぽを出して言つ貴音に響はまさかのしっぽが生えたのに驚く。

響「でもさーなんでしっぽなんだ?」

貴音「私に聞かれましても…」

ゆきぽを見て言つ響の問いに貴音は困つた顔で言つ。

貴音「ただ、こちらをこのようにすれば…」

そう言つて貴音はゆきぽの尻尾を足でぐにゅと軽く踏み、それにゆきぽがおぶおぶと歩こつとして…

ぐいゅと貴音が足で引つ張るとペチャとこける。

貴音「このような愛おしさに」

響「帰れ」

美蟹「ウチのハリセンいる？」

響「借りるぞ」

鼻血を流して言う貴音に響は冷たく言い、ハリセンを出して聞く美蟹に響はそう言つと貴音の頭を叩いたのであった。

貴音「さて如月千早、この子にどのような問題があるといつのですか？」

千早「え？ああ……」

ヒリヒリとタンコブが出来た頭を気にせず貴音が本題を聞き、千早はそう言われて思い出して口を開く。

千早「夜寝てる時とかなんだけど……」

回想

ベッドで寝てる千早と千早の頭の傍で寝てるちひやー

寝ている間にちひやーはくると寝る体制を変え、その際、ちひやーの髪が千早の顔を覆う。

それにより千早は窒息しかける。

回想終了

千早「…という感じで、毎晩目が覚めてしまつて…」

リュウガ「成る程…」

千早の説明にリュウガは腕を組む。

貴音「それはうらやま…だからなんだといつのですか？」

響「おーい？」

美蟹「本音が少し出てるで…」

貴音の言葉に響は半目で睨み、美蟹がそう言う。

貴音「それほどであるならば髪を切ればよいのではないですか？バサッと」

美蟹「普通にそうやな…やったん？」

千早「…切つたのよ？バサッと…切つただけど…」

貴音のもっともな言葉に美蟹も同意してそう言う。千早もしたらしいが…

千早「切つても切つても切つても切つても切つても切つても…次の日には伸びてるのよ…」

響「うわあ……」

美蟹「ご愁傷様……」

ぶつぶつぶつぶつと言い出す千早の言葉に響と美蟹は冷や汗を流す。

貴音「そうそう、髪といえば……」

響「？」

何かを思い出した様に手をポンとさせる貴音に響は？マークを浮かべた後……

貴音「この子も負けていませんよ？」

響「はあ！？」

美蟹「今度はやよいちゃん似のぶちどる！？」

ひょいと貴音がどこからともなく出したもっさ〜としたやよい似ぶちどるに響はガナハーと驚き、美蟹も目を開いて驚く。

響「ちょっと……どうしたのその子……？」

貴音「拾いました」

響「どこで……？」

貴音「道で」

素早く問う響に貴音は即決し…

貴音「名前は『やよ』といって…」

響「だ〜か〜ら〜」

リュウガ「貴音、響にやよを拾った経緯を教えろ」

名前を言う貴音に響は貴音の頬を摘んで引っ張り、リュウガはそう言う。

3ヶ月前…

貴音が自動販売機で何か買おうとお財布から10円を取り出し…

貴音「あら？」

ぼろっと取り出した10円玉を落としてしまった時…

ちやりん（10円玉が地面に落ちる音）

やよ「うっうー」

ビュ（やよが駆けて来る音）

ぱく（やよが貴音が落とした10円玉を銜えた音）

どこからともなくやよが現われたのだ。

そしてやよはハツとして10円玉を落とした貴音を見ると…

カンラカンラとお茶を持って笑う貴音に響はガナハ―と膝と手を地面に付ける。

貴音「はじめは私も驚きましたが、これはこれで愛らしくてよいとは思いませんか？」

やよ「うっうー」

やよい「うっうー」

響「うー…この子なら自分が拾いたかったぞ（　・　）」

やよいとやよいの頭に乗るやよを見てそう言う貴音に響は涙を流して本音を言う。

貴音「そういうことです。後お茶をください…さて如月千早、対処する方法を教えてくださいあげます」

千早「え？本当に!？」

美蟹「それでどんな方法なん？」

響に言った後、貴音は千早にそう言い、千早は喜び、美蟹が聞くと…

貴音「あきらめてください。また言いますがお茶をください」

千早&美蟹「ひどい!？」

リュウガ「普通にお腹の所に寝かせれば良いだろ？」

貴音の言葉に千早と美蟹は叫び、リュウガがフォローの言葉を入れる。

その後、千早は冬の間はリュウガの言葉に従う事で寝不足にならなくなったのであった。

くオマケく相談事が終わった後の響

響「うわ〜ん真!!!」

真「ちょ!?!?どうしたの響!?!」

雪歩「後、どさくさに紛れて真ちゃんに抱きつかないで!」

響「貴音がさ!新しいぷちどるを拾っててしかもそれがやよい似のぷちどるだったんだぞ!!!」

真「…あ~~~~」

雪歩「響ちゃんって、やよいちゃんをペットにしたがってたもんね」

響「もう羨ましいぞ!!!」

真「はいはい…きつと良い事あるわ…」

ミラーフ・千早と貴音と冬毛ぶちどる（後書き）

真司「と言つ訳で新しいぶちどる、やよの登場でした！」

ヒビキ「それにしても切っても髪が伸びるって凄いなぶちどるは〜」

良太郎「次も新しいぶちどるが出るんだよね？」

巧「サイドミラーで涼が言っていた事がな…」

ミラー 8：真と律子とちっちゃん（前書き）

士「新たなぷちどるの登場だな」

ユウスケ「確か…事務員でもあるんだよね？」

シンジ&カズマ「…欲しい」

アスム「2人共…」

ミラー 8：真と律子とちっちゃん

真「おはようございます！みんなのアイドル菊池真です！」

龍騎「おっす真、何時も通り元気良いな」

765プロ事務所に来て元気良く挨拶する真に龍騎も返して言う。

真「おっはよう律子！今日も元気に……」

????「めっ」

今度は律子に挨拶しようとして聞こえて来た声に真は止まり…

した方を見ると律子似ぶちどるがパソコンを操作していた。

小鳥「ちっちゃん、それ終わったからお茶にしましょう？」

律子似ぶちどる　ちっちゃん「めっ」

真「（なんか増えてるー！？）」

龍騎「（驚くよね…）」

小鳥の問いにちっちゃんと呼ばれた律子似ぶちどるは答え、真は心の中で驚き、それに龍騎はうんうんと頷いている。

律子「ちっちゃん？何言ってるのよそんなのいるわけないじゃない」

声をかけた真に律子はそう言う。

律子「朝早いからって寝ぼけてちゃダメよー？」

真「いや…アレ…」

キィと音を立てる椅子にもたれながら真にそう言うが真は顔をある方向に向け、律子も顔を向ける。

小鳥「おつかれさまーお茶にしましょ？」

ちっちゃん「めっ」

フフフ？と笑ってお茶を出す小鳥にちっちゃんはお茶が入った湯飲みを貰っていた。

律子「私二八ナニモ見エナイワ」

真「現実を見ようよ律子……」

インペラー「実際にいるしな…」

現実逃避をする律子に真と通りかかったインペラーが言う。

真「小鳥さんが拾ってきたの？」

小鳥「み、道ばたで寒そうにしてたから……っい」

じーと見合ってる律子とちっちゃんを見ながら真は聞き、小鳥もそう答える。

真「名前は…ちっちゃん？」

小鳥「ええ、律子さんに似てたから」

名前を聞き、小鳥は肯定して言う。

真「でも…いいんですか？事務なんかさせて…」

小鳥「それがね…すつごく頭がいいのよーあの子」

バツと何かグリコのポーズに近いポーズを律子とちっちゃんがしている間も真が気になった事を聞き、小鳥は笑って言う。

そして2人に目を向けると…バツと別のポーズをしていた。

リュウガ「何をしてるんだお前たちは？」

タイガ「だよな…」

通りがかったリュウガとタイガがそう言う。

真「まあいいんじゃない？仕事もちゃんとできるみたいだしさ」

王蛇「それに事務所にとってもプラスだしな」

律子「よかないわよ#」

苦笑して言う真と王者に律子は言う。

律子「ただでさえチビたちの食費でカツカツなのよ！？さらに増えていくらかかると思ってたのよ！！」

オーデイン「確かに増えそうだな…」

あーと叫んだ律子の言った事にオーデインは同意する。

ちっちゃん「めっ」

律子「何い？今忙しいんだからあとにして…」

そこにちっちゃんが律子に紙を指し出し、律子は言った後にそれを見て、タイガが覗く。

タイガ「あつ、ぷちどる達のを考えての生活維持費が算出されてる！」

リュウガ「流石だな」

タイガが言った後に律子から紙を取って見たリュウガが言う。

小鳥「ま、まあこの子は私の家で面倒見るから…ね？」

律子「あーもう好きにしてください」

ちっちゃんを抱き抱えて言う小鳥に律子はやけくそに言う。

貴音「お話は聞かせていただきました。ありがとうございます(?)
その子の面倒は私が総力を傾けて支援いたします」

どこからともなくじじょつと言つ音と共に現われた貴音にメンバーの視線が集まり…

リュウガ「退場」

響「ほら行くぞ貴音。真々お昼後で食べような」

リュウガの言葉の後に現われた響が貴音を引き摺って行く。

タイガ「偉いよなちっちゃん」

ベルデ「そうだな…仕事も良いし、他のぶちどる達の面倒も見ろしな…」

タイガがさつきまでのちっちゃんの事務の様子に感嘆の声をあげ、ベルデも頷いてそう言い…

インペラー「極め付けは…」

ナイト「大人も厳しく叱るだな」

2人が見る先で正座させられた王蛇とガイに涙目の小鳥がちっちゃんに説教されていた。

シザース「小鳥さんはともかく…何したのあいつ等？」

ライア「サボりと遊んでいたので説教されてる」

書類を整理しながら聞くシザースにライアがそう言う。

リュウガ「律子、音無が会議の為の資料をどこかにやったらしい」

律子「ええっ！？ウソ！？」

アビス「説教はそれか…」

リュウガが走って来てそう言い、律子は驚き、アビスは小鳥がちっちゃんに説教されてた理由に納得する。

リュウガ「急いで探さないとな…」

ちっちゃん「めっ」

探そうと動こうとしたリュウガにちっちゃんが書類が入った封筒を差し出す。

リュウガ「これだ…見つけて置いてくれたのか。ありがとう」

それを受け取り、リュウガが頭を撫でると…

ぱたりこ（ちっちゃんが倒れる音）

リュウガ「…何で倒れるんだ？」

顔を真っ赤にしてきゅうと気を失うちっちゃんにリュウガは首を傾げる。

インペラー「気にするな…」

ベルデ「…ちっちゃんは律子と同じ様にリュウガに弱いんだな…」

アビス「だな…」

ナイト「やれやれ」

それにインペラーがそう言い、ベルデはその様子にそう言い、アビスが同意して、ナイトは肩を竦める。

少しした後、頭に濡れたタオルを置かれて寝ていたちっちゃんが目を覚ます。

律子「おっ、起きたわね。まだ無理しちゃダメよー」

それに気づいた律子が振り向かず仕事しながらそう言う。

律子「…しかし普段はしっかりしてるのにねえ…代理プロデューサーにはダメダメなのね？」

そして一通り終えた後にキイと椅子座りながらちっちゃんの方を向いて不適に笑う。

ちっちゃん「もー！もー！」

律子「(……ほんとになんでここまで似てるのかしら…?)」

顔を真っ赤にして腕をブンブン回すちっちゃんの頭を押さえながら律子は心の中で苦笑する。

真「お？もう大丈夫なのか？」

ちっちゃん「めっ」

そこに肩に日本一と書かれた袋を引っ下げた真が通りかかってそう聞き、ちっちゃんは答えた後にじーりと見る。

真「?な…何?」

ちっちゃん「めっめっ」

見られてるのに真は聞き、ちっちゃんが律子に真を指差しながら言う。

律子「『なんで男の子がアイドルしてるの?』だってさ」

ちっちゃん「めっ」

インペラー&ガイ&アビス「ぶはっ!!」

真「いつか言われると思ったさ!女の子だよ」

律子が訳したちっちゃんの疑問にインペラーとガイ、アビスが吹き、真が半目でそう言う。

真「…いいかい?ボクは菊池真!れっきとした16歳のキャッピキヤピな女の子だよ!」

自分を指しながら真は強調して言うが…

ちっちゃん「めっ…」

真「なんでそんなうさんくさそうな目でみるんだよ……」

疑う目で真を見るちっちゃんに真は苦い顔をした後……

真「み、みんなはわかるよね！ボクがピチキヤピな女の子だって……！」

はるかさん「かつか！」

その場にいた美蟹や龍美にあふうやはるかさんを含んだ一同に真は聞く。

律子&アビス&ガイ&ベルデ&シザース「……」 面白いからだまつてる

あふう「あふう」 わかってない

龍美&はるかさん「？」 わかってない

オーディン&ライア&ナイト「……」 そう言つの気にしない

インペラー&美蟹&リュウガ&タイガ「……」 ポーイッシュな女の子と言いたいが言ったら言ったらで傷付くと思っただまつてる

真「……デスヨネー」

それぞれの様子に真は予想してたど諦めていた。

真「あー……もういいや……それよりあずささん知らない？今日はいっしょにレッスンの筈なんだけど……」

律子「あずささん？」

真の言った事に律子は頬に手を当てる。

律子「ア…ここ最近見てないわねえ…また迷子になってる…とか？」

真「あの人方向オンチだからなあ…」

？を浮かべてる律子に真は頭を搔く。

龍美「あずささんって？」

リュウガ「三浦あずさ…この事務所で年長のアイドルだ…確かに最近見てないな…」

小鳥「休暇届けなら出てるわよ？」

真「え？そうなんですか？」

首を傾げる龍美にリュウガが簡潔に説明した後に腕を組み、小鳥の言葉に真はそつ言つ。

小鳥「ええ、たしか…社長とゾルダさんを迎えに行くって言ってそれつきり…3ヶ月前にくらい…」

海外かよ！？

小鳥の言葉にあずさを知るその場にいたメンバーは心の中でツッコ

ミを入れた。

龍騎「あずさんが行方不明!？」

外に出ていた龍騎は律子の電話に龍騎は驚く。

龍騎「けど海外って…捜しようがないと思うぞ…うん…あーわかった……」

龍騎はそう言った後に通話を終える。

そこに社長をおんぶしたゾルダが来る。

龍騎「ゾルダ!それに社長!」

ゾルダ「おーやっと戻って来れたよ社長」

社長「う…うむ」

2人に駆け寄る龍騎にゾルダは背中の社長にそう言い、社長はかすれた声を出して頷く。

龍騎「と言う事はあずさんもいるな…」

ゾルダ「ありやあ?あずさちゃんまた迷子か?」

龍騎「ああ、あんたと社長を迎えに3ヶ月前にね…」

そう会話した後に龍騎はゾルダと社長と別れて走り…

龍騎「あ、見つけた！あずささん！」

見覚えのある後姿に龍騎は声をかけ、かけられた本人は振り返る。

あずさ「あら〜プロデューサーさん」

どたぶーんと言う音が聞こえそうな感じのあずさはのんびりと言う。

龍騎「捜しましたよー…さ、事務所に帰りましょう」

あずさ「あらあら、すみません〜道がわからなくなってしまった〜」

龍騎の言葉にあずさは申し訳ない顔で言う。

龍騎「……………でどこまで行ったの？」

あずさ「はい？」

色々にあずさの周りにある物を見て聞く龍騎にあずさはどたぶーんと？マークを浮かべる。

あずさ「すみませんー…三浦あずさ、ただいま戻りましたー」

事務所に戻り、メンバーを前にして言う。

真「ほんともー心配したんですよ？今度から気をつけてください
ね」

あずさ「あらあら〜ごめんなさい〜」

呆れた顔でため息を吐く真にあずさは謝る。

真「それじゃ、ササッとレッスン行きましょっ？」

あずさ「はい、ちょっとだけ待ってね〜」

ウフフと笑った後になにやらゴソゴソと何かを取り出すあずさにメンバーは首を傾げ…

あずさ「さ〜行きましょっ〜」

?????1「とかー」

?????2「ちー」

龍騎「(増えた!)」

あずさが抱えた亜美似ぶちどると頭に引っ付く真美似ぶちどるに龍騎は驚く。

貴音「新しい子が増えたと風のウワサに!」

律子「うわっ!」

そこにぬっと涙目の響を引き摺った貴音が現われる。

貴音「おお…双子とは…これは…なかなか…」

亜美似ぶちどる「とかー」

真美似ぶちどる「ちー」

響「すいませんごめんなさい」

律子「あー…まあまあ」

後ろで律子にぺこぺこ頭を下げて謝ってる響を気にせず貴音は双海姉妹似ぶちどる姉妹を見て感嘆の声をあげる。

すると…

バツ（双海姉妹似ぶちどる姉妹が飛び上がる音）

ゴリ（そして貴音のオデコに双海姉妹似ぶちどる姉妹がキックを決める音）

龍騎「Wライダーキック!？」

リュウガ「それよりも貴音は大丈夫か？」

倒れる貴音より龍騎は双海姉妹似ぶちどる姉妹が出したのに驚き、全員が口を開けて驚く中でリュウガがそう言う。

なお、貴音はオデコに絆創膏を張ったが無事であった。

貴音「面妖な…」

あずさ「いいでしょ」

ミラー 8：真と律子とちっちゃん（後書き）

ワタル「最後に出たぷちどる姉妹の名前は次回で出ます」

ヒビキ「いや〜まさにちからとわざだね〜」

津上「そうですね〜」

シヨウイチ「…お前等な…」

ミラー9…貴音とあずさとこあみとこまみ（前書き）

良太郎「今回は前回出た双子ぷちどるの名前が出る話だね」

士「そうだな…」

ユウスケ「ホントに大変だな」

渡「そう言えば皆さん…何時の間にかPVが1万突破してました!」

五代「おお〜スマハツより話が少ないのにもう突破してたの!？」

津上「驚きだね〜」

ミラー9：貴音とあずさとこあみとこまみ

前回の話から翌日

亜美「あ、お姫ちゃんだ！やっほー！」

真美「ほんとだ、お姫ちゃん！」

事務所に来た貴音に双海姉妹が話しかける。

貴音「双海 亜美、双海 真美ではありませんか。息災で何よりです」

しじょーんと言う音が聞こえそうなキラキラと輝く笑顔で貴音は言う。

亜美「わーいお姫ちゃん」

真美「お姫ちゃん」

貴音「フッフ…まあまあ」

桃色な空間を作り出す貴音を…

響「……………」

貴音「……………何か？」

じじじと見る響に貴音はそう聞く。

インペラー「貴音って…小さい子が大好きだよな…」

シザース「そうだね」

双海姉妹に抱き付かれてる貴音を見てインペラーとシザースは事務をしながらそう言つと…

ヒュ（石が風を切る音）

コン（真美の頭に石が当たる音）

真美「あだっ！」

いきなり真美の頭に石が投げられた。

亜美似ぶちどる「とかー！」

真美「んお？」

真美が頭を抑えながら振り向くとぶんすか怒っている亜美似ぶちどるがいた。

真美「…なんだろこの子？新しい子かな？」

亜美似ぶちどる「とかー！！#」

逆さに亜美似ぶちどるを持ち上げて見る真美に亜美似ぶちどるが怒ると…

亜美「もう1匹いたよー」

真美似ぶちどる「ちー」

そこに真美似ぶちどるに頭をあまがみされてる亜美がいた。

オーデイン「（嫉妬だな）」

アビス「（嫉妬か）」

ベルデ「（嫉妬だね）」

それを見て3人はそう思った。

真美「へーあずさお姉ちゃんが」

亜美「とりない…」

貴音「そうらしいですよ」

亜美が真美似ぶちどるを剥がそうと奮闘中の中、真美が貴音から事情を聞いて手の中の亜美似ぶちどるを見て言い、貴音も肯定すると…

亜美似ぶちどる「ねーちゃ！ねーちゃ！！」

真美「お」

貴音に向かって手を伸ばしてジタバタする亜美似ぶちどるに真美は貴音に差し出す。

貴音「数が多いと何かと手狭でしょうし、私が引き取りにきました」

亜美似ぶちどる「ねーちゃー」

抱き付いて泣く亜美似ぶちどるの頭をよしよと撫でて貴音は微笑む

真美似ぶちどる「ねーちゃー！」

貴音「ハイハイ」

亜美「ふい〜」

そして亜美に張り付いてた真美似ぶちどるも貴音に抱き付き、亜美が安堵の息を吐き出す。

響「……………」

貴音「先ほどからなんです？」

自分をまだ見てる響に貴音は問う。

響「…貴音ってさ、そんなキャラだったけ？」

貴音「失敬な！」

ガイ「まあ、言いたい事は分かる」

響の疑問の言葉に貴音はそう返し、ガイは響に同意してタイガヤゾルダもうんうんと頷いている。

貴音「私はいつでも自然体、ゆるぎない大木のごとき姿勢です！」

響「何を言ってるのかサツパリだぞ」

ナイト「何で大木なんだ？」

真美似ぶちどる「？」

キラツとする貴音に響はそう言い、ナイトがツツコミを入れる。

真美似ぶちどる「ちーちー」

貴音「（にへへへ）」

アビス「（うお！？貴音の顔が凄いふやけた笑顔に！）」

インペラー「（キャラ崩壊か？）」

手を伸ばす真美似ぶちどるに顔を崩して微笑む貴音にアビスは驚いた後にインペラーはツツコミを入れる。

貴音「……コホン／／／」

真美似ぶちどる「ねーちゃ？」

響「…ごめんわかった。そのままの貴音でいいよ……つかれるし」

顔を赤らめて咳払いする貴音に響はそう言う。

響「しかしチビになめられてるんじゃないや貴音もまだまだだぞ」

亜美「ほほう？」

リュウガ「ならお前はどうするんだ？」

ふふん と腰に手を当てて笑う響に亜美は疑わしげな顔で見、リュウガは聞く。

響「小動物はエサで釣る！基本だぞ！」

亜美「けっこうエゲツないよね…」

ナイト「お前も真美と一緒にあふうを捕まえる際にしただろ」

ズパー！とサーターアンダギーを出して言う響に亜美は呆れた口調で言い、ナイトがツッコミを入れる。

すると…

パクッ（あふうが響の手ごとサーターアンダギーを食い付く音）

響「おおおお〴〵おおおー！？」

いきなり手ごと食い付いたあふうに驚いて響は腕をぶんぶん振る。

貴音「さて、あちらは放っておくとして…」

真美似ぷちどる「ちー」

ゾルダ「そつだね…」

ぶんぶんしている響を尻目に貴音はそう言う。

貴音「この子たちの名前を決めたいんですが…手伝っていただけますか？」

双海姉妹似ぶちどる達に頭を置いてそう言った後に貴音はハツとした後…

千早「話は聞かせても…!!」

ぎゅ（貴音がドアノブを押さえる音）

ガチャガチャ（千早がドアノブを回そうとしている音）

千早「しくしくしくしくしくしく」

貴音「よろしいですか？」

美蟹「…似た者同士なのに封じるんかい…」

リュウガ「自分が飼ってる奴だからだろうな…」

泣いてる声が響くのを無視してその場にいるメンバーに聞く貴音に美蟹は冷や汗を流し、リュウガは呆れた口調で言う。

真美「むーん…パツとしたの思いつかないね」

亜美「だねーあきたー」

美蟹「飽きてどうするねん…けどまあ…ほんま思い付かん…」

んーと口にペンを銜えて唸る真美に亜美はテーブルにペタリと突っ伏して言い、美蟹がツツコミを入れた後にそう言う。

亜美「ムー」

真美「なんかないー？いい名前」

響「ほいほい」

あふう「ナニ、ヨー」

椅子の背にもたれて今だにあふうに食い付かれてる響に真美は聞く。

響は少し考えた後…

響「スケさんとカクさん」

律子「いろいろマズいからやめなさい」

リュウガ「有名人物の名を出すな」

笑顔で言う響に通じかかった律子がダメだししてリュウガが追撃する。

律子「名前ねえ…たしかに悩みどころではあるわね」

あ、またゴンザ…と色んな名前が書かれた紙を見て言う。

真美「律っちゃん、なんかいい案ない？」

律子「そーねえ……」

真美の問いに律子は考えながら椅子にもたれて背を反らすし…

扉を開いてじー……と凄い顔で見てる千早に気づく。

律子「ひっ、拾ってきた本人に聞いてみましょう!」

ガバと起き上がって双海姉妹似ぶちどるを拾って来たあずさに聞こうと提案する。

あずさ「名前ですかー困りましたねー…」

どたぶーんと言う音を出しながら龍騎に連れて来られたあずさは事情を聞いて笑顔で言う。

あずさ「ん〜そうねー…」

考えるあずさはじー……と見ている千早に気づき…

あずさ「千早ちゃん、あなたが決めてちょうだい」

千早「(ビクッ)」

かむかむと手で呼ぶ動作をするあずさに千早は驚き…

千早「(あわあわあわあわ)」

美蟹「まさか呼ばれるとは思ひもしなかつたんやな」

翼「ですわね」

慌てる千早の様子に美蟹と翼はそう言う。

千早「でも…わ、私なんかが…名前…その…」

あずさ「千早ちゃん」

もじもじする千早にあずさは千早の頭を撫でる。

あずさ「あなたが真剣に考えた名前なら、あの子たちもきつと喜ぶわよ」

千早「うう…はい…／＼／」

優しくあやす様に言うあずさに千早は顔を赤くして答える。

あずさ「さ、それじゃあばーんと言ってあげて」

千早「えっと…じゃあ」

うふふふと笑って押すあずさに千早は…

千早「ゴ」千早ちゃん「…すみません」

インペラー「（ホントどんだけゴを付けたがるの!?!）」

ベルデ「（何か昔ゴの奴に嵌ったのかね?）」

あずさの顔を見て千早は謝り、インペラーが心の中でツッコミを入れた後にベルデは心の中で言う。

その後、千早は紙に2人の名前を書いた。

あずさ「こあみちゃんとかまみちゃんね」

千早「亜美と真美に似てますし…これで」

美蟹「確かにそうやな…」

レオ「なかなか良い名でござるな」

紙に書かれた2人の名前を見ていい、千早は由来の理由を言い、美蟹は納得してレオは頷く。

貴音「如月千早…あなたもやればできるのですね」

千早「人を変人みたいに言わないで…」

感嘆の声をあげる貴音に千早はうっーと顔を赤くして言う。

貴音「さて…名前も決まりましたし…そろそろお暇しませんと…」
あ…」

ガッシャーン！

こあみ「とかー！」

こまみ「ちー！」

あふう「ナノー！」

律子「なんかいつもの不安な音がー！？」

タイガ「掃除だね」

インペラー「だな…」

貴音がそう言った後にこあみとこまみを呼ぼうとしてドアの先からの音とこあみとこまみにあふうの泣き声に律子は戦慄して、悟ったタイガとインペラーはため息を吐く。

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

ててと歩いているこあみとこまみは机に突っ伏して寝ている王蛇に気づく。

こあみ「おうにーちや」

じいーと寝ている王蛇を見ている2人は…

キュ（王蛇の顔に落書きした音）

龍騎「王蛇…書類は…うわっ怖っ！？」

悪戯し終えた後に龍騎が来て、王蛇の顔を見て驚く。

次に2人は寝ているあふうに悪戯をするようだ。

1分後：

小鳥「あふうちゃん、そろそろ起き…うひゃあ!？」

あふうを起こそうと来た小鳥は髪を結ばれたあふうにピョーンと驚いた後

小鳥&響「(でもカワイイ!)」

リュウガ「そう言う問題じゃないだろ」

グツとサムズアップする2人にリュウガは静かに言う。

そして律子とちっちゃんによるこあみとこまみへの説教タイム…

ちっちゃん「もー!もー!」

小鳥「だからなんで私まで…」

だーと涙を流す小鳥もついでに…

貴音「ごめんなさいね…せっかく寝ていたところを…」

あふう「ナノ(ぶんぶん)」

響「でーも可愛かったぞ?」

美蟹「そうやな〜」

腕抱えた怒ってるあふうに謝る貴音に響はそう言い、美蟹も同意する。

貴音「では今度こそ帰りますわ」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

響「んじゃあ自分もー」

こあみとこまみが抱き付いた後に貴音は帰り、響も帰るつとすると…

律子「ソレは置いていけ」

響「ちっ」

あふう「？」

インペラー「そんだけぶちどる飼いたいのね」

あふうを連れて行くつとする響の肩を掴んで言う律子に響は残念がり、インペラーは呆れる。

この後、765プロはさらに賑やかになったのであった。

龍騎「王蛇ー次のライブの書類…ってまたっ!？」

オーディン「良く悪戯されるな…」

良く寝ている王蛇が顔に悪戯描きがされる様になったのであった。

ミラー「…貴音とあずさとこあみとこまみ（後書き）」

良太郎「と言う訳でこあみちゃんとかまみちゃんの話だったね」

シンジ「王蛇が顔に悪戯描きされるって…」

シヨウイチ「んでまあ…次の回でまた新しいぷちどるが出るがな…」

ソウジ「そうなのか？」

ミラー「10・響と真と小鳥とまじちーとびよびよ（前書き）」

アスム「今回も新しいぶちどるが登場するんですね」

カズマ「そうだね」

ウラタロス「今度はどう言う子なのやら……」

ミラー10・響と真と小鳥とまじちーとびよびよ

タイガ「ふっ…」

インペラー「色々そこあみ達来てから賑やかになってるよな…」

お菓子を持ちながら歩くタイガとインペラー

ふとタイガは前で重たそうに風呂敷を持って歩いてる誰かを見つける。

タイガ「あー…もしよかったら持ちましようか？」

???「びっ!」

タイガの申し出に…小鳥似ぶちどるは嬉しそうに鳴く。

インペラー「さあ行こう」

小鳥似ぶちどる「びっ!びっ!」

それに自分達は何も見なかったと言う感じにインペラーはタイガの腕を掴んで去ろうとする。

タイガ「流石に見て見ぬ振りはダメでしょ…あぶうの友達かな？」

小鳥似ぶちどる「びっ」

インペラー「肯定かよ…まあ、本人もリュウガの言葉でアイドル業

を時たまやっってるけどな…」

ツツコミを入れた後にインペラーに掴まれていた手を振って剥がした後にタイガはしゃがみ込んで小鳥似ぶちどるを見て呟くと本人は頷き、インペラーは呆れた顔を呟く。

この小説だと小鳥さんは時たまアイドルをやっている。

タイガ「どこに行こうとしてたの？」

小鳥似ぶちどる「ぴっ」

タイガの問いに小鳥似ぶちどるは紙を指し出し、インペラーがそれを受け取って見る。

インペラー「765プロに用事か…」

タイガ「んじゃあ一緒に行こうか」

小鳥似ぶちどる「ぴっ」

インペラーが呟いた後にタイガがそう言って小鳥似ぶちどるを抱える。

1分後

龍騎「はあ!？」

律子「どうしたんですかプロデューサー？」

仕事をしていて電話がかかり、話された内容に龍騎はすつとんきよんな声をあげ、律子が聞く。

龍騎「……何かインペラーとタイガが警察に幼児誘拐の容疑で連行されたらしい」

律子「はあっ!？」

龍騎の言った事に今度は律子がすつとんきよんな声をあげる。

龍騎「俺は小鳥さんと2人を迎えに行くからリュウガ頼んだ」

リュウガ「ああ」

龍騎の言葉にリュウガは答えた後に龍騎は小鳥と共に事務所を出る。

オーデイン「…何やら増えそうだな」

ライア「その予感は大当たりだ」

ナイト「ライアが言ってる時点で十区八苦ぶちどるだな」

オーデインの言葉にコインを弄っていたライアがそう言い、ナイトはため息を付く。

龍騎と小鳥が出た後に外ではタイガとインペラーが連行されたので自力で来た小鳥似ぶちどるがいた。

小鳥似ぶちどる「ぴっ」

紙を見た後に小鳥似ぶちどるは階段を登る。

小鳥似ぶちどる「ぴっ」

どこにドアがあるかを小鳥似ぶちどるはきよるきよると探してると…

ズバ！（ロープが小鳥似ぶちどるの足に巻き付き、それにより小鳥似ぶちどるが逆さまになって振り子の様になる音）

小鳥似ぶちどる「ぴっ！ぴー！」

響「やよい！見て見て！新しいの捕まえた！」

リュウガ「事務所に罫仕掛けるな」

それにパニックになる小鳥似ぶちどるに響が指差して律子からハリセンを借りたリュウガがツッコミと共にはたく。

小鳥似ぶちどる「ぴっ！」

美希「おっ！オットメこくろうさまなの！」

罫から解放された小鳥似ぶちどるは美希に敬礼し、美希もびつと返す。

響「なんだ美希？この子知ってるのか？」

小鳥似ぶちどる「ぴっ」

美希「えっとねー」

ひよいと小鳥似ぶちどるを持ち上げて聞く響に美希は笑顔で言った
後言葉が切れ…

響「うりうり」

小鳥似ぶちどる「ぴーー」

その間に響は小鳥似ぶちどるを頬ずりしてると…

美希「過去は振り返らず、前を見ていけばいいの（キリッ）」

響&美蟹「また忘れたな」

アビス「真顔で言えば済まされるじゃないからな…」

真顔で言う美希に響と美蟹はそう言い、アビスがツッコミを入れる。

響「んでさ、その荷物なんなんだ？」

龍美「偉く大荷物ですね」

美希「えっとねー、こないだねーロケに行ったの」

頭に小鳥似ぶちどるを乗せた響と龍美の問いに美希は小鳥似ぶちどるが持つて来た風呂敷包みの中を漁りながらそう言い…

最初にオニギリを出し…

美希「……………これはね、違うの」

レオ「（何を入れてるでござる…）」

翼「（ですわね…）」

仕舞ってまた漁りだす美希にレオはツツコミを入れて翼が同意する。

美希「あれ…？おかしいなあ…どこに…」

漁りながら？マークを美希は浮かべながら呟いた後…

ひよい（美希が顔を左に反らす音）

びゅっ（美希が顔を逸らした瞬間に何かが出て来る音）

風呂敷から出て来た何かか響の顔に張り付く。

張り付いたのは…真似ぶちどるであった。

ベルデ「（今度は真か…）」

真似ぶちどる「まきよーまきよー」

美希「あーいたのいたの。その子がねー」

リュウガ「と言うかお前は何道具と一緒に入れてるんだ」

響「……………（ちっちゃい真が…ちっちゃい真が！！）」

ベルデが心で呟く中、真似ぶちどるは怖かったのか泣いていて、美

希が探していた奴と真似ぶちどるを見て言い、リュウガがハリセンで叩き、響は心の中で叫ぶ。

千早「ゴンザレスね！」

響「絶対違う！」

ガイ「言うかどっから出て来た千早！」

ドンと現われて言う千早に真似ぶちどるを乗せたまま響は怒り、ガイがツツコミを入れる。

千早をあずさと春香に押し付けて退場させた後に真似ぶちどるが泣き止んだ。

真似ぶちどる「ヤーー」

響「おーおーカッワイいなあ」

元気に腕をピコピコ動かす真似ぶちどるに響は顔を緩ませる。

響「くぅ〜！いいないな！この子欲しいぞ！」

真似ぶちどる「へへっ」

んー？と真似ぶちどるを頼ずりしてされてる本人も嬉しそうに鳴く。

響「なあ！これ自分が飼ってもいいか！？」

真似ぶちどる「きょーー」

美希「あーいいんじゃないの？」

顔をキラキラさせる響に美希はそう言う。

響「よーし！帰ってご飯にするぞー！」

美希「そっちはダメなの」

ナイト「と言うかお前は真が好きなのに何でやよいを連れて帰ろうとするんだ？」

真似ぶちどるを頭に載せて右にやよいを抱えて帰ろうとする響に美希はそう言い、ナイトがそう言う。

ちなみに龍騎を除いたメンバーは恋愛関連は普通でリュウガは自分のに疎い。

閑話休題

それに響はやよいと真似ぶちどるを下ろした後胸を張る。

響「真は好きだけどやよいは別だぞ」

雪歩「真ちゃんの彼女は私だよ響ちゃん」

ゾルダ「雪歩ちゃん、ゆきぽが掘った穴から言わないで出て言いなよ……」

シザース「と言うか君も何時の間にかね……」

真顔で言う響に何時の間にかゆきぼが掘った穴から出張する雪歩にゾルダがそう言った後にシザースがそう言う。

真「またなんか拾ってきたね。律子が怒るよー？」

響「お！真、いいところに新しい子！すごいカワイイんだぞ！」

そこにやってきた真に響が笑顔で言う。

真「いや…カワイイとかそういう問題じゃ…」

真似ぶちどる「ヤー？」

ズキーン！！

そう言った瞬間、真は真似ぶちどるを見た瞬間、心を撃たれた。

真「じゃ、この子もらって帰るから」

シザース「ブルータス！お前もか」

ナイト「今言うセリフか？」

ずいっと顔を赤くして美希に言う真にシザースがそう言い、ナイトがツツコミを入れる。

響「ちょっと！この子は自分が飼うんだぞ！真でもそれは譲れないぞ！」

真「いやボクが飼うんだ！」

言い争う真と響にやれやれと他のメンバーは肩をすくめる。

響「さあ！一緒にご飯食べるぞ！」

真「いいや！ボクと一緒に散歩に行くんだ！」

自分を指して真似ぶちどるに言う2人に本人は…

真似ぶちどる「まきよ？」

顔を可愛く傾ける。

響&真「カワイイ」

それを見た2人は真似ぶちどるを間に挟んで頬ずりする。

リュウガ「やれやれ」

アビス「ってかちゃっかり雪歩が真に抱き付いてるな」

ガイ「そしてそれに気づいた響が上手く体を動かして真に体をくつつける！」

オーデイン「お前等…」

リュウガはふうくと息を吐き、アビスがそう言ってガイが繋げ、オーデインはアビスとガイに呆れる。

その後、真と響は律子のハリセンを受けたのであった。

律子「はいはいはいはい、バカやってないの。まったくもあ……」

頭を押さえる2人を前に律子はそう言った後に美希に振り向く。

律子「で？そろそろ思い出した？どこで拾ってきたのか……」

美希「え、あ、うん」

話しかけられ、美希は戸惑った後……

美希「えーっと……

……なの……」

美蟹「（あー……これは……）」

美希の長い沈黙に美蟹や他のメンバーが悟った後……

美希「むかしむかしあるところに」

そう言った美希に律子のハリセンが炸裂した。

美希「人は過去にとらわれちゃダメなの！（ミキッ）」

律子「そのセリフ、もういいから#」

リュウガ「……美希の記憶力には困るな……」

真顔で言う美希に律子は#マークを付けて言い、リュウガはため息

を吐く。

真「なあなあ！名前をつけていいか!？」

真似ぶちどる「ヤー」

律子「…好きにしなさい」

真似ぶちどるを抱えた真がそう聞き、律子はそう言う。

千早「ゴ」

美希「あーその子、まこちーっていうの」

またゴと言おうとした千早より先に美希が名前を言った後に春香とあずさに千早は連れて行かれる。

小鳥「なんでまた警察なんか…」

龍騎「大変だったぞ…」

インペラー&タイガ「面目ない…」

そこに警察からインペラーとタイガを連れて帰って来た小鳥と龍騎が来て…

小鳥似ぶちどる「ぴっ」

小鳥に小鳥似ぶちどるが手を上げて挨拶する。

小鳥「こここれ持ち帰りでー!」

律子「はえ!?!」

インペラー&タイガ「あっ、壊れた」

顔を真っ赤にして興奮する小鳥に律子は驚いてインペラーとタイガがそう言う。

小鳥「おおおおお付き合いをせせせせせてていにけけけけけ
っっっっっ!」

律子「落ち着いてください」

リュウガ「それじゃあ分からないぞ」

迫る小鳥に律子はそう言い、リュウガも言う。

小鳥「ご、ごめんなさい…取り乱しちゃって…もう落ち着きました
から」

受け取った水が入った湯のみを持って恥ずかしげに小鳥は謝る。

小鳥「それでこの子…ええっと名前…は?」

小鳥似ぶちどる「ぴっ」

律子「え…?ああ…えー…」

リュウガ「そう言えば…まだ決めてなかったな…」

小鳥似ぶちどるに水の入れて貰いながら聞く小鳥の問いに律子は言葉が詰まり、リュウガがそう言った時…

千早「その子の名前はぴよぴよといます」

小鳥「へー！ー！ー」

千早が来て小鳥似ぶちどるの名前を言い、小鳥は納得する。

律子「あっ！？くら千早っ！！」

千早「(ぐっ)」

リュウガ「まあ…良いじゃないか、名前も良いしな…」

小鳥「そうよ」

慌てる律子に千早はサムズアップして、リュウガがそう良い、小鳥も苦笑して同意する。

亜美「律っちゃん！律っちゃん新しい子が来たって！？」

真美「見せて見せてー！」

そこに双海姉妹が来る。

亜美&真美「おおー！」

まじちー&ぴよぴよ「(ぐっ)」

感嘆の声を上げる双海姉妹にまこちーとぴよぴよは振るえる。

亜美「んっふっふっかなかのかわイケちゃん」

真美「さてさて、どうしやすか？」

まこちー&ぴよぴよ「（ガクガク）」

ニヤリ顔でまこちーとぴよぴよを見る2人に…

タイガ「双海姉妹！後ろ！後ろ！！」

真「で…何する？」

亜美「（やつべー）」

真美「（怒らしちゃった）」

ゴゴゴゴゴゴゴゴと音を放つ真と小鳥にタイガは叫び、双海姉妹は冷や汗を流した。

その後、2人は仲良く殴られました。

響「（良いな…）」

双海姉妹を殴った後にまこちーを抱き締める真とぴよぴよを抱き締める小鳥を見て響は羨ましがる。

響「（はーあ…結局真が飼うのかあー…なんかくやしいなあ…）」

真の家に行けば何時でも会えるがそれでも悔しいもんである。

ちよつと落ち込む響に…

がばっ（ちひゃーが響の頭にしがみ付く音）

響「うわぁー！」

いきなりちひゃーに抱き付かれて驚く響だが…

ちひゃー「くっくっ（パシパシ）」

響「…ありがとう、励ましてくれて」

頭を叩いて響を励ますちひゃーに響はお礼を言う。

龍騎「何はともあれ、一件落着だね」

リュウガ「だな」

その様子に龍騎とリュウガはそう言う。

ミラー10：響と真と小鳥とまこちーとぴよぴよ（後書き）

ウラタロス「新しい子が加わったね」

リュウタロス「どの子もかわいいね〜」

キンタロス「次もどうやら新しいぷちどるが加わるそうやで〜」

シヨウイチ「大変だよな…」

ソウジ「面白い子らしいな」

モモタロス「次回を楽しみにしとけよ！」

ミラー「……伊織とやよいと雪歩とあらー？（前書き）」

士「と言う訳で今回はまたも海外に行く事になった伊織達の話だ」

ユウスケ「引っ張られてるよな」

津上「楽しそうだね」

シヨウイチ「津上……それ思ってるのお前だけだよ」

ミラー「１１：伊織とやよいと雪歩とあらー？」

真美「やよいっちテレビに出るってー!？」

亜美「見たい見たいー!！」

まこちー「ヤー」

律子「あーはいはい、今から点けるわよ…わかったからどきなさい」
ソファーに寝転がる律子に真美と亜美が押し掛かり、律子は答えながらテレビを点ける。

高瀬ゴールド伝説シリーズ

ピラミッドを往く

このあとすぐ!！」

伊織「バカサイのアホオオオオ#」

タイトルと共にどこかに立ってガイに怒鳴り叫ぶ伊織と伊織の後ろにいるやよいがいた。

ライア「今度はエジプトか…」

リュウガ「同行者は？」

タイガ「ファムにナイト、シザースに雪歩に翼だったな…」

オーディン「変わった面子だな」

まこちー「まきよ？」

それを見てライアが呟いた後にリュウガはタイガに聞き、それを聞いたオーディンはそう呟き、まこちーは首を傾げる。

此処で変わって伊織達へ行く。

side 伊織

拝啓 パパ&ママ

水瀬の伊織ちゃんです

私は今、エジプトにいます

思えば…今回の彼女はダイレクトでした

回想

やよい『ね？』

伊織のデコをぺちと叩いて言っやよい

回想終了

…ええそうです。回想の通りのそのひとことで此処まで連れて来られました。

そんな彼女は…

やよい「伊織ちゃん！！こんなの見つけました！！」

輝いてます。ええ、物凄く輝いてます。

此処でナレーションに…ってまだあるのかしら？

side 伊織 終了

side 雪歩

パパパソコンののみみ皆さん

ここにち…は

はは萩原雪歩も申しますすう…

今回は龍騎プロデューサーとリュウガ代理プロデューサーの代理で…
ファミさん、ナイトさん、シザースさんに翼ちゃんと共に荷物持ちを兼ねて来ました。

…ホントは真ちゃんといたかったけど、響ちゃんも一緒じゃないから良いけど…真ちゃんの彼女は私だもん、スタイルは負けてるけどやる気さえあれば大丈夫だけど、私、やる気が空回りするし、とりえは穴掘るだけだし…

side 雪歩 終了

伊織「雪歩ー！！！！」

ファム「雪歩ちゃん！此処ホテルホテル！！」

ナイト「相変わらずだな」

シザース「雪歩ちゃん、最近アイデンティティの穴掘りをゆきばに先にやられてたしな…」

翼「それは関係ないと思われませんが？」

落ち込んでどこからともなくスコップを取り出してホテルの床に穴を掘り始める雪歩に伊織は叫び、ファムが止めに入ってナイトは腕を組んでそれを見て、シザースはホロリとハンカチで涙を拭う様な動作をして翼がツツコミを入れる。

雪歩「ご…ごめんね伊織ちゃん…それにファムさんも…」

ファム「ホントに建物内であんまりやらないでね」

伊織「もう！しっかりしてよね。プロデューサーのいない今回はアంతヤファムさん達が頼りなんだから…」

謝る雪歩にファムはそう良い、伊織は息を吐く。

やよい「伊織ちゃん！こんなの拾いましたー！」

伊織「あつたところに返してきなさい」

骸骨の頭を持って来たやよいに伊織はバックホームと言う感じにび

つと指で指して指示する。

伊織「その機材、高いんだからね！もつと丁重に！！」

スタッフ1「あっハイ！」

スタッフ2「すみません、この小道具は……」

伊織「それは3号室右の通路曲がってすぐ！！」

雪歩「……………」

ナイト「やるな伊織」

シザース「確かに」

的確な指示を出して行く伊織を見ていた雪歩の後ろでナイトは感嘆の声をあげ、シザースも同意する。

雪歩「たくましくなったね…伊織ちゃん……」

伊織「……………そうね」

雪歩の言葉に伊織はふっと遠い目をして哀愁を漂わせた笑みを浮かべる。

雪歩「私、帰っても……」

伊織「ダメ」

おずおずと言う雪歩の言葉を伊織はダメだしする。

雪歩「ところでコレって何入ってるの？けっこう重い…」

伊織「さあ？バカサイが持って行けって言ってたけど…」

ライダーズがそれぞれの仕事をする為に離れた後にず…と背中に背負ったリュックを見て聞く雪歩に伊織がそう言った時…

????「かつかー!」

雪歩&伊織「(ビクッ)」

リュックから聞こえた泣き声と共にリュックがもそもそと動き、それに伊織は離れる。

雪歩「いいいおりちゃあああん!」

伊織「(ごめん無理!)」

後ろからの雪歩の叫びに伊織は謝った後にドヒュと離れる。

side 雪歩

拝啓 真ちゃん

雪歩です

とりあえずピンチだよおおお助けて!!

真『大丈夫！愛する雪歩なら出来るさ！！』 雪歩の中の真ボイス

雪歩「(ま、真ちゃん！)」

そつよ！！私ならでき…

side 雪歩 終了

自分の中の真に応援され、リュックを開けた途端…

もちゅー————— (はるかさんに顔を吸い付かれる音)

雪歩「%\$#&&”\$’##”#Y”!!?」

リュックの中にいたはるかさんに吸い付かれ、いきなりの事に雪歩は声にもならない叫び声を上げてじたばたする。

真ちゃん…出来なかったよ… (by雪歩)

ファム「やよいちゃん、雪歩ちゃん知らない？」

やよい「いないんですか？」

大体の仕事を終えたファムがやよいに聞き、やよいは聞き返す。

ファム「困ったわね…これから打ち合わせがあるのに…」

やよい「どこいつちゃったんでしょー？」

頬に指を当てて困った口調で言うファムにやよいも困った顔をし…

ふと、周りを見るとリュックに頭が入ってビクンビクンしてる雪歩の姿が目に入り…

パタッ（雪歩の足が力尽きる音）

雪歩の崩れ落ちるのに2人は慌てて走る。

ファム「雪歩ちゃん！？雪歩ちゃんしつかり！？」

涎まみれな雪歩を抱き抱えてファムは安否を聞くが…

雪歩「ひとつほってほってほって…ふたつほってほって…」

ファム「ダメだわっ！何かうわごと言ってる！！ちょっと待っててね！今、医者を呼んでくるから！！やよいちゃんよろしく！」

やよい「ハイッ！」

雪歩「はぎわらゆきほです」

思いつきり光りない目でうわごとが口から流れてる雪歩にファムは地面に横たえた後にやよいにそう言い、急いで医者を呼びに行く。

雪歩「おとこのひとと犬がにがてです」

まだうわごとを言って何かが天へ登ってる雪歩にやよいはリュックに体を通り込みある者を取り…

雪歩「ひんそーでちんちくりんで」

「やよい「シヨックりよーほー」

「はるかさん「あー」

「伊織「やよいいいい！！！＃」

「翼「それは逆に雪歩が召されますわ！！」

「雪歩を起こそうとはるかさんを使ってシヨック療法しようとするやよいに伊織は怒り、翼が言う。

1分後

「伊織「本当に大丈夫なんでしょうね？」

「雪歩「はいい…おかげさまでスツカリイ…」

「ナイト「（大丈夫じゃないな）」

「シザース「（ああ、大問題だ）」

「伊織の問いにまだふらあとして目が危ない雪歩にナイトとシザースは心の中で言う。

「雪歩「へえーこの子がはるかさんっていうんですか…よろしくねっ」！」

「はるかさん「はるかっか！」

はるかさんを抱えて挨拶する雪歩にはるかさんも返した時…

雪歩「（カタカタカタカタカタ）」

はるかさん「？」

笑顔のまま振るえる雪歩にはるかさんが？マークを浮かべた瞬間…

雪歩「無理無理無理無理！！！」

伊織「わかった！わかったから！ホテルの床ああ！！」

ファム「落ち着いてええええええ！！！」

シザース「なあ…他のぷちどる達と大丈夫と思えますか？」

ナイト「思いつきり慣れるのに時間がかかるだろうな…」

ドドドドドドと穴を掘る雪歩に伊織とファムが止めに入り、シザースの問いにナイトはため息を付いて答える。

次の日

雪歩「うつつつつ」

はるかさん「ヴぁーい」

撮影中につきはるかさんと共に待機して撮影を見る雪歩

はるかさん「ヴぁーいヴぁーい」

雪歩「ひっ！なな何？どどどどうしたの？」

自分に鳴くはるかさんに雪歩はビクツとして聞くと…

ぴよこ（雪歩の膝にはるかさんが乗る音）

雪歩「ひっ」

自分の膝に乗るはるかさんに雪歩が悲鳴を上げた後…

伊織「ちよつと…次の現場に行くわよ？」

雪歩「うごけませええん」

撮影を終えた伊織に雪歩ははるかさんにしっかりと抱き付かれたので動けなかった。

ファム「どうしたのかしら？」

伊織「あーはるかさんは明るいトコが苦手なのよ…だから少しでも光から隠れようとしてんじゃないかしら？」

雪歩「ああああ」

はるかさん「（ういっういっ）」

はるかさんに首を傾げるファムに伊織は説明し、雪歩に抱き付いて理由を考える。

雪歩「たすけてくださいいいいい」

伊織「聞いているとおりよ、やよい…なんとかかできる？私はムリ」

雪歩のSOSに伊織はやよいの方を向いて聞く。

すると…やよいはいわくつきさを感じる棺にさあとする。

シザース「流石にダメでしょ！」

ナイト「はあ…」

シザースがツッコミを入れた後にナイトはため息を付いた後にダークバイザーを取り出し、カードを引くとダークバイザーは風に包まれ、ダークバイザーツバイに変わるとナイトは引いたカード、サバイブ・疾風をダークバイザーツバイに装填する。

ダークバイザーツバイ「サバイブ」

音声と共にナイトは風に包まれ、収まるとナイトは青き鎧を身に纏いマントを羽織ったナイトサバイブに強化変身する。

そして…

雪歩「えっと…すみません」

ナイトサバイブ「気にするな」

はるかさん「かっか！」

移動中、マントではるかさんを太陽から隠すナイトサバイブに雪歩は頭を下げ、本人はそう言う。

次はピラミッドの内部に伊織とやよいが行く。

伊織「うわっ！何よこの中、まっ暗じゃない！」

シザース「ガンバー」

入り口から中を見て伊織にシザースはそう言う。

伊織「オマケにすっごい暗いし…どうやって進めっ…ていっくのよー」

手探りで進みながら伊織はぼやき…

伊織「ねえ、やよ…近っ！」

振り向いてやよいに聞こうとうとして思いつきり直前にいる事に驚いた後…

やよい「伊織ちゃん！」

伊織「も、もうちょっと離れなさい！」

やよい「いやです」

伊織「やめてっ！押さないで！」

やよい「またいやです」

伊織「やよいっ！…そこは違っ！…にゃあああ！…！」

やよい「えへへ〜」

雪歩「伊織ちゃん、楽しそうだなあ…！」

シザース「（いや、あれ楽しんでる声じゃないよ！）」

ナイトサバイブ「やれやれ」

ファム「大変ね伊織ちゃんも真ちゃんも…！」

はるかさん「ヴぁーい？」

ピラミッド内からする伊織とやよいの声に羨ましがる雪歩にシザースがそうツツコミをいれ、ナイトサバイブは肩を竦め、ファムはそう言い、ナイトサバイブのマントに包まれたはるかさんは首を傾げる。

伊織「やつ、やっと広いトコに出られたわ…！」

やよい「おーーー」

少し服が乱れて疲れた顔をする伊織の隣でツヤツヤ顔のやよいが声をあげる。

やよい「伊織ちゃん！何か箱があるよ！」

伊織「あからさまに怪しいわ！」

あけるなど立て札が立ってる箱を触って言うやよいに伊織がそう言う…

やよい「おうぱーん」

伊織「あ！？ちよつとコラやよい！？」

ガパツと箱の蓋を開けるやよいに伊織が叫んだ後…

伊織「ほらーーーーー…やっぱいいい…またー」

開けられた箱の中ですやすや眠るあずさ似ぶちどるに伊織は泣いた。

一方、ピラミッドの外で…

龍騎「よっー！」

翼「マっ…じゃなくてプロデューサー！？」

雪歩「龍騎プロデューサー！どうして！？」

現われた龍騎に翼は驚き、雪歩が聞く。

龍騎「いや〜心配になってさ…なんかスケジュール調整して来たんだ」

ナイトサバイブ「そうか…それだったら今、伊織とやよいがピラミッド内に入ってる」

頭を掻く龍騎にナイトサバイブがそう言うのと丁度伊織とあずさ似ぶ

ちどるを抱えたやよいが来る。

龍騎「伊織にやよい…ってまた？」

伊織「そつよ…またよ」

あずさ似ぶちどるに気づいた龍騎に伊織は疲れた表情で言う。

伊織「…で、結局連れて帰るのね…」

雪歩「しょ、しょうがないよ、あそこに置いていくわけにもいかな
いし…」

はるかさん「くかー」

寝ているあずさ似ぶちどるを膝に寝かせている伊織に疲れたのか寝
たはるかさんを抱えた雪歩が苦笑して言う。

伊織「それは…そうだけど…あー…律子になんて言えばいいのかし
ら…」

雪歩「…何言っても怒りそうだよね…」

龍騎「確かにそうだな…」

ナイト「伸びてるかな…」

頭の後ろで腕を組んで律子にどう言おうか悩む伊織に雪歩はそう言
い、龍騎も同意して、ナイトは呟く。

シザース「…なんかまた変わった能力持ってそうだな…」

ファム「ありえそうね…」

ぼやいたシザースの言葉にファムは同意する。

この時のシザースの言った事が当たるのは次回である。

くオマケくその頃の響

響「(ぶーー)」

王蛇「どうした？頬を膨らまして？」

響「だって雪歩がないから真と一緒にいられると思ったたらこっちも仕事だぞ！」

オーディン「仕方がないだろ」

響「うゝゝ夏の方に絶対に誘うぞ!!」

真「…何か雪歩と響がないのに冷や汗掻くのはなぜだろう?…」

ミラー「……伊織とやよいと雪歩とあらー？（後書き）」

士」と言う訳で新ぶちどるが登場で次回で名前が出るぞ」

シヨウイチ「今度もな……」

ソウジ「面白い能力を持つてる子だからな……」

アスム「次回をお楽しみに！」

ミラー「12…あずさと美希とみづらさんといお（前書き）」

士「前回出たぷちどるの名前と新しいぷちどるの登場だ」

カズマ「んでもって能力判明！」

シンジ「大変だよね…」

ミラー12：あずさと美希とみづらさんといお

あずさ似ぶちどると共に帰国した後

律子「だーめーでーす!」

しよっぱなからダメだしされました。

律子「これ以上飼えるわけないでしょっ!」

あずさ似ぶちどる「あらー」

伊織「しよ…しよ…しょうがないでしょ!?! エジプトに置いて帰れないじゃない!」

律子「なんでエジプトなの!?!」

伊織「だってあの馬鹿サイが!」

律子「あのバガイ」

龍騎「…やっぱりなつたか!」

シザース「だな」

ファム「どうなるのかしら!」

伊織と律子の会話を聞いて仕事しているメンバーはあずさ似ぶちどるの事について考えてる時…

ふと、ある事に気づき、雪歩が代表で言う。

雪歩「あ…あの…お取り込み中申し訳ないのですが…」

律子&伊織「何よ?」

2人に見られて、雪歩は2人の間を見る。

雪歩「消えちゃいましたよあの子…」

伊織&律子「デチヨン!?!」

雪歩に言われてあずさ似ぶちどるの姿がない事に2人は今気づいた。

律子「　　というワケでこの子の探索をするんだけど」

前置きした後に律子は困った顔をする。

律子「…いったいどこから探せばいいのかしら?」

伊織「あ—————」

オーデイン「確かに」

タイガ「あずさと似てる以外にすぐにいなくなるのも似てるよな…」

律子の言った事に伊織も困った顔の意味を知り、オーデインも同意してタイガが言うと…

ガラ（小鳥が机の引き出しを引く音）

あずさ似ぶちどる」「あらー」

小鳥「ぴよっ!?!」

龍騎「いた!?!」

なんと、小鳥が出した引き出しからあずさ似ぶちどるがひよこっとなん顔を出した。

その時…

どんがらがっしや

フヒュッ（あずさ似ぶちどるが消える音）

一同「!?!」

大きい音と共にあずさ似ぶちどるが消えるのに全員が驚いた後

春香「おっはよーゴザイマス!いやーころんじゃいましたー」

あずさ似ぶちどる」「あらー?」

一同「!?!」

挨拶する春香の頭に何時の間にかあずさ似ぶちどるがいた。

伊織「春香…ちよっとなんこでじっとなんこしてや…」

春香「は…はい？なんか怖い」

にじりと来る伊織に春香は後ずさりした後…

伊織「そいやあー！」

バチッ

フヒュッ

春香「地味にいたい!?!」

勢いよく春香の頭にいるあずさ似ぶちどるをおさえようとしますが春香の額に当たり、またあずさ似ぶちどるは消える。

伊織「くっ!!あと少しだったのに…」

春香「あ~~~~~」

律子「ちよつと伊織さん…?」

悔しがる伊織の後ろで額を押さえる春香にメンバーが同情の視線で見えた時、律子の言葉に振り返ると…

あずさ似ぶちどる「あらー?」

律子「ちよつとガイさん呼んできてくれる#」

伊織「デチョー」

顔があずさ似ぶちどるで見えないがズズズズズと言つ擬音が聞こえる程の律子がいた。

春香「それで…結局どーするの？」

伊織「あ…」

後ろでガイが説教を受けてる間に頭に絆創膏を貼り付けた春香があずさ似ぶちどるについて聞く。

伊織「どうせまた面倒見ることになるでしょ」

あずさ似ぶちどる「あらー？」

ちひゃー「くっ！？」

春香「あー…」

龍騎「確かに」

伊織の言葉に春香と龍騎はちひゃーに近寄るあずさ似ぶちどるを見て納得すると…

伊織「だから…」

ぱんっ（やよいが手を合わせて鳴らした音）

フヒュッ

一同「あ」

やよいが手をぱんつとするとあずさ似ぶちどるはまた消えた。

伊織「（ぷしゅー）」

春香「伊織!？」

龍騎「あまりの事にオーバーヒートした!！」

アビス「タイガ!フリーズ!フリーズ!」

タイガ「それしたら伊織が凍る!」

やよい「おもしろーい」

頭から煙が出る伊織にメンバーは慌てて伊織を介抱する。

伊織「と…とりあえず音か何かで飛ぶみたい…ね」

頭に氷が入った袋を乗せたまま伊織は分かった事を言う。

伊織「さ……………探さなきゃ……………」

春香「あーあー!伊織は寝てていいよ!私達が探すから……………」

うつ…と起き上がろうとする伊織を春香は制止して、言う。

ちなみに他のメンバーはファムを除いて出ている。

伊織「でもどうやっ…」

聞こうとした伊織に春香は左手で自分の頭でもにゅもにゅしている
はるかさんを指し、その右手には水が入ったビンが…

春香「いけーっ！」

はるかさん1「かつか！」

はるかさん2「かつかー」

はるかさん3「かつかー！」

伊織「やめてええええ」

春香の号令に増えたはるかさん集団は動き、伊織は涙目で追っ。

一方

あずさ「きょうもおしごとーにゃんにゃんにゃん」

事務所でそんな事が起こってるの知らずにどたぶーんな音と共に
歌いながらあずさは歩いていた。

あずさ「あらー?」

あずさ似ぶちどる「あらー?」

するとあずさ似ぶちどると遭遇した。

あずさ「あらあら…迷子さんかしらー？」

あずさ「似ぶちどる」あらー」

あずさ「うふふ、じゃあ一緒にお家を探しましょう？」

そう言うとあずさ似ぶちどるを胸に抱えて歩き出す。

2時間後…

象「パオー」

あずさ「…あらー？」

なぜかアフリカに来ていた。

そのままあずさは歩いていくと…

美希「あずさ！？」

あずさ「あら美希ちゃんー」

美希と出会い、驚いてる美希にあずさは普通に声をかける。

美希「どうしたの？こんなアフリカまで…あつ新しい子なの」

あずさ「それがねーこの子のお家探してたんだけど…迷っちゃったみたいでー」

王蛇「またか…」

ゾルダ「いや、あずささんは良く日本から外国に行けるね。」

あずさ似ぶちどるの頬をぷにっとながら聞く美希にあずさは苦笑して良い、美希について来ていた王蛇とゾルダがそう言う。

美希「なんともあずさらしいの！もうすぐ撮影終わるから一緒に帰ろっ。」

あずさ「はい」

美希の言葉にあずさは返事した後…

美希「それまでその子の面倒もお願いするの——」

じ——とあずさ達を見ている伊織似ぶちどるを指して言う。

あずさ「まあまあーかわいらしい子ねー」

伊織似ぶちどる「キー！キー！」

近寄って見るあずさに伊織似ぶちどるは威嚇する。

あずさ「うーん…なんだか機嫌悪いみたいねー…あっちでゆっくりしてましょ？」

伊織似ぶちどる「キー…」

困った顔をした後にあずさ似ぶちどるにそう言って離れるあずさに威嚇をしていた伊織似ぶちどるは離れて行くあずさに…

伊織似ぶちどる「もっもっ」

オロオロし木から離れて追いかけ…

あずさ「ひっかつた？」

うふふっ？と悪戯成功と笑みを浮かべて舌を出すあずさに伊織似ぶちどるは顔を赤くする。

美希「あずさーお待たせなの」

ウフフと頭にあずさ似ぶちどるを乗せて膝に伊織似ぶちどるを乗せて頭を撫でていると美希が来る。

美希「すっかり仲良しさんだねいおー」

伊織似ぶちどる「いお」もっ

あずさ「いお？その子』いお『っていつの？」

いおを持ち上げて言う美希にあずさはそう聞く。

美希「そだよー、でこちゃ…伊織に似てるからいおって名前をつけたの」

あずさ「あらそつなの？でもどこで見つけてきたのかしらー？」

胸にいおを抱えて言う美希にあずさはどこで見つけたのかを聞くと…

美希「さあ帰るのあずさー」

あずさ「忘れたのね？」

ゾルダ「それは俺が説明しよう」

あずさに背を向けて右手を振り上げて言う美希にあずさはそう言い、ゾルダは苦笑気味にいおとの出会いを話す。

3日前

社長「 守り神？」

首長「ウム」

いお「キーー！」

ちひゃーの時に会った首長の言った事に社長は聞き返し、首長も頷いた後に言う。

首長「元々は別ノ部族ノ神族だったンじゃが、その部族がいなくなっってしまったてノう…ウチで祀っておるんじゃ」

社長「はあ…」

王蛇「ふうん…」

美希「へー…たべる？」

首長の説明に王蛇は頭を掻き、美希はオニギリを勧める。

首長「…なんじゃが、そやつかなりノワガママでノ…ワシらも手をやいておるんじゃ」

社長「はあ…」

王蛇「伊織と似てるな…」

美希「へー、ほれー」

いお「もっ！もっ！」

ハアーとため息を吐く首長にゾルダはびよんびよんと美希のオニギリに飛びつこうとしてるいおを見る。

首長「…ちゅーワケであとよろしく！またオニギリつけるけん！」

美希「了解！ラジャーなの」

社長「えっ！？」

ゾルダ「ありやりやまた…」

首長のサムズアップに美希も同じようにサムズアップで返す。

そして現在

あずさ「へえー神様なのーすごいわねー」

いお「もっ」

美希「すっぴいよなー」

話を聞き、いおを見て言うあずさに美希も同意する。

ゾルダ「そっちはそっちであずささんに似た子がいるんだね」

美希「ところでこっちの子の名前はなんてーの？」

あずさ似ぶちどる「あらー」

あずさ「そういえばー…まだ名前決め手なかったわねえ」

頭にあずさ似ぶちどるを乗せながら聞く美希にあずさは頬に手を当てて言う。

あずさ「うーん…日本で帰ってみんなで決めましょ？」

美希「それがいいのー！」

あずさ似ぶちどる「あらー」

いお「もっ」

ゾルダ「どんあ名前が出るのやら」

少し考えた後にあずさはそう決め、美希もそう言った後にホテルへ向かう。

同時刻 日本

千早「！」

貴音「どうしました？如月千早…」

翼「何か感じたのではないのでしょうか？」

龍美「ですかね」

突然別の方向を向く千早にババ抜きをしていた貴音が聞き、翼と龍美が言う。

戻って美希達

美希「ええ！？飛行機飛ばないのっ！？」

スタッフの人から言われた事に美希は驚いて聞く。

スタッフ「天候不順でして明日にならないと…」

美希「ええ~~~~~…そんなー」

ゾルダ「こりゃあ困ったね…」

あずさ似ぶちどる「あらあら」

あずさ「なあに？」

その言葉に美希は困った顔をしてるとあずさ似ぶちどるがあずさに呼びかける。

美希「どこにするあずさ、ミキ、明後日ライブがあるのに…なにしているの？」

あずさ「似ぶちどる」あら（ぼんぼん）

あずさ「手をたたくの？」

王蛇「？」

ゾルダ「何が起こるのかな？」

美希があずさの方を向くとあずさ似ぶちどるが自分の手をぼんぼんさせて手を叩く様にあずさに教えてるとあずさも言われるまま手を叩く。

パンツ

フヒュッ

スタッフ「きゃあああ…消えた!？」

スタッフの前から4人と2匹は消えた。

同時刻 765プロ

春香「うーん…見つからないなあ…」

はるかさん「かつか!」

はるかさん2「かつか」

はるかさん3「かつか」

はるかさん4「かつか」

はるかさん5「はるかつか」

春香があずさ似ぶちどるを未だに探していた。

律子「春香ちよつとつるさ…何してんの!？」

龍騎「また増やして!」

春香「あつ!？えっーとおーその」

仕事をしていた律子と外に出ていた龍騎が来て、春香は目を泳がせていると…

春香の上に4人と2匹が落ちて来る。

あずさ「ただいま帰りましたー」

律子「お…お帰りなさい…なんなの今日は…」

春香「あつあずささん…おっ重っ」

春香の上に落ちたあずさがそう言い、律子は呆然としながら言う。

春香「もー…危うくつぶれちゃうト」でしたよ?」

あずさ「じゅめんなさい〜」

後ろで律子のはるかさんを戻してる間に春香はイタタ…と背中を摩る。

あずさ「お詫び…っっていうのもなんだけど、この子の名前をお願いしてもいいかしら〜?」

春香「あ、ハイいいですよー」

胸に抱えたあずさ似ぶちどるの名前をお願いするあずさに春香は快く受ける。

春香「じゃあ ……あずさんに似てるからみづらさん!」

あずさ「三浦さん…?」

春香「いいえっ!みづらさんです!」

名前を言う春香にちがいの?とあずさは聞くと春香はちがいますよと否定する。

同時刻 某所

千早「(ぼろぼろぼろぼろ)」

美蟹「うわっ!凄いい涙」

貴音「面妖な!」

物凄く涙を流す千早に美蟹と貴音は驚く。

龍騎「いや〜なんとか見つかったな」

タイガ「そうだね」

オーデイン「それで新しいのが加わったな」

みづらさんといおを見て言う龍騎とタイガにオーデインも言った後に…

いお「キー!!」

カツ!

インペラー「ぎゃあああああああ!!!!」

龍騎&タイガ「ビーム撃ったあああああああ!?!」

何かあったのか、いおのオデコからビームを放たれ、それがインペラーに命中し、龍騎とタイガは驚く。

ナイト「また…賑やかになりそうだな」

ライア「そうだな…」

ファム「あはは…」

それを見て3人はそう言うのであった。

ミラー「12…あずさと美希とみづらさんといお（後書き）」

士「今回も凄い奴らが加わったな」

五代「いや〜凄いね〜」

ワタル「目からビームならぬオデコからビーム…」

アスム「凄いですね…」

ヒビキ「次回はあふうのちよつとした話だな〜」

ミラー13：真とリュウガと覚醒あふう（前書き）

士「今回のあふうのちょっとした事が分かるな」

ユウスケ「だな」

カズマ「真ちゃん…」

シンジ「大変だよな…」

真「たしか収録ありましたよね！？今日！！」

リュウガ「そうだな…スタジオには冷房があるだろうしマシだろうな…」

聞く真にリュウガは顎に手を当ててそう言つと…

リュウガ「さ、行くか」

真「ちよつと待てーい」

もぞもぞ動くリュックを背負つたリュウガに真はそう言つ。

リュウガ「新しいぷちどるを拾つたと思つたか？今回は違つ、入つてるのはあふうだ」

真「あーなんだ…つて」

リュックを下ろして中にいたあふうを見せるリュウガに真は納得しかけて気づいた。

真「なんか髪型変わつてませんか？」

あふうは本来、美希と同じ金髪ロングなのだが今は茶髪のショートヘアでアホ毛はハート型に変わつていた。

リュウガ「夏があふうにとっての毛の生え変わりだろうが…」

ビュッ（あふうがリュウガの頭に乗る音）

リュウガの言ってる途中であふうがリュウガの頭に飛び付く。

あふう「はにいく？」

リュウガ「…とまあ、こうなったらやたら俺やさつきまでいた龍騎達に懐いてた…」

真「……なんだろうこのフラグ臭（いやな予感）……」

ベタベタしているあふうを気にせずに言うリュウガに真はそう呟いた。

あふう「（じいーーーーー）」

真「（あっ）」

そしてあふうに見られてる事に気づいた真は確信した。

真「（やっぱり男性に反応するみたいだ…このままじゃマズイ…何か先手を打っておかないと…）」

背中を向けてあふうの視線を受けながら真はそう考えた後に…振り返り…

真「ほっ、ほーーーらっボクは女の子だよ！？こんなにキャピキャピなスカートの似合っ…」

まきよーーんと左目でウィンクしててへっ舌を出して女の子らしさをアピールする真だが…

結果は…

あふう「はにいいいいいいいい」

真「ですよねーーーー」

リュウガ「（頑張り）」

残念ながらあふうに跳び付かれ、真は泣いた。

真「アレですよ。俗にいう発情的なものですよきつと」

リュウガ「そうか…」

あふうが頭でもそもそされながら真はそう言い、リュウガは納得する。

リュウガ「とりあえずそのまま連れて行く…置いて行けば勝手に出て知らない奴に付いて行く恐れがあるからな…」

真「うえーい」

はーーーーーあと長いため息を付いた後に弱弱しく答える。

リュウガ&ドラグブロッカー「あっ?」

出た所で黒髪の肩まで来る髪に黒のチャイナ服を着た少女な姿になっているドラグブロッカーとばかり鉢合わせする。

真「どうしたんですか代理プロデューサー…って龍美?」

あふうをお腹にくっ付けて降りて来た真がドラグブラッカーに気づく。

リュウガ「違う、こいつは龍美の双子の姉妹だ…名前は…」

ドラグブラッカー 黒美「城戸 黒美よ」

リュウガの言葉にドラグブラッカーはそう言う。

真「成る程、いや〜服や目に髪以外が似てたから一瞬間見えちゃったよ…ボクは菊池 真…龍美に用事？」

黒美「ええ…忘れ物を届けにね」

納得する真に黒美はそう言うとお菓子を取り出す。

真「忘れ物それ？確か食べてたけど…」

黒美「色々と食べるのよ…」

リュウガ「まあ、そうだな…それじゃあ…俺達はこれから収録があるからこれで」

真の呆れた声に黒美は遠い目をし、リュウガは同意した後に黒美にそう言うとは別れた。

そして収録のあるテレビ局で…

スタッフ「えっ…と何かの罰ゲームですか？」

リュウガ「いや…」

顔にあふうが張り付いてる真を見て聞くスタッフにリュウガはそう言う。

少しして…

スタッフ「それじゃリハーサル行きますよー」

真「はい…それじゃ、ちょっとココでおとなしくしててねー」

スタッフに呼ばれて真は返事をした後に荷物の隣にあふうを置く。

真「おまたせしましたー！」

あふう「はにつはにい」

駆け出す真にあふうは手を伸ばして鳴き…

あふう「びゃー…」

真「……………」

あふうの泣き声に真はマイクスタンドにもたれる。

あふう「びゃー…」

真「すいませんー！リハの間だけ一緒にいいですか？」

スタッフ「うーん…まあしょうがないツスねー」

泣いてるあふうを慰めながら真は申し訳なさそうに頼み、スタッフも頭を掻いて了承する。

リュウガ「（起こりそうだな…）」

真が歌っている間、リュウガがそう思った時…

びたっ（真の顔にあふうが張り付く音）

真「#%&\$#!||\$”\$+* < > !?」

リュウガ「（やっぱりか…）」

あふうを剥がそうと頑張る真を見てリュウガはため息を付いた。

リュウガ「戻ったぞ」

龍騎「おっ、リュウガおかえり」

雪歩「あ…代理プロデューサーお帰りなさい」

響「お帰りだぞ」

頭にあふうを乗せながら帰って来た龍騎と雪歩、響が言う。

真「（ズーーン）」

雪歩「何かあったんですか？真ちゃんはずっとああなってますけど

…」

響「思いつきり落ち込んでるぞ」

リュウガ「実は…色々となあふう関連で…」

龍騎「あー…」

寝転がって落ち込んでいる真に雪歩と響が聞き、リュウガは頭のあふうを指差し、龍騎は納得する。

雪歩「よくわかんないけど…げ、元気出してね真ちゃん…」

響「そっだぞ！」

真「雪歩…響…」

雪歩と響に声をかけられ、真は涙目だが起き上がる。

雪歩「ほら、いつもみたいにカッコよく、きりっと男の子っぽくね
」！」

響「何時もみたいに元気よくダイナミックに行って欲しいぞ！」

雪歩「あとファンレターきてたよ女の子から！！ガンバ」

真「ううわあああああ」

龍騎「2人とも…それ思いつきり真の傷を開いてるよ…」

雪歩&響「あれ？」

リュウガ「やれやれ」

あふう「はにい〜」

2人の言葉に真は泣いて駆け出し、龍騎がツッコミを入れて雪歩と響は首を傾げ、リュウガはため息を吐く。

真「小鳥さん！」

小鳥「はっはいつ!?!」

パンツと扉を開けて来た真に小鳥はビクツと驚く。

真「ボクそんなに男っぽいのですか!?!かわいくないですか!?!」

小鳥「え!?!え!?!」

詰め寄られてそう聞かれた小鳥は戸惑った後に考えて言う。

小鳥「んー……そうねー……真ちゃんは今のままで十分カワイイと思うけどな」

左頬に指を当ててそう言う小鳥に……

ぎゅっ

小鳥「え!?!え!?!」

真は無言で抱きつき、小鳥はまたも戸惑う。

雪歩&響「羨ましい…」

思いつきりドアの外で雪歩と響が羨ましい顔で小鳥を見ていた。

リュウガ「ちっちゃん、この資料のチェックを頼む」

ちっちゃん「めっ!」

頭にあふうが張り付いたまま書類を持って来たリュウガにちっちゃんは驚く。

ちっちゃん「めっ!めっ!」

リュウガ「ん?かがめか?」

あふう「はにいー」

ちっちゃんの動作にリュウガは言われた通りにかがむと…

ちっちゃん「めっ」

すぼん

あふう「やー!」

あふうを付かんでリュウガから剥がす。

ちっちゃん「もー#」

あふう「あふう…」

手でバツテンを表して注意するちっちゃんにあふうは冷や汗を流す。

その後、夏の間、男性メンバーは頭にあふうが張り付いたのであった。

なお、龍騎の場合、契約モンスターであり、龍騎に好意を寄せてる龍美達に、リユウガの場合は律子やちっちゃんに睨まれたのであった。

あふう「はにいいいいいい」

真「ちいがあああう」

シザース「ってか、ボーイッシュな女の子も好きって事かね」

インペラー「だな」

勿論真もであり、シザースとインペラーはそれを見てそう呟いたのであった。

ミラー13：真とリュウガと覚醒あふう（後書き）

ヒビキ「いや〜面白い子だな〜」

翔太郎「俺達にも張り付きそうだな〜」

フィリップ「（その場合、彼女達に睨まれそうだね）」

剣崎「何かナツルも懐かれそうだな〜」

睦月「あ〜確かに〜」

士「さて、次回で原作での残りのぷちどるが出るな」

ユウスケ「だな〜」

サイドミラー2：他の契約モンスター達（前書き）

士「今回はあんまり出てないモンスター達の話だ！」

カズマ「ホントね」

シヨウイチ「それで擬人化した時の名前も発表」

サイドミラー2：他の契約モンスター達

ゴルドフェニックス「突然だが、我々も就職しなければならぬ！」
ドーンとのんびりしているメンバーにゴルドフェニックスはそう言う。

ベノスネーカー「あつ？いきなりだな」

メタルゲラス「どうしたのさ？」

デストワイルダー「頭打ったの？」

ゲームをしていたベノスネーカーとメタルゲラスが振り返り、デストワイルダーがそう言う。

ゴルドフェニックス「私は正常だ…ドラグレッダー達はアイドルになったから我々もこのまま無職もといニートでいるのはまずい！」

マグナギガ「まあ、確かにほとんどマスターのお金で過ごしてたしね」

槌鮫「それについては…」

鮫剣「同意ですわ」

青の腰まで来る髪に銀色の目、鮫の刺繍がされた青いドレスを着ているアビスラッシャーもとい城戸 鮫剣と水色の首まで来る髪に銀色の瞳、鮫の刺繍が入った水色のジャケットを水色のタンクトップ

の上に羽織り、短パンを履いているアビスハンマーもとい城戸きと 槌つ
鮫めが手に何かを抱えて来る。

ブランウィング「おかえり…って何それ!？」

槌鮫「さつき、元契約主にやよい達とこのロイヤルグレートキング
サンマを取りに行ってた」

エビルダイバー「半漁人みたいだね」

驚くブランウィングに槌鮫がそう言い、エイの模様が入っている赤
色ゴスロリを着たボーイッシュな少女なエビルダイバーはそう言う。

槌鮫「いや、高天原さんとアビス氏のは凄かったな」

ギガゼール「どう言う風にそうなったのか知りたいよ」

槌鮫の言葉にギガゼールはそう言う。

その後、R G Kサンマをブランウィングが料理している間に円形
を作って話し合う。

メタルガラス「それにしても2人共何時の間にアイドルになったた
の？」

鮫剣「勿論、現マスターという為によ！」

黒美「そんな描写が今までなかったが…」

槌鮫「そう言うメタなツッコミはなしの方向で…」

メタルゲラスの問いに胸を張る鮫剣に黒美はそう言い、槌鮫がそう言う。

ゴルドフェニックス「まあ、我々の中でドラグレッダー、ダークウイング、ボルキャンサー、バイオグリーザ、アビス姉妹の6人がアイドルをやっているが我々はほとんど仕事と言うのをやってない！」

マグナギガ「それじゃあどうするの？マスターと結婚する為に戸籍は用意してるけど…」

エビルダイバー「同じ苗字にしちゃってるけどね…」

ゴルドフェニックスの言った事にマグナギガがそう言い、エビルダイバーがそう言う。

ミラーモンスター達は全員が真司こと龍騎が大好きである。

ちなみに判明してないメンバーの名前は…

ゴルドフェニックス：鳥火ちょうか

マグナギガ：牛美うしみ

エビルダイバー：？美えみ

ブランウイング：美白みく

メタルゲラス：犀美さみ

デストワイルダー：虎子とらこ

ベノスネーカー：美蛇みじゃ

ギガゼール：麗葉れいよう

である。

此処から表記もそれにする。

犀美「んじゃあ僕達もアイドルか従業員になる？」

美白「私は家事に専念するので良いですよ」

犀美の提案に調理した美白がそう言う。

鳥火「ふむ…それでだ…どうせなら765プロと876プロに分かれて入らないか？」

虎子「確かに流石に多いとね…」

黒美「私は876プロにする。龍美がいるし、競い合いたい」

？美「では私も876プロへ行こう。翼と張り合いたいしね」

犀美「それじゃあ僕は765プロでアイドルを…気の合う子がいるし」

虎子「んじゃあ876プロへアイドルに」

鳥火「では、私は事務員で765プロに入るう」

牛美「んじゃあ残った私らは876プロに事務員で入るか」

美蛇「まあ、良いぞ」

麗葉「あたかもOKだよ、んじゃあお互いに頑張ろうか」

それぞれそう言った後に龍騎や他のメンバーが来る。

真司「ただいま」

龍美「ご飯です」

美白「今日は2人とアビス氏が取ったサンマ料理です」

真司「（あれか…）」

なお、R G Kサンマので寿司を作って美味との事であった。

サイドミラー2：他の契約モンスター達（後書き）

ソウジ「これはなかなか…」

シヨウイチ「良く作れたな」

津上「結構いけますよ」

翔太郎「食べた事あるのかよ!？」

フィリップ「本編を楽しみにしたまえ」

ミラー「14・響と貴音とちびきと不思議系ぷちどる?」(前書き)

士「と言う訳で新しいぷちどるが2匹出るぞ」

カズマ「これで原作で出たぷちどるは全員出ましたねチーズ」

士「チーズじゃない、チーフだ」

ヒビキ「始まるぞ」

ミラー14・響と貴音とちびきと不思議系ぶちどるっ

響「やつよいー！一緒に遊ぶぞー！..」

はいさーい！と元気良く挨拶してやよいを誘う響だが..

やよい「ごめんなさい..はるかさんのご飯を作らないといけないんですー」

はるかさん「ヴぁーい」

響「そ、そうか..」

申し訳なさに謝るやよいに響は残念がるがしょうがないと割り切る。

そして頭の後ろで腕を組んで歩いていると...

ガチャ

貴音「どうしました？」

響「（口；）..」

ロッカーから貴音が現れた事に響は驚く。

貴音「それで..?どうしたというのです」

響「いやさー、みんな何かしらのチビたち飼ってんじゃん？自分も

何か飼いたいなーって」

ソファーに座った後に切り出す貴音に響はそう言い、貴音はふむ…と顎に手を当てて確かにとあさつての方向を向いて心の中で頷く。

事務所ではゆきば、あふう、ぴよぴよを、千早がちひゃー、やよいがはるかさん、貴音がやよにこあみとこまみ、小鳥がちっちゃん、真がまこちー、あずさがみうらさん、伊織はいおと言う感じに765プロでほとんどのメンバーがぶちどるを連れている。

貴音「たしかほかにも動物飼ってましたよね？もう十分なのは…？」

響「いや…」

響に向き直り、そう聞く貴音に響はあさつての方向を向き…

響「みんなでストライキ起こしてさ…」

貴音「どうすればそうなるんですか…面妖な」

えへつと乾いた笑みを浮かべる響に貴音はそう言う。

貴音「まったくあなたは…しょうがないですね」

はーとため息を付いた後に貴音はそう言う…

貴音「（パチン）こあみ、こまみ」

こあみ「とかっ！」

こまみ「ちー！」

指を鳴らして呼ぶと上からこあみが貴音の頭に乗し、下からこまみがどこからともなく現れ…

貴音「おそらくアノ場所です。捕まえてきなさい」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

指示されて2人は飛び出す。

貴音「では、戻ってくるまでトランプでもしていましよう」
（ニッコミ）
「

245

響「どこからツッコんでいかすらわかんねー！？」

響に向き直り、トランプをスツと取り出す貴音に響は心の中で叫んだ。

数分後

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

貴音「あら、おかえりなさい」

袋を抱えて帰って来た2人をよくできましたと言って頭を撫で、2人は嬉しそうに目を細める。

貴音「さ、開けてごらんなさい」

響「う…うん」

もそもぞ動く袋を開ける様にささと勧める貴音に響は戸惑いながら開けると…

???「あがー！あがー！」

魚に下半身を銜えられて泣いてる響似ぶちどるが出てきた。

貴音「よかったですね？」

響「やりすぎだバカあーっ！！」

響似ぶちどる「ぴー」

可愛げに首を傾けて笑顔で言う貴音に泣いてる響似ぶちどるを諫めながら同じ様に涙目になった響が怒鳴る。

響「ごめんなーもう大丈夫だぞ」

ズズ…と泣き止んで鼻を吸る響似ぶちどるを安心させる様に響はしやがんで言う。

響「おーし、キミのお家はどこ？送ってくぞ」

貴音「地球の裏側ですよ」

よつと立ち上がって響似ぶちどるにそう言う響に頭にこあみ、膝にこまみを乗せた貴音がそう言う。

響「は？どこよ？」

貴音「ではせつかくですから行って見ますか？ウラ側へ」

みづらさん「あらー」

あつけにとられる響に貴音はこあみとこまみを通りかかった王蛇に預けた後にみづらさんを頭に乗せる。

響「ちょ、ちょっと待っ」

ぱんっ（貴音が手を叩く音）

フヒュッ（みづらさんによりワープする音）

王蛇「やれやれ」

みづらさんによりワープした響と響似ぶちどる、貴音とみづらさんを見送った後に王蛇は呟く。

こあみ「とかー！」

こまみ「ちー！」

王蛇「ん？どこか行くのか？」

ぐいぐいつと自分の足を引っ張るこあみとこまみに王蛇はそう聞き、
2人は頷くと王蛇はあゝと理解する。

王蛇「あいつ等の所か？」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

最近知り合ったぶちどるに似た子を飼ってる所にいる双子の所を含
んで聞くと2人は頷く。

王蛇「んじゃあ行くか」

こあみ「とかー！」

こまみ「ちー！」

その頃、飛んだ響達はというと…ブラジルにいた。

貴音「さ、着きましたよ」

脱力する響にカンラカンラと笑いながら貴音はそう言う。

貴音「さあさあこの子の家を探しますよ！」

しじょつと顔を抑えてる響に貴音はそう言う。

響似ぶちどる「だぞだぞだぞ！」

響「何さ?...は?...じゃない?...じゃ、ど?...沖縄!?!」

響似ぶちどるの言った事に響はガナハーと叫んだ後

響「だましたな!?!」

叫んで貴音の方を見ると...

ぱんっ

フヒュッ

丁度ワープしていた。

響「ちょっと!?!置いていくなぁあ!?!」

貴音達がいた場所を見ながら響は叫んだ。

side 響

はいさい!?!自分はガナハヒビキ!?!...少し人生にギモンをもったぞ.....

side 響 終了

響「はー、とりあえず日本語わかる人を探すぞ」

ズーンとorz体勢で落ち込んだ後に立ち直って響似ぶちどるを抱えて歩き出すと...

伊織「！」

そこに伊織がいて、響は駆け出す。

響「うおおー！伊織いいい！会いたかったぞー！…」

伊織「ち、ちょっと！！恥ずかしいじゃないくっつかないでよ！！」

龍美「それに伊織にはやよいがいるですよ」

伊織「あんたは黙ってなさい」

追い付いて伊織に抱き付いてぐりぐりする響に伊織は顔を赤くして言い、一緒にいた龍美の言葉に伊織はそう言う。

響「助かったぞー！でもなんでこんなトコにいるんだ？ロケかなんかか？」

伊織「あー…ま、まあそんなところ…よ？」

龍美「です…」

落ち着いた後に離れた響の言葉に伊織と龍美は言葉を濁す。

伊織「で、でも今から帰るところだったし、しょうがないから一緒にのせてってあげてもいいわよ？」

龍美「どうですか？」

響「ほんと!?!」

左手で軽く髪をかき上げた伊織の後の龍美の提案に響は顔をぱーと輝かせた後…

龍騎「あつ、こんなとこにいた」

インペラー「まったく勝手に帰ろうとしてー…まだロケ残ってるだろ『海外の珍味!スぺパピププの踊り食い』が」

伊織「いいいやあああ」

龍美「ですうううう」

龍騎とインペラーが来て、そう言って2人を引きずって行く。

響は響似ぶちどるを抱えて付いて行く。

伊織「ぎゃーー無理無理無理!?!」

龍美「外見が前食べたサンマよりマシですけど無理ですううう!?!」

響「うーーーわーー」

体育座りで伊織と龍美のロケの終了を待つ響と響似ぶちどるは2人に同情した。

響似ぶちどる「だぞだぞ」

響「え？自分と一緒に暮らす？…いいの？」

笑顔で話しかけて来た響似ぶちどるの言った事に響は驚く。

響「でも本当に自分でいいの？ご飯を食べちゃったり逃がしちゃったりするけど本当にいいの？」

響似ぶちどる「ないさー！」

響の確認の問いに響似ぶちどるは変わらない笑顔で頷くと響は体を震わし…

響「う…うわぁぁんちびきー！！」

響似ぶちどる改めちびきを歓喜しながら泣いて抱き締める。

その後、2人は帰りは仲良く寝たのであった。

貴音「ふふ…うまくいきましたね」

ちよつと離れた場所でそれを見ていた貴音はくすつと笑う。

貴音「では私たちも帰りましょうか」

みづらさん「あらー」

ねー？と聞く貴音にみづらさんも同意した後…

ぐいっ

貴音のスカートの裾を…貴音似ぶちどるが引つ張る。

貴音「ほお…」

みづらさん「あらー」

それに貴音は貴音似ぶちどるを見て声を漏らし、みづらさんはそれを見ている。

次回に続く！

ミラー「14：響と貴音とちびきと不思議系ぶちどる？」（後書き）

アスム「最後に出た貴音さん似のぶちどるの名前は次回！」

ヒビキ「楽しみに待っててくれよ読者諸君（しゅっ！）」

カズマ「スペパピププ…凄いな…」

ユウスケ「うん…；」

ミラー15・貴音とたかにゃと不憫インペラー（前書き）

インペラー「うおおおおおい！！タイトル！！」

カズマ「まあ、事実だし」

アスム&ワタル「うんうん」

インペラー「子供にも認められてる俺って…」

ソウジ「陳情だな」

シヨウイチ「おい」

良太郎「それでPVが2万突破しました」

龍騎「これからもライぶちをよろしく！」

ミラー15：貴音とたかにゃと不憫インペラー

side 貴音

前回のあらすじ、魔人の手によりさらわれた四条貴音（イメージとしてはなぜか眼鏡をかけた怪物にあーれえーと攫われる貴音）

魔人との熾烈を極める戦い！そこに立ち上がった伝説の双子勇者、亜美&真美！（イメージとしては鎧とマントを着た亜美と真美）

仮面ライダー龍騎／ライダーとアイドルとぶちどる日常／劇場版レジェンド オブ 双海（イメージとしては剣を掲げる亜美と真美）

この秋公開！！

side 貴音 終了

貴音「 などと」

インペラー「これは貴音の妄想です。実際に公開の予定はないです」

ほわわと顔を赤らめてる貴音の後ろでインペラーがそう言う。

貴音「あら？インペラーさん」

インペラー「なんているんだ？お前？」

気づいた貴音にインペラーはそう言う。

貴音「質問を質問で返しますが…何で此処に？」

インペラー「あ…置いて行かれたんだよ…」

貴音「なんと…」

手短な所に座ってため息交じりにそう言うインペラーに貴音は呟く。

貴音「それでしたら、みうらさんもおりますので…即時帰れますよ？」

みうらさん「あー…」

インペラー「お！だったらすぐに帰してくれ」

ひょいとみうらさんを胸に抱いて言う高値にインペラーはそう言う。

貴音「…ただ私『あまぞん』という場所へ行ってみたいのでまずはそこから…」（スッ）」

インペラー「え？」

スタンバイとみうらさんを頭に乗せてそう言う貴音にインペラーは一瞬驚いた後…

インペラーと貴音、貴音似ぶちどるとみうらさんはアマゾン奥地にいた。

満足気な貴音の隣でインペラーは…

インペラー「すいません。日本に帰してくださいm(´▽｀)m

貴音「そうですか…?」

土下座するインペラーに貴音は申し訳ない顔をした後に分かりましたと言います…

貴音「せっかくですからピラルクーとやらを食してみたかったです…」

インペラー「カンベンしてください…後、ピラルクは食べれるのか？」

スタンバリーになったみうらさんを頭に載せてため息を付いてそう言う貴音にインペラーはそう言う。

そして…

ヒュン

千早「!?!?」

なぜか千早の場所にワープした。

千早「イ…インペラーさん!?!?な、何で!?!?今収録中ですよ!?!?」

インペラー「いやー…!?!?」

貴音「ごきげんよう如月 千早」

驚いて聞く千早にインペラーは頭を掻き、貴音は平然と挨拶する。

千早「た…貴音！？あなたね…」

貴音に気づいた千早が振り向いた瞬間、貴音はスッと貴音似ぶちどるを前に出す。

千早「な…え？新しい子？」

貴音「(ニコッ)」

それに千早は啞然とし、貴音は笑うと…

貴音「養ってください」

貴音似ぶちどる「(びっ)」

千早「とりあえず座りましょうか？」

笑顔で言う貴音と手をあげる貴音似ぶちどるに千早は貴音にそつ言
う。

インペラー「マジで酷くね？」

龍騎「悪い悪い」

貴音に説教している千早を尻目に携帯で龍騎にかけるインペラー

龍騎「それで帰って来れたのか？」

インペラー「うん、貴音がみつらさんといたおかげでなんとか…」

龍騎の問いにインペラーはそう言う。

インペラー「それでしょう、貴音がさ、新しいぶちどるを見つけてよ…今度は自分似のぶちどるを」

龍騎『そうか…それで名前は？』

電話片手にひよいと貴音似ぶちどるを持ち上げて言うインペラーに電話先の龍騎がそう聞く。

インペラー「名前…？…えーと…なんだっけ？」

座って名前を聞いてない事に気づいたインペラーがそれに困った時に貴音似ぶちどるがぴよこと降りて、紙とペンを取り出すと…

貴音似ぶちどる たかにゃ 『たかにゃ』

インペラー「……字、書けるのね」

龍騎『今回のぶちどるは字を書くの？』

スツと自分の名前を書いた貴音似ぶちどる改めたかにゃにインペラーは思わず呟き、電話越しの龍騎はそう言う。

ちひゃー「くっ！」

インペラー「っ」と

そんなインペラーの頭にちひゃーが乗っかる。

インペラー「ちひゃー悪い、今電話中だ。しばらくたかにはと遊ぶか話でもしといてくれ」

そう言って断った後にたかにゃの前にちひゃーを降ろす。

ちひゃー「くっく」

たかにゃ「……」

早速手を上げて挨拶するちひゃーにたかにゃは無言で手を上げた後…

たかにゃ『同士』

と書いた紙を見せる。

ちひゃー「くっく」

たかにゃ『たかにゃ』

ちひゃー「くっくく」

たかにゃ『無礼』

ちひゃー「くっくくく」

たかにゃ『面妖』

話し掛けるちひゃーにたかにゃは紙に書いて返事する。

ちひゃー「く…」

たかにや『素』

インペラー「あ…まあ…そう言う子って事だ」

それに戸惑うちひゃーにインペラーはそう言う。

ちひゃー「くつくつくつくつくつ」

たかにや「（スパパパパパ）」

千早「まあ…大まかな事情はわかったけど…何してるのかしら…」

貴音から事情を聞いてちひゃーと連続で紙に書きながら筆談しているたかにやを見た千早は呆れた顔をした後に貴音に向き直り…

千早「やっぱり家じゃ無理ね…ちひゃーだけでも手一杯なもの」

インペラー「まあ…そうだろうな」

貴音「そうですか」

千早の断りにインペラーはそう言い、貴音は残念がり…

貴音「仕方ありません。悲しきことですがこれもまた運命…」

千早「いや…あの…もしもし？」

よよよと泣き崩れる貴音に千早はあっけに取られた後…

貴音「では、お腹も空きましたのでこれにて失礼いたします」

千早「え…あ…ええ…」

インペラー「邪魔してすまん」

すぐに立ち直ってスタンバイになったみうらさんを頭に乘せて言う貴音に訳分かんない千早は何しにきたの…と思い、インペラーが謝った後に貴音達は事務所に飛ぶ。

律子「なるほどね。それで？ご飯食べるついでで事務所に連れて来た？」

事務所に着いて律子に事情を話すと律子は腕を組んでそう聞き…

律子「わかってますよね？…インペラーさん？」

インペラー「何で俺!？」

リュウガ「そこは貴音に言うべきじゃないか律子？」

ズズズズと黒いオーラを纏ってインペラーに言う律子にリュウガは呆れてそう言う。

律子「元いた場所に返してきなさい!！」

たかにゃ『シヨック』

律子の言葉にたかにやはガーンとショックを受けると…

たかにや「(ホロホロホロホロホロ) - ()」

ガイ「あゝらら泣かしちゃったよ律子の奴」

ゾルダ「流石にそれはかわいいそうでしょ」

鳥火「拾ったからにはな…」

鮫剣「冷たいわね律子さん」

槌鮫「他の子と鼻肩じゃぞ」

律子「ぬ…ぐ…」

涙を流すたかにやにガイやゾルダ、鳥火や鮫剣、槌鮫がそう言い、律子はそれに呻く。

亜美「はいはい泣かない泣かない」

そんなたかにやを話してる中、犀美とゲームをしていた亜美が抱き上げる。

亜美「ちっこいお姫ちゃんは泣き虫さんだねい」

たかにや「(ずび)」

真美「案外お姫ちゃんも泣き虫さんかも？」

貴音「なっ…！」

犀美「もしかして凶星？」

んっふっふーと笑って言う亜美の腕の中でたかにやは鼻を嚙り、にたーと笑った真美が貴音を見てそう言い、本人はギクリと顔を赤くし、それに犀美が笑って言う。

亜美「んじゃ、この子は亜美たちがあずかるねー」

律子「はいはい、ちゃんと面倒見なさいよー？」

右手を上げてそう言う亜美に律子はそう言う。

真美「さてさて、どうしやししょうかねえ」

亜美「んっふっふー、どうしやししょうねえ」

律子&リュウガ「（不安だ…）」

双海姉妹の背中を見て律子とリュウガはそう思ったのであった。

犀美「いや〜賑やかになるね〜」

王蛇「だな」 宝塚な感じになっている。

その場にいたリュウガを除いたメンバー「ぶっ！？」

リュウガ「お前は何かあった」

それを見送った犀美の後の宝塚な感じになってる王蛇にリュウガを除いたメンバーが吹いてる中、見えない場所でイタズラ四重奏と呼ばれてるこあみとこまみに別の場所に住んでるぶちまと呼ばれる子の2人、ちーかとちみかが笑っていた。

ミラー15・貴音とたかにゃと不憫インペラー（後書き）

士「最後に高天原の所のぷちまの奴等が出たな」

剣崎「だな」

ルイージ「どうなるのやら」

コラボミラー1…876プロとV3とプトティラ(前書き)

カズマ「今回はハルルさんの『どたばた!オーズ兄弟』からV3と
プトティラがライぷちの世界に来ちゃったお話だ!」

タクミ「それで出会うのは…876プロの子達だね」

アスム「どつ言う風になるのやら…」

コラボミラー1…876プロとV3とプティラ

黒美「それで…今日は？」

玲子「そうね…」

876プロで今日も元気にアイドル家業をやっている黒美。

涼や夢子以外に他の876プロの水谷 絵里と日高 愛とも仲良くやっている。

後…

虎子「負けないよサイネリア」

金髪ツインテールとそばかすが特徴の女の子に虎子はそう言う。

サイネリア「こちらこそ、負けないですよ」

牛美「君たち…仕事やりなよ…」

ゲームをしている虎子とサイネリアに牛美はそう言う。

誰もが何時も通りの日常を過ごしていた時…

愛「うえっ!?!」

麗葉「これは!?!」

天井に世界の壁が現れ…

「????」…ぷっきゅっつっつっつー!!?」

美蛇「ん?」

その中から何か落ちて来て美蛇が受け止める。

落ちて来た何かは…

愛「かつ…」

絵里「仮面ライダー?」

仮面ライダー「ぷきゅー…」

プテラノドンを模した顔で胸に上からプテラノドン、トリケラトプス、ティラノサウルスが描かれている仮面ライダー…仮面ライダーオーズ・プトティラコンボが目を回していた。

突然現れたプトティラに愛達が驚いていると…

ガチャ

仮面ライダー「およ?」

涼「ぎゃ おおおん!?!」

扉を開けて来たもう1人の仮面ライダー…仮面ライダーV3に涼は驚いて叫ぶ。

玲子「つまり…プトティラは一人で遊んでいたらいきなりさっきの奴が現れてそれに飲み込まれて此処に…あなたは知り合いの家に入るうとした所、なぜか此処にと?」

V3「そうそう、あつ、これが知り合いに持って行くうと思つた茶菓予」

事情を聞いて言つ玲子にV3はそう言つた後に近くにいた涼に渡す。

涼「何で!?!」

V3「いや、此処俺のいた場所じゃないしどうせなら別のをお土産にしようと思つから少年にプレゼントだ」

驚く涼にV3はそう言い…

V3「…ん?どうした?そんな驚いた顔をして?」

プトティラとお絵かきを見ていた愛にサイネリア、絵里や龍騎から事情を聞いている虎子達は驚いた顔でV3を見る。

サイネリア「今、なんて言い張つたんですか?」

V3「いや、此処俺のいた場所じゃないし」

愛「その後です」

V3「“どつせなら別のをお土産にしようと思っから”」

絵里「さらにその後？」

V3「何で疑問系？…“少年にプレゼントだ”」

虎子&麗葉&愛&夢子「それだあああああ！…！」

プトティラ「きゅ？〇〇」

V3の最後に言った言葉に虎子、麗葉、愛、夢子が指摘し、お絵かきしていたプトティラはその声に顔を上げてきよとんとする。

え〜アイドルマスターを知らない人に言うが秋月 涼は男なのだ。

ホントはイケメンアイドルとしてデビューしようとするアイドルの門を叩いたが思ったのだがひょんな事で女性アイドルとして活動する事になったのだ。

ちなみにイケメンアイドルを目指そうとしてたのは男性から何度も告白されてしまう不遇な自分を変えようと言う目標があった為であった。

黒美「しかし、良く分かったわね」

V3「う〜ん、勘で言ったんだけど？」

サイネリア「勘で言いやがったんですかこのライダーは…！」

涼「……………」

美蛇「声を殺して泣くな」

プトティラ「ぷっ?」

黒美の言葉にV3がそう言ってサイネリアがツッコミ泣く涼にプトティラは首を傾げながら近づき…

プトティラ「どうして泣いてるの?」

涼「ちよつとね…」

プトティラ「それならプトと一緒に絵かきやるっ」

涼「えっ、うん…」

V3「ふっふっふん…」

話し掛けてプトティラに連れて行かれる涼を見てV3は顎を摩る。

愛「どうしたんですかV3さん?」

V3「ああ、少年がシャウタに似てるな」と…」

絵里「シャウタ?」

虎子「誰?」

V3「プト介の家族、少年の雰囲気微妙に似てるなと」

それを見てそう言う夢子の後のサイネリアの言葉を否定したV3の言葉に愛達と絵を描いていた涼は驚きの叫び声をあげる。

プトティラ「プト介じゃないもん！」

玲子「ホントに女の子なの？ちょっとマスク外したら？」

プトティラ「……【おとなのじじょう】で、だめ〜」

黒美「（ああ…マスターと似た感じな訳ね）」

プトティラがそう言った後に疑問を感じる玲子の呟きに、プトティラがそう言い、黒美はそう心の中で呟く。

その後、虎子の案内でV3は色んなケーキやお菓子を大量に買い、プトティラは涼と仲良く話した後に…

V3「何だこれ？」

夢子「プトティラが出て来た時の奴ね」

プトティラ「きゅ！〇〇」

世界の壁を見て呟くV3に夢子がそう言った後にプトティラがキュピンと世界の壁を見る。

涼「どうしたの？」

プトティラ「これのさきからシャウタとパンがみえた！><」

V3「おっ、んじゃあこれを通れば戻れそうだな」

涼の問いに答えたプトティラにV3はそう言った後に買って来た大量のケーキやお菓子を持つ。

涼「元気でねプトティラ」

愛「そっちの家族と仲良くね」

プトティラ「うん！此処にいるみんなもぶいすりゃーせんしえと同じ好き！」

V3「V3なプト介」

プトティラ「プト介じゃないもん！…バイバイ！><」

涼と愛や絵里達にプトティラはそう言った後にV3に訂正の言葉を入れた後にV3と共に世界の壁に入り、元の場所へ帰った。

サイネリア「嵐の様な人達でしたね先輩」

絵里「うん…だけど面白い人達だった？」

虎子「そうだね」

涼「ホントだね」

サイネリアの言葉にそう言った虎子と共に同意した後涼はプトティラと描いた絵を見る。

そこには、プティラやその家族と共に涼達が描かれていた。

コラボミラー1：876プロとV3とプトティラ（後書き）

龍騎「と言う訳でハルルさんの所の『どたばた！オーズ兄弟』のプトティラとV3さんとの交流でした！」

ユウスケ「確かに涼君ってあっちのシャウタに微妙に似てるよな」

シヨウイチ「あっちは男にストーカーされてるが涼の場合は告白されてるしな…」

フォックス&ルイーダ「うんうん」

ミラー16：リュウガと舞と律子とちっちゃん（前書き）

士「今回は原作のを元にしてないオリジナル話でタイトル通りだ」

カズマ「大変だよな…」

アスム「ですね」

タクミ「」どつ言つ話に…」

ミラー16：リュウガと舞と律子とちっちゃん

リュウガ「ふう…」

リュウガは目の前の喧嘩にため息を吐く。

目の前で律子と女性が睨み合っていた。

女性の名は日高 舞、876プロの愛の母親でフリーランスのアイドル、876プロの元マネージャーで現パートナーでありマネージャーである岡本 まなみと共に876プロと765プロの先輩として目標として上にいる。

なぜ、睨み合っているかと言うと…

律子「何度も言いますが舞さん、代理プロデューサーはあげませんよ」

舞「言うわね。けれど負けないわよ」

リュウガ「俺は物じゃないぞ」

ちっちゃん「めっ」

まなみ「すみませんリュウガ代理プロデューサー」

ため息を吐くリュウガを付いて来たちっちゃんが諫め、まなみは謝る。

会話で分かるが2人の睨み合いの理由がリュウガの取り合いである。龍騎により隠れているがリュウガはプロデューサーとしての腕は高いので舞はそれを買い、まなみにアイドルを専念させる為に…と言っ口実でリュウガを狙っている。

もう1つ別に理由があるが…

そのもう1つの理由に気づいている律子も同じ理由で舞と出会うと何時も睨み合うのだ。

今回は仕事が重なったのでこうして睨み合っている。

ちなみに今回の仕事は…

舞「このアイドルクイズスポーツ対決！」

律子「負けませんよ！」

火花を散らす舞と律子にリュウガはやれやれと肩をすくめる。

ちっちゃん「もっ！もっ！」

律子「ええ！頑張るわよ！」

ちっちゃんの応援に律子は力強く答える。

まなみ「色々大変ですねリュウガ代理プロデューサー」

リュウガ「まっただ」

クイズに挑む律子と舞を見て言うまなみの言葉にリュウガはそう答える。

リュウガ「2人共いがみ合いを止めて欲しいもんだ」

まなみ「舞さんと律子ちゃん、リュウガさんが好きですからね」

ふう…と息を吐くリュウガにまなみは困った顔をして言う。

・キイイイイン・

リュウガ「…まなみさん、手鏡を持ってるか？」

ちっちゃん「めっ?」

まなみ「えっ? あっ、はい」

リュウガにしか聞こえて来ない音にリュウガはまなみにそう聞き、ちっちゃんは訝しげにまなみはいきなりの事に慌てながらも答えて手鏡を出す。

まなみ「どうしたんですか?」

リュウガ「俺のもう1つの役目を果たしに…」

手鏡を渡しながら聞くまなみにリュウガはそう言つと座っていた場所に手鏡を置くと…その中に入る。

ちっちゃん「めっ!?!?」

まなみ「あの時の様に消えた!？」

それにちっちゃんは驚き、まなみがそう呟く中、リュウガはライドシューターに乗り込むとミラーワールドへ向かう。

ミラーワールドに付くと目の前のトンボ型のミラーモンスター、レイドラグーンの集団を前にライドシューターから降り、カードをブラックドラグバイザーにベントインする。

Bドラグバイザー「ソードベント」

音声と共に天から来たブラックドラグセイバーを握ると構える。

リュウガ「悪いが、あの2人の邪魔はさせない！」

そう言うと同時にリュウガは駆け出し、レイドラグーンの集団を切り裂く。

レイドラグーンの攻撃や突撃をリュウガは巧みに避けたり、掃いて行き…

リュウガ「これで決める」

そう言う自分のマークが描かれたカードをベントインする。

Bドラグバイザー「ファイナルアタックベント」

音声と共にリュウガのBドラグセイバーに黒い炎が纏い…

リュウガ「はあああああああ！！！」

それにより、残ったレイドラグーンを切り裂き…リュウガの後ろで爆発した。

ファイナルアタックベント、ライダー単体で必殺技を放つ事が出来る神崎が作ったアドベントカードである。

リュウガ「さて、戻るか」

そう言つと手鏡からちっちゃん達の元に戻る。

まなみ「あつ、お帰りなさい」

ちっちゃん「めっ」

リュウガ「ああ…それで今は？」

まなみ「どちらとも互角に行ってます…」

戻つて来たリュウガにまなみとちっちゃんはそう言い、リュウガがそう聞くとまなみはそう言う。

その後、2人の戦いは長引き…

舞「やるわね律子ちゃん」

律子「舞さんこそ」

あまりにも2人の互角さに続きは来週に延びたのであった。

リュウガ「なかなかの白熱としたバトルだったな……」

ちっちゃん「めっ」

まなみ「2人共、よくやりますね……」

ちっちゃんを抱えたリュウガがそう言い、まなみはそう言う。

舞「次も負けないわよ」

律子「こちらですよ」

その言葉の後にそれぞれ分かれたのであった。

龍騎「お帰り、どうだった？」

リュウガ「なかなか凄いバトルだったぞ」

ちっちゃん「めっ」

帰って来たリュウガに龍騎は聞き、リュウガはそう返し、ちっちゃんも同意する様に頷く。

律子「絶対……渡しませんよ」

ゾルダ「律っちゃんこわしい……」

インペラー「マジで律子……リュウガになると別の意味で怖いな……」

亜美「だね」

真美「うん」

たかにや『怖い』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴと椅子に座って静かに言う律子にゾルダと亜美、真美、たかにやは冷や汗を掻き、インペラーはそう言う。

その頃…

舞「ふふふ、絶対に手に入れるわ」

愛「ママ…何か怖いよまなみさん」

まなみ「あはは」

静かに笑みを浮かべる舞に愛が引いていたのであった。

ミラー16：リュウガと舞と律子とちっちゃん（後書き）

ユウスケ「リュウガ：大変だな；」

シヨウイチ「ある意味、敵に回したくないな…」

アスム「ですね」

ワタル「それで次回は原作でのたかにゃの次のお話ですね」

ミラー「17：ぶちとアイドルと水泳大会！（前書き）

士」と言う訳で今の季節と外れた夏の話だ」

ユウスケ「メタ過ぎる！！！」

カズマ「他にも暗黒騎士 Aの子や本人達が登場するよ！！！」

ミラー17：ぶちとアイドルと水泳大会！

律子「第1回！！ドキッ！ぶちだらけの水泳大会かいまーく！！」

亜美&真美「いえーい！い！！」

マイクを持って言う律子に亜美と真美が歓声をあげる。

その場に龍騎たちと765プロのメンバーに876プロのアイドル達もいる。

律子「さあーてはじまりましたぶち水泳大会！司会は私、秋月 律子とー！！」

A「どうも暗黒騎士 Aです！」

ダークキバ「それとダークキバに！」

あずさ「……………」

律子と座って挨拶するAとダークキバの後にあずさが言うのだが本人はニコニコしているだけで

あずさ「三浦あずさ」三浦あずさとでお送りしまあーす！！」

インペラー&タイガ「（のんびりしすぎだよあずさ…）」

小鳥に言われてやっと言おうとして律子を取り繕って言い、それにインペラーとタイガは冷や汗を流す。

律子「さてさて、それでは！選手の入場でーす！！」

A「まずは如月 千早ちゃん&ちひゃーチーム！！髪をポニーテールで纏めたちひゃーはやる気満々です！」

ダークキバ「続いては星井 美希ちゃん&あふうちゃんチームであふうちゃん今は夏だから髪型が変わってますね」

あずさ「3番目に萩原 雪歩ちゃん&ゆきぽちゃんチーム〜ゆきぽちゃんは浮き輪着用で出るのね〜」

律子「4番目に高槻 やよい&やよチーム！元気いっぱいいなチームでどう行くのか見物です！」

A「次は我那覇 響ちゃん&ちびきチーム！こちらも元気いっぱい！で響ちゃんが雪歩ちゃんと睨み合ってる！！」

ダークキバ「そして5番目に876プロから参戦の日高 愛ちゃん&ぶちまのザジュちゃんチーム！どちらともどう行くか楽しみです」

あずさ「次は城戸 龍美ちゃん&パルナちゃんチーム〜このチームもどう行くか楽しみね〜」

律子「7番目は桜井 夢子&あしゅなんチーム！どちらともやる気満々です！」

A「8番目は城戸 黒美ちゃん&あやにゃんチーム！」

ダークキバ「そして最後は天海 春香ちゃん！」

律子「以上のメンバーでお送りします。なお、はるかさんは水N Gなんで春香選手のみ参加となります」

はるかさん「はるかっか！」

春香「りれーしょん!？」

次々と出る出場選手を言うと律子の最後の言葉に春香は驚く。

春香「ちょ、ちょっと待ってくださいよ!私にもチビちゃんくださいよー!」

A「だよなー」

ダークキバ「それならちゃよちゃんが代わりに春香ちゃんのパートナーで」

春香「頑張ろっねちゃよちゃん」

ちゃよ「ふわ〜」

春香の言葉にAは頷き、ダークキバがそう言い、意気込む春香にちゃよも頑張ると言う風に鳴く。

律子「はいそれじゃ第1種目はじめます！」

ダークキバ「最初のは25メートル自由形タイムアタックです。まず最初はちひゃーちゃん！」

ちひゃー「くっ」

律子とダークキバの後に言われたちひゃーは手を上げて返事する。

A「それじゃあよーい…」

ドン！！（ゾルダがマグナバイザーで合図した音）

びょん（ちひゃーがプールに飛び込む音）

スタートの合図と共に勢い良くプールに飛び込むちひゃーだが…

びたん！

ぷかー

勢いが付き過ぎたのか体前面を打ってしまったようだ。

律子「はーい、ちひゃー失格」

龍騎「（ちひゃー、泳ぎ関連ダメなのかな…）」

千早に助けられてるちひゃーを見て龍騎は冷や汗を掻く。

ダークキバ「それじゃあ2番手はゆきぽちゃん」

言われてゆきぽはプールに入る。

A「よーい…」

ドンー！（ゾルダがマグナバイザーで合図した音）

スタートの合図がするがゆきぼは動かない？

それにその場にいる一同が疑問視を浮かべた後に…

ザプツ（ゆきぼがプールの中に潜る音）

王蛇「す潜りか？」

水の中に入ったゆきぼを見て王蛇がそう呟いた後…

ズバオツ（ゴールの後ろからゆきぼ参上）

律子「はいはい、失格」

龍騎&涼&インペラー&タイガ&美蟹「（どうやって掘ったんだ…）」

律子の失格を聞きながら上のメンバーはそう思った。

あずさ「それじゃあ次はあふうちゃん」

美希「そんじゃ、テキトーにがんばってくるの！」

あふう「はい」

呼ばれた後に美希の言葉にあふうは答えた後にプールに入る。

A「よーい…」

A「さらに感化された響ちゃんと雪歩ちゃんが抱き付く!!」

ベルデ「ついでにそれを見て便乗して来ていた舞さんがリュウガに抱き付く!!」

シザース「それにちっちゃんと律子も抱き付き、リュウガを挟んで睨み合い!それを見た涼が震えてる!!」

インペラー「それを安心させる様に愛や夢子が抱き付く!!」

リュウガ「お前ら…実況する暇があるならなんとかしろ」

実況した6人に抱き付かれてるリュウガが静かにツツコミを入れる。

サイネリア「(ホントにリュウガ代理プロデューサーって大変ですね)」

玲子「(と言うか抱き付かれて普通って…ある意味大変ね…)」

それを見たサイネリアと玲子はそれぞれそう呟く。

龍騎「え〜次はやよちゃんです」

リュウガ「進めろと言った訳じゃないんだが…」

律子に代わって進める龍騎にリュウガはそう言う。

そして…ビート版を持ってやよは立つ。

ドン!!(ゾルダがマグナバイザーで合図した音)

「やよ、うっうー」

「ばちやばちやとバタ足で普通に泳ぐやよ」

「やよ、うっうー」

「遅いそのまま普通にゴールした。」

「ダークキバ&龍騎」（遅いけど…さっきまでよりまともだ）」

「それを見てダークキバと龍騎はそう思ったのであった。」

「なお、その後はあしゆなんとあやにゃん以外は普通に終わったのであった。」

「龍美「いや、凄かったですねあしゆなんとあやにゃん」」

「夢子「そうね」」

「黒美「同時ゴールだったわね」」

「小休憩であしゆなんとあやにゃんの事を話題に龍美と夢子、黒美は会話する。」

「実はと言うとあしゆなんの番になった時にあしゆなんがあやにゃんと競いたいと言い、話し合った結果認められ、やったら同時に入り、ゴールも同時だったのだ。」

「龍騎「いや、悪いなダークキバ」」

「ダークキバ」いえ、僕も楽しいですし」

龍騎の言葉にダークキバはそう言う。

今回のを思いついた時に王蛇がどうせならと知り合ったぶちまや家族であるAも誘わないかを提案し、それにメンバーも同意した後に龍騎と王蛇が代表で行き、それを提案したらAは快く受け、他のぶちま達も賛成したので今此処にいる。

参加してないぶちま達もそれぞれ元気に遊んでいて、このちゃとせちゅなはみうらさん（ちなみにワープしない様に会話できる程度に聞こえる耳栓着用）と仲良くして2人共みうらさんのスキンシップを受けていて一緒に見ている。

ちなみにDGも連れられている。

ゆえちとののかはまちーと共に涼と一緒にいて応援している。

ちさーは絵里とサイネリアと共に応援している傍らコスプレについて話している。

ちーかとちみかはこのあみとこまみと共に王蛇の傍で見ている。

律子「さて、小休憩は終え、次の種目は…」

A「スポンジ丸太わり」

あずさ「どう行くか楽しみね」

ダークキバ「では…レディー…GO!!」

3人が言った後にダークキバの合図に動くが…

結果を以下の通り

ちひゃー：勢い良く飛び込んだがまたも体前面を打ち撃沈

あふう：寝ている

ゆきば：白旗振って棄権

やよ：スポンジ丸太をなぜか噛んでいる。

ザジュ：水に入ってゆったりしている

ちやよ：浮いているので棄権

ちびき&あしゆなん&あやにゃん：普通にゴール

インペラー「(色々と結果が…)」

タイガ「(だね…)」

その結果にインペラーとタイガは冷や汗を流す。

その後色々とあったが最後の競技まで来た。

律子「はいはい、最後の種目でーす。最後はぶちを乗せた騎馬戦になりまーす」

律子の言葉にそれぞれ頭にぷち達を乗せてスタンバイする。

A「なお、競技中は歌は秋月 涼ちゃんに歌って貰います」

涼「えっ！？僕聞いてないけど！」

律子「はい」

ドンー！（ゾルダがマグナバイザーで合図した音）

涼「まだ了承してないってかもう始まってる!?!」

王蛇「潔く歌え」

戸惑ってる涼に王蛇はそう言う。

諦めた涼が歌っている間にそれぞれ動く。

ある方では水をかけあったり、ある方では威嚇したり（主にちひや
ーが美希に向かって）などで盛り上がっている時…

はるかさん「かつかあああああ」

龍騎&レオ&犀美&虎子「あっ!!！」

はるかさんがプールに飛び込む光景に全員が驚いた後に…

律子「あー！ー！ー！…やっと終わった…！いつもどおりに」

はるかさん1「かつか！」

はるかさん2「かつか」

はるかさん3「かつか」

はるかさん4「かつか」

はるかさん5「かつか」

はるかさん6「かつか」

はるかさん7「はるかつか」

はるかさん8「はるかつか！」

目の前のプールで増殖しているはるかさん集団を見て律子はそう言う。

その光景にAとダークキバも苦笑している。

あずさ「それでは、優勝はどうしましょうっ……」

律子「あ………」

戻そうとしてみうらさんを抱えてどこかたぶんあずさの言葉に律子はピタッと止まり、リュウガを見る。

リュウガ「そうだな……」

それぞれ審議の結果、優勝はやよとちやよの優勝で優勝商品は食パン1年分を貰うのであった。

「オマケ」終わった後のサイネリアと絵里と玲子

玲子「あら？2人共何見てるの？」

絵里「あつ、玲子さん？」

サイネリア「ちさーのホームページを見てるんですよ。本人はちつと名乗ってるようです」

玲子「へえ…あら、鈴木さんより可愛いわね」

サイネリア「まだ言いますか」

玲子&サイネリア「……………」

絵里「2人共、喧嘩ダメ？」

ミラー「17：ぶちとアイドルと水泳大会！（後書き）」

士「と言う訳であつち側総出演だつたな」

ユウスケ「最後もな…」

カズマ「あはは…」

渡「ですね…」

サイドミラー3：硬くなる戦士の闘志（前書き）

士「今回は一般兵 高天原 Aの『』でふおるまにあ・わーるど】
ぶちま！？ くぶちます的な何か』の『ごじゆろくつ！』でふ
おるまにあ・ばりえーしょん【（6）』を見てから見る事をお勧め
するぞ」

シンジ「ですね

サイドミラー3：硬くなる戦士の闘志

まみ「ねえにいーちゃん、3人共大丈夫かな？」

龍騎「大丈夫だよ、3人は強いんだからな」

それぞれ寝かされた王蛇、ライア、インペラーを見て不安げに聞くまみに龍騎は安心させる様に頭を撫でる。

Aの方で嫌な予感がすると言い、向かったライアと同行した王蛇とインペラーが2、3日は安静にしなければならぬ程のダメージを負い、同じく向かったナイト、タイガ、オーデインも前者の3人より酷くはないがダメージを受け、リュウガやシザース、アビスにより運ばれて来たのに全員が慌てて、寝かせれる場所を作り、寝かせたのだ。

別の場所でナイト、タイガ、オーデインもそれぞれ休息を取っている。

龍騎「ほら皆、此処は俺やこあみ達に任せて仕事に行きなよ」

あみ「でも…」

律子「プロデューサーの言う通りよ、私たちが元気じゃなきゃあ3人共良くならないわ…ね？」

アイドル「…はいうん」

同じく見ていたアイドル達に龍騎はそう言い、あみや数名は渋るが

律子の言葉に折れ、それぞれ出て行く。

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

ちーか「たー？」

ちみか「みー？」

寝ている王蛇をあの場にいたこあみとこまみにお見舞いに来たちーかとちみかが心配げに見る。

他にインペラーを同じ様に来たあしゅなんとあやにゃん、タイガをちひゃーとちびき、ぴよぴよが見ていた。

龍騎「……………くそ」

そんな3人を見ながら龍騎は仮面の中で唇を噛み、ミラーワールドへ向かう。

リュウガ「……………」

そしてリュウガもそれを見た後にあるカードを取り出す。

それは黒炎を背景に遊戯王5D'sに出る竜の尾の痣が描かれており、サバイブ・業火と書かれていた。

ミラーワールドに着いた龍騎はあるカードを取り出す。

それは1体の黄金の龍が描かれていた。

龍騎「またこのカードを使う時が来るな」

そう言うとドラグバイザーが炎に包まれてツバイとなった後に光り輝き、龍の顔が付いた大剣へと変わる。

新たなドラグバイザー、インペリアルドラグバイザーの龍の顔を上へスライドさせた後にそこにさっきのカード、インペリアル・炎神を装填し、龍の顔を戻す。

インペリアルドラグバイザー「インペリアル」

音声とともに龍騎の体はサバイブとなった後にさらなる姿へと変わる。

ライダースーツは白銀へと変わり、両肩が龍の爪を模した装甲へ変わり、足のむこうずね部分も龍の爪を模した装甲に覆われる。

そして仮面の両サイドにナイトサバイブの仮面の両サイドが追加されている。

これぞ、龍騎のサバイブを超える龍帝『仮面ライダー龍騎インペリアル』である。

そんな龍騎Eの前にナイト達が戦った機械の身体をした謎の集団が現れる。

それに龍騎Eはインペリアルドラグバイザーを構えて襲い掛かる集

団を迎え撃つ。

龍騎E「はっ！とりゃー！！」

一撃で仕留めて行き、龍騎Eはカードをインペリアルドラグバイザーの右のカードを入れる部分に装填する。

インペリアルドラグバイザー「トリックベント」

音声と共に龍騎Eは分身し、撃退して行く。

全てのライダーのモンスターと契約しているからこそ龍騎は全てのライダーのアドベントカードを扱えるのだ。

そして敵を1箇所に集めた後にカードを装填する。

インペリアルドラグバイザー「ファイナルアタックベント」

龍騎E「はあああああああー！！」

音声の後にインペリアルドラグバイザーの刃が7色に光り、力を貯め…

龍騎E「おりゃあああああああー！！」

振り下ろすと共に斬撃が龍となり、敵を全て飲み込んだ。

龍騎E「ふう…」

全てが無くなった場所を見て何も無いのを見た後に龍騎Eは元に戻

った後にミラーワールドを出る。

龍騎「おっ?」

戻った所で王蛇達と一緒にぶち達が寝ていた。

それに龍騎は頬を緩ませた後…

龍騎「(だからこそ、守らないとな」

それを見て龍騎はそう硬く闘志を高める。

サイドミラー3：硬くなる戦士の闘志（後書き）

シンジ」と言う訳で城戸さんの強化フォームの登場ですね」

士「ちなみに時期がこれより前の剣崎の物語にも出るぞ」

剣崎「こっちもよろしく！」

スペシャルミラー1：アイドルとぶちとハロウィン（前書き）

士「と言う訳でハロウィンだ」

モモタロス「と言う訳で行くぜ！」

ヒビキ「そつだな」

ユウスケ「それじゃあ」

全員「変身！」

スペシャルミラー1：アイドルとぶちとハロウィン

電王超CF「良いかお前等！俺達はハロウィンでも最初っから最後までクライマックスだぜ！ハロウィンパーティーの始まりだ！」

亜美&真美&愛&春香「いえ〜い！！！」

あしゆなん「なのね！」

はるかさん「かつか！！！」

広い会場で電王超CFの開始の言葉に亜美、真美、愛、春香にあしゆなんとはるかさんが歓声をあげる。

アイドル達やぶちどるの他、龍騎の仲間のライダーが集まっていた。

龍騎「集まってくれてありがとうな」

ファイズBF「まあな」

ブレイドKF「提案した者として来なきゃな」

お礼を言う龍騎に巧の変身したファイズBFと剣崎の変身したブレイドKFがそう言う。

ディケイド「しかし、俺たちでお菓子配りか…」

クウガLUF「土、呟く暇があるなら早く配ってやりなよ、待ってる子がいるぞ」

ののか「ぷあ〜」

ゆえち「です…」

デイケイド「分かってる」

たかにや『感謝』

ちびき「だぞ」

やよ「うっうー」

お菓子を持つて呟く土が変身したデイケイドにユウスケが変身したクウガ・ライジングアルティメットがたかにやとちびき、やよにお菓子を配りながらゆえちとののかを見て言う。

クウガ「よつと」

まっきー「キー」

アギトSF「はいつと」

ゆきぽ「ぷわ〜」

ちひゃー「くうっううううう」

ザジュ「タイコでサイコロトントントン」

ちゃよ「ぷわ〜」ちーん「」

みしゃ「よねー!」

くぎみー「くぎゅー!」

みちゃ「うっー!」

小鳥「可愛いわね」

貴音「同意です」

玲子「あなた達、鼻血流れてるわよ」

アギト「ティツシュ詰める」

ステージでジャグリングする五代が変身したクウガと津上が変身するアギトSFにリボンで演技するまっきーやクウガとアギトSFの前でチアリーディングするぷちトリオにラツパを吹くゆきぽと太鼓を叩くザジュとトライアングルを叩くちゃよと共に歌っているちひやーを見て鼻血を流す小鳥と貴音に玲子とシヨウイチが変身したアギトが指摘する。

A「いや、また呼ばせてくださりありがとうございます!」

龍騎「いえいえ」

龍騎CV「それにしても凄いですね…ぷちまはどれ位いるんだろう?」

お礼を言うAに龍騎は手を振り、シンジが変身した龍騎CVがぷち

まを見てそう感想を述べる。

せちゆな「めん」

このちや「や」

みづらさん「あら」

あずさ「あらあら」

D G「（うにゆうにゆ）」

ブレイド「シユール」

アームド響鬼「いや、面白い子達がいるな」

響鬼「ヒビキさん……」

響「自分呼んだか？」

夢子「違うでしょ」

みづらさんとじゃれてるせちゆなとこのちやを見てそう言うヒビキが変身したアームド響鬼にアスムが変身した響鬼は冷や汗を掻き、同じ読みである響がひよっこり現れて夢子にツッコミを入れられる。

キバEF「何か奇妙な縁だね」

ダークキバ「そうだね」

キバ「ホントに世界は広いですね」

片隅で渡が変身したキバEFとAさんの方の渡が変身したダークキバが話し合っていて、ワタルが変身したキバはしみじみと言う。

フィリップ
WCJX「色々とぶちは興味深いね」

WCJX（翔太郎）「お前な…」

涼「（変わってるな…）」

パルナ「ンフフ」

ちひゃー「ぴょん！」

ちひゃーやパルナを見てそう言うWCJXに変身してるフィリップに翔太郎は呆れ、それを見た涼はそう呟く。

ファイズ「それにしても…僕貰っても良いのかな？」

ブレイド「まあ、学生だしね」

タクミが変身したファイズが貰ったお菓子を見て言い、カズマが変身したブレイドがそう言う。

律子「多いわね…」

真「ホントだね。あっちのぶち達は新しい子もいるよね」

雪歩「ホントに多いよね」

ライダーやぶちま達を見て眩く律子に真と雪歩はそう言っ。

美希「もう楽しいね」

あふう「なの」

こあみ「とか」

こまみ「ち」

ちーか「た」

ちみか「み」

王蛇「そうか…貰えて良かったな」

インペラー「結局…結局プロレス技をかけられた…orz」

やよい「どんまいねす」

同じく片隅で悪戯カルテットと王蛇は話していて、隣でこのちゃとせちゆな、あしゆなんにプロレス技をかけられたインペラーが転がっていた。

その後、楽しく終わったのであった。

スペシャルミラー1：アイドルとぶちとハロウィーン（後書き）

ディケイド「やれやれ」

クウガLUF「喜んで貰えて良かったな」

良太郎「本当ですね」

アームド響鬼「と言うか俺たち、初めての出演だよな」

ワタル「次回を待っててください」

ミラー 18 : 雪歩と真とまこちーとゆきばとラジオ (前書き)

士「今回はラジオだ」

剣崎「雪歩ちゃん大丈夫かな」

シンジ「ですね」

巧「PVは3万突破だな」

アスム「これからもお願いしますm ((m

ミラー18・雪歩と真とまこちーとゆきぽとラジオ

雪歩「萩原雪歩のミッドナイトラジオダッグホール」

龍騎の決意から3日後、雪歩は椅子に座って言う。

雪歩「こ…こんばんは、萩原 雪歩で……」

まこちー「へへっ」

笑顔で自分の名前を言、ですと言いかけてる隣でまこちーがいて…

問

ふらっ…（雪歩がふらりと倒れかける所）

まこちー「まきよっ（〇口〇・）」

倒れかける雪歩にまこちーは驚く。

真「大丈夫？雪歩…？」

雪歩「あ…真ちゃん…なんとか…」

安否を聞く真に頭に濡れタオルを置き、目を覚ました雪歩がそう言う。

まこちー「ヤーーー」

雪歩「いきなりだったからビックリしちゃって…」

真「そつか…心配したよー」

ブース外でガラスにパコパコしているまこちーを見て雪歩はそう言い、同じく見た真がそう言う。

雪歩「（えへへ…）ごめんね…もう大丈夫だから…」

ゆきぽ「？」

真の言葉に内心嬉しくなった後にそう言う雪歩の隣に何時の間にかゆきぽがいて…

雪歩「にゃああああああああああ」

ゆきぽ「！」

ズドドド（雪歩がスコップで壁を掘りまくる音）

ババババ（釣られてゆきぽがスコップで穴を掘る音）

真「雪歩ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

またも驚いて今度はスコップで掘りまくる1人と1匹に真は叫ぶ。

リュウガ「まったく、苦手とはいえ雪歩、事務所以外でホントに極カスコップ使用を抑えてくれ、ゆきぼもな」

雪歩「ごめんなさい代理プロデューサー、律子さん、とりみだしました…(ぺこ)」

ゆきぼ「(ぺこ)」

プロデューサー代理であるリュウガと付添い人である律子に落ち着いた雪歩とゆきぼは頭を下げる。

律子「それじゃ、収録再会するからね!」

まこち「ヤー」

雪歩「はい…」

腕を振るゆきぼを掴んで律子とリュウガは顔を押し付けてるまこちのいるブース外に行く。

雪歩「え…と、では次のおたよりの…」

ゆきぼ&まこち「(じい~~~~~)」

ラジオを再会する雪歩をゆきぼとまこちは見ている…

まこち「ヤーヤー」

ゆきぼ「(スッ)」

雪歩「」

ブースに入りたいのかまこちーがゆきぽにガラスを壊すのを頼み、ゆきぽはスコップを出したので雪歩は驚く。

結局リュウガの判断によりまこちーとゆきぽはブースに入りました。

ゆきぽ「？」

雪歩「えー…っ…次はゲストの方をお呼びします…」

マイクに興味を持っているゆきぽの隣で雪歩は気を取り直して進める。

雪歩「アイドルの菊池 真ちゃんですー」

真「キャッピピピー？菊池 真ちゃんですー」

雪歩の紹介と共にウィンクしててへっとする真だったが…

ゆきぽ「？」

ちよつと静かになり…

雪歩「じゃあ今日はよろしくね、真ちゃん」

真「（流されたー！ー！？）」

ゆきぽ「????？」

リュウガ「（されても仕方ないぞ真）」

軽く流れた事に驚く真にブース外のリュウガは真の心境を読み取って呟く。

雪歩「げ、元気出して真ちゃん、ファンレターいっぱい届いているから……」

真「……うん」

ズーンと落ち込んでいる真に雪歩は励ました後に一枚のファンレターを取る。

雪歩「読むねー…東京都にお住まいのえー…と…ラジオネームたかさんから…敗訴…アレ？」

真「何が!？」

雪歩の読んだ内容に真がツツコミを入れ…

たかにや『勝訴』

真「おまえか!？」

しじょーんと誇らしげに紙を出してるたかにやに真はツツコミを入れる。

雪歩「次のを読むね…ラジオネームはいさいさんから…はいさい! 真! 元気出せよ! ……」

真「（響だな）」

ゴゴゴゴゴゴゴとハガキを見る雪歩に真は送り主が誰なのか分かった。

数分後

雪歩「いろいろありましたけど次のコーナーです」

ふち達がお絵かきしているのを見ながら雪歩は次のコーナーに行く。

雪歩「雪歩の穴掘り質問コーナー」

真「…凄いタイトルだね」

雪歩の言った事に真はそう述べる。

雪歩「このコーナーはね、リスナーさんから届いた質問に私が答えるんだけど…答えられなかったら穴掘って埋まるという…」

真「え……?」

説明した後にフフフ…とスコップを持って黒い笑顔で言う雪歩に真はあっけに取られる。

雪歩「では最初の質問です。ラジオネームうさぎさんからの質問」

黒い笑顔を消して雪歩は最初の質問ハガキを見る。

雪歩「『私は1度無人島に行ったことがあります。無人島に1つだけ何かを持っていけるなら何を持っていきますか?』」

リュウガ「（伊織だな…確実に）」

アレ?どこかで…?と疑問を感じる雪歩が読んだラジオネームと内容にリュウガは出した人物を当ててる。

雪歩「うーん…1つだけかーそうだねー…」

質問の答えに考える雪歩にゆきぽは気づき…

ゆきぽ「?」

雪歩「ありがと…いや…まだ大丈夫だから…」

スコップを用意するゆきぽに雪歩は礼を言った後にそう言う。

質問を終えた後にちよつとしたフリートークに入った。

雪歩「でもおいしいよねスペパプ」

真「何ソレ?」

まこちー「まきよ?」

2人が会話している間じつとしていたまこちーはマイクに気づくと立ち上がって近寄り…

まこちー「ヤー ヤー まきよー まきよー」

腕をぴこぴこピコピコさせて歌いだす。

まこちー「ヤー ヤー」

律子「……イインですか？アレ…本番中…」

ディレクター「イインじゃね？カワイイし」

リュウガ「（やれやれ）」

歌うまこちーに律子は聞き、そう返され、リュウガは苦笑する。

そしてラジオは終了した。

雪歩「おつかれさまですー」

真「先に帰るねー」

挨拶した後に真は頭に歌って満足げなまこちーを乗せ、腕にたか
やを持って先に出る。

律子「ヤレヤレ…なんとか無事に終わったわねー」

リュウガ「そうだな」

雪歩「ごめんなさい…／＼／」

肩を揉む律子とリュウガに雪歩は顔を赤くして謝る。

律子「まあ、途中ゴタゴタしたところは編集でカットするでしょ」

雪歩「あつ、そっか」

リュウガ「いや、それは無理だ律子」

律子&雪歩「えっ？」

律子の言葉に納得しかけた雪歩の隣で言ったりリュウガの言葉に2人はあっけに取られた後…

ディレクター「これ生放送だぞ」

律子&雪歩「(えーーーーー!?)」

リュウガ「すまん言い忘れていた」

ゆきぽを撫でるディレクターの発言に驚く2人にリュウガは謝る。

ラジオをやっている時間帯

伊織「あら?そろそろ雪歩のラジオの時間ね」

本を読んで伊織は時計を見て気づく。

伊織「イヤがらせにハガキを送ってみたけど読まれたかしらね?」

いお「もっ」

にひひっと笑って伊織は雪歩が出るラジオに合わせる。

雪歩『うーん…1つだけかー』

伊織「にひひっ、困ってる困ってる」

ラジオから流れる雪歩の声に伊織は笑った後…

まこちー『ヤー ヤー ヤー』

伊織「え？」

いきなりのまこちーの歌声にデチョツと伊織は驚く。

後日の雪歩のラジオ

雪歩「萩原 雪歩のミッドナイトラジオダッグホールー、前回は大変お聴き苦しい放送をすいません…今回から心機一転がんばっていきます…」

タイトルコールをした雪歩は謝った後にそう言う。

たかにゃ「ゆき」

雪歩「え…と、今回から新コーナーがはじまります」

カンペを出してみせるたかにゃに雪歩は何でいるの!?!と驚きながら書かれた事を読む。

雪歩「題してー…まこちーのなんでもそうだしっ…」

まこちー「ヤー！」

どうやら前回のので気に入られたのかまこちーはレギュラーに入ったのであった。

ミラー18・雪歩と真とまこちーとゆきぽとラジオ（後書き）

良太郎「ラジオの話だったね」

モモタロス「ってか、どうやって話すんだ？」

ウラタロス「やっぱり雪歩ちゃんが通訳するんじゃない？」

キンタロス「今回はちよつとした騒動が起きるよつやで」

キバット「次回を待ってるよ！」

ミラー19：いおとGとビーム乱舞（前書き）

士「原作を読んでも人なら分かるいおのご乱心だ」

カズマ「大変だよな……」

アスム「始まります」

ミラー19：いおとGとビーム乱舞

律子と龍騎は目の前の状況に呆然としていた。

打ち合わせから戻って事務所の中に入ったら…

はるかさん「かつかー」

事務所の中が崩壊していた。

律子「なんじゃこりゃあああ!!!」

さて、律子がパニックになる出来事の始まりは3時間前に遡る。

伊織「おっはよーう」

いお「もっ」

タイガ「おはよう伊織にいお」

挨拶した伊織といおにタイガは返す。

伊織「あれ？律子とプロデューサーは？」

千早「打ち合わせに行ったわよ」

いお「もっ」

周りを見た後にいた千早に聞く伊織の後ろでいおはある生き物を見

いお「キー！キー！」

伊織「は！？ゴキブリ！？」

怒鳴る伊織にいおは涙目で弁解する。

伊織「そりゃ、こんだけオンボロ事務所ならゴキブリくらいいるわよっ！！！」

カサカサ

いお「(ぞわっ)」

左手を腰に当て、そう言う伊織の後ろにまたもGが現れ…

カッ

伊織「ってあぶなっ！」

ズドン

またもいおはビームを発射し、伊織は慌てて避ける。

いお「ゼー…、ゼー…」

今度は命中して蒸発したGを前にいおは息を整える。

真美「うあうあ〜かべポロポロだよー…」

ああああとまたも開いた穴を見て愕然としている伊織を見て来た
真美はそう呟く。

真美「いおっちはめっちゃゴキブリ嫌いなのか？」

いお「もっ！もっ！」

真美の問いにいおはぶんぶんと音が聞こえる程勢い良く頷く。

真美「あそこにゴキブリ！」

カッ

インペラー「ぽっ！！！」

タイガ「インペラーあああああ！！！！！」

真美が指した方向にいおはビームを発射してその方向にいたインペ
ラーに命中してタイガは叫ぶ。

タイガ「しっかりしろインペラー！！？」

真美「なんかごめんねインにい」

しゅうううううと音が聞こえる程焼けたインペラーをタイガは揺さ
ぶり、真美が謝ってるのを尻目にいおは落ち着く為に伊織のバック
から共有してるうさちゃんを取り出そうとゴソゴソしていると…

その顔にGが乗っていた。

ぶんっ（いおがうさちゃんを投げる音）

びたん！（投げられたうさちゃんが千早に命中）

ガン！（当たった千早が後ずさった際にその後ろにいた美蟹のオデコに千早の後頭部が当たる音）

ブーン（Gが飛び去る音）

美蟹「うのおおおおお……」

千早「……私たちに恨みでも？」

オデコを押さえる美蟹とズズズズのオーラを背に聞く千早にいおは今度は首を横に振る

千早「……まあいいわ、次から気をつけるのよ」

いお「もっ！もっ！」

美蟹「うう……千早はんって後頭部硬いな……」

そう言つて背を向けてスターンスターンと去る千早とオデコを押さえて去る美蟹にいおはコクコクと首を縦に振る。

カサカサ

いお「（ガッ）」

あの足音にいおはその方向に向くと

Gが集まってバカと表現していた。

いお「(ぶちっ) #」

その瞬間、いおは切れた。

この先少しいおのビーム音と壁に命中する音だけになります。

カッ

ドンッ

ぶぐん

ドカッ

ズドッ

怒ったいおはどんどんビームを発射してGを殲滅しようとする。

インペラー「はー…ヤバか…(カッ)ったー!!」

タイガ「インペラーあああああ!!」

犀美「おゝまただね」

そしてまたもインペラーに命中する。

王蛇「ガードベント」

ガイ「ウヴオアー」

このちゃ「や〜」

ののか「ですう〜」

ナイト「真面目に働け」

ベルデ「アー」

龍美「お願いします」

レオ「ごめんなさいでござる」

アビス「何で俺までええええええ!!」

シザース「うん、薄々予想してた」

そして飛んで来たのを王蛇はぶちどるや遊びに来ていたこのちゃと
ののかにDGを守る為、ナイトは御仕置き、龍美とレオは自分と他
の人を守る為に盾にする。

その光景を見た伊織は…

伊織「あーもーぜったいに律子に怒られるわー（デチョーーン）」
考えるのを止めた。

1分後

響「やつよいー！ご飯食べに行こーって何さー!？」

元気良く行って入って来た響は目の前の色々と崩壊した事務所の状況に叫ぶ。

伊織「あははははははは」

響「伊織！軽くダメっばいー!？」

考えるのを止めてから笑いしている伊織に響は驚く。

伊織「べ…べつにアンタのためにやったんじゃ…」

響「伊織！今そういう場面じゃないから!！」

ツンデレを見せる伊織に響はゆさゆさと揺すりながら言う。

その後、響ははるかさんを増やし、いおを押さえた。

はるかさん1「かつか」

はるかさん2「かつか」

はるかさん3「かつか」

はるかさん4「はるかつか」

はるかさん5「ヴぁー」

いお「キー！キー！」

響「ふう…なんとか収まったぞ」

このちゃ「や〜」

ののか「ですう〜」

D G「(うたゆつたゆつ)」

はるかさん達に抑えられてじたばたしてるいおを見て息を吐く響をこのちゃとのか、D Gが諫める。

ぶ〜〜〜〜ん

すると潜めていたGがいおのおデコに下りる。

一同「(。o。o。o)」

一瞬の静寂の後…

いお「びゃー……」

Gが離れた後に泣き出すいおに響は慌てて駆け寄る。

話戻って現在

龍騎「そうだったのか…」

リュウガ「バルサンを使って置くか…」

律子「しかしまあ……見事にぶち壊したわねえ……」

タイガから事情を聞いた龍騎は納得し、途中で来たリュウガがそう
呟き、律子は周りを見て言う。

律子「ねえ」

いお「(ビクッ)」

このちゃ「や〜」

ののか「ですう〜」

D G「(うにゅうにゅ)」

律子に話しかけられ、正座していたいおは涙目で振るえ、怒られる
と思ったのかこのちゃとのか、D Gが慌てて弁解の言葉を言う。

それを見て律子はふう……と息を吐いた後にいおを抱き抱える。

律子「ま、ケガなくて何よりだわ……」

いお「ぐず……」

ビームで撃たれたメンバー「俺たちはダメージ受けたんですけど……」

響「で……でもどうすんだ？事務所はこんなボロボロで……」

よしよしといおの頭を撫でる律子に響は慌ててそう聞く。

律子「あー大丈夫、ぶっちゃけ765プロ、最近稼いでいるし？リフォームついでに」

響「あ、そなんだ」

龍騎「それに俺の知り合いなら酒を奢ればただでしてくれるし」

響「そんな所あるのか!？」

律子の言葉に響は納得して龍騎の言葉に驚く。

伊織「あー………一時はどうなるかと……」

響「あはは、怒られずにすんだしな」

龍騎が連絡してる間に正気に戻った伊織は脱力し、響は笑って言う。

伊織「…てか、アンタたしか動物好きだったわよね？」

響「うんっ!」

ふといきなりの伊織の問いに響は頷く。

少し間を置き……

伊織「じゃあゴキ「動物が好きなのとゴキブリが平気なのは違つと思えます（キッパリ）」」

言おうとした伊織の言葉を遮って響は冷やかにキッパリ言う。

その後、いおは罰としてお掃除するのであった。

くオマケくその後の伊織

伊織「はくくホントに大変だったわ」

やよい「伊織ちゃん」

伊織「なあにやよ…い」(袋に詰められる)

王蛇「んじゃあ行くか、『高槻ゴールド伝説シリーズ 生きた河童を捕獲に逝く』へ」

双海姉妹「おー！」

こあみ「とかー！」

こまみ「ちー！」

やよい&やよ「うっうー！」

伊織「んーーーーー！！！」

やよい「逃がしませんよ伊織ちゃん？」

このオマケの続きはAさんの【でぶおるまにあ・わーるど】。ぶちま!? くぶちます的な何かくを見てね。

ミラー19：いおとGとビーム乱舞（後書き）

士「そして舞台はAの所に」

シンジ「（ホント伊織ちゃん、大変だな…；）」

ワタル「陳情ですね」

ソウジ「そうだな」

シヨウイチ「やれやれ…」

ミラー20：小鳥とアイドルと温泉旅行（前書き）

士「今回は温泉だな」

カズマ「そうですね」

シヨウイチ「しかも他にも追加されてるんだよな」

ミラー20：小鳥とアイドルと温泉旅行

律子「ええっ!？」

伊織「2泊3日の温泉旅行!？」

龍騎「どうしたんですか？」

ぶちまでの黄金伝説を終えた翌日、小鳥から発せられた事に律子と伊織は驚き、龍騎が聞く。

小鳥「商店街のくじ引きで4人分当たって、さっきAさんの所のこのちゃちゃん達からさらに3人分貰ったんだけど誘う人いなくて…誰か一緒に…」

伊織「温泉ねえ…」

苦笑して言う小鳥に伊織は呟いた後に困り顔になる。

伊織「そう言われても私は仕事で忙しいし…」

龍騎「ほかに3日は仕事がない人といえば…」

両手を腰に当てる伊織の隣で龍騎が顎に手を当てて考えると…

亜美「はい!」

真美「真美達は今の所ないよ」

やよい「私もれすう」

雪歩「私も」

真「僕も」

響「自分もだぞ！」

小鳥「（何か真ちゃんを除いてイヤな予感が…）」

リュウガ「（ふむ…）」

名乗り上げたメンバーに小鳥は真を除いてそう思い、リュウガは顎に手を当てた後に何か考え、龍騎に近づく。

リュウガ「龍騎、頼みたい事がある」

龍騎「？」

そんな訳で翌日、小鳥達は旅館に到着したのであった。

双海姉妹&やよい&響&真&雪歩「おーー」

目の前の旅館の大きさに上のメンバーが感嘆の声を上げる。

小鳥「お世話になりますー」

女将「はい」

小鳥を除いた一同「よろしくおねがいしまーす」

女将「はいはい」

小鳥の後に真達が行った後に…

まこちー「やー」

ちびき「だぞ」

ゆきば「(へ)(り)(り)」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

やよ「うっうー」

たかにゃ『一宿一食』

ちーか「たー」

ちみか「みー」

かえつぱ「いじやる」

小鳥「なんでいるの!?!しかもちーかちゃん達まで!?!」

その後に挨拶したぶち達に驚く。

亜美「せつかくなんで連れてきたよーん！（びっしっ！）」

小鳥「……亜美ちゃん」

たはーと笑って敬礼する亜美に小鳥はため息を付く。

小鳥「連れてきたのはいいけど……まこちーやちびきにゆきぽ以外は鞆の中とかじゃ狭くてかわいそうじゃない」

こまみ「ねーちゃ」

亜美「えーーー亜美たちそんなことしないもん」

こまみにせがまれて抱っこする小鳥の言葉に亜美は反論した後に行った場所を言う。

移動中のこあみ達のいた場所…バスの上

亜美「…な感じ」

小鳥「もっとかわいそうでしょ!?!」

亜美の言った事に小鳥が叫ぶと…

????「すまないが、そこを退いてくれないか」

その言葉に亜美達が振り返ると、黒いスタジャンを纏った黒髪の真司に良く似た男性がいた。

亜美達はそれに横に引くと男性は女将の前に行く。

男性 真一「電話で取材の依頼をしたOREジャーナルの辰戸たつと真しん
一いちだが…」

女将「あつ、伺っております。お待ちしておりました」

真一の言葉に女将はそう言っって頭を下げる。

亜美「（変わった苗字だね真美）」

真美「（そうだね亜美）」

真一「良く言われる、変わった苗字だと」

小声で話す双海姉妹に真一はそう言つと2人はびくつと震えた後に驚いた顔で真一を見る。

亜美「聞こえてたの？」

真一「ああ、色々と小声話が耳に入っちゃうもんだ」

亜美の言葉に真一は肩を竦める。

真「雪歩、大丈夫だからね」

雪歩「うっ、うん…」

響「むー…」

そんな真一に怯える雪歩を真は宥め、響は顔を顰める。

そんなアイドル達とは別にぷち達は真一を気になるのか首を傾げていた。

その後、それぞれ部屋に案内された。

双海姉妹「おー！」

部屋を見て双海姉妹は感嘆の声をあげる。

亜美「お部屋めっちゃ広ーい!!！」

真美「外も山いっぱいめでちゃキレイだよ!!！」

部屋の中に入ってその広さや見える景色に興奮してはしゃぐ。

小鳥「亜美ちゃん真美ちゃん、少し落ち着いてね…！」

亜美「らぢゃ!」(ビッ)()

頭にこまみを乗せ、こあみを抱き抱えて注意する小鳥に亜美は敬礼した後…

亜美「じゃあじゃあ枕投げだー!!！」

真美「やるやるー」

小鳥「(ああもう、この子たちは…)()」

枕投げをやるうとする2人に小鳥は不安になるのであった。

別の部屋で…

真「ねえ、何で僕達だけ分かれるの？」

雪歩「そこは気にしない方がよいよ」

響「そうだぞ！」

雪歩と響に両側を抱き付かれてる眩く真に雪歩と響はそう言っ。

さらに別の部屋で…

真「ふう…今の所大丈夫だな」

カメラを弄りながら真一は眩く。

・キイイイイン・

ふと、真一の耳に音が入り、それに真一は驚かずに窓を見る。

そこにはミラーワールドから銀色の龍が真一を見ていた。

そしてガラスから顔を出すその龍の頭を真一は撫でる。

真一「安心しろ、お前の活躍は来る。だから待て俺の新たな相棒、

『剣双龍ドラグカリバー』」

そう言っくとドラグカリバーは吼えた後に再びミラーワールドへ戻る。

亜美「ひゃっはー」

そんなのとは関係ない亜美達はと言うと旅館のゲームコーナーへ来ていた。

亜美「なーんか古いゲームいっぱいだねー」

真美「でもでも二トロ（正確に言うならレトロ）な感じしていいじゃないん」

置かれてるアーケードゲームを見てそう感想を述べる亜美に真美は笑って言う。

亜美「あっ！クレーンゲームみっけ！」

真美「おっ！？いいじゃんいいじゃん！」

他のを見ていて気づいた亜美に真美も見ると…

たかにゃ『助けて』

ちみか「みー！みー！」

こまみ「ちー！ちー！」

そこに景品を取る場所から入ったのは良いがこまみが引っかかって出られなくなってるたかにゃとちみかがいた。

その後3人は従業員さんにより出された後に小鳥さんに説教されま
した。

数分後

やよい「音無さん!!このおフロすーっごい広いですよ!!どー
んです!」

小鳥「え?本当?(どーん?)」

頭にタオルを乗せて入った感想を言うやよいに小鳥はそう言う。

小鳥「最近ずっと忙しかったし大きなおフロでのんびりするのもし
いわねえー亜美ちゃん、真美ちゃん、一緒に入りましょー」

ご機嫌でお風呂セットを持って小鳥は亜美と真美を誘う。

双海姉妹「亜美(真美)たちもうやよいっちと入ってきちゃったよ
?」

小鳥「(ガーン)」

かえつぱ「ごじやる(ポンポン)」

2人の言葉にショックを受ける小鳥をかえつぱは慰める。

その後、小鳥はぶち達と入ることにした

やよ「すーっ」

こあみ「とかー」

こまみ「ちー」

まこちー「やー」

ゆきば「…」

ちびき「だぞ」

ちーか「たー」

ちみか「みー」

かえつぱ「ごじやる」

たかにや『入浴』

小鳥「（だんだん私、保母さんになって来た気が…）」

ぷち達を連れてる中、小鳥はそう心の中で言った後…

真一「ん？これから風呂か？」

そこに真一が通りかかり、小鳥に聞く。

小鳥「はい、真一さんは？」

真一「俺はさつき調理場や様々な場所の写真に取材を終えた所だ」

小鳥「そうなんですか、仕事熱心ですね」

真一の言葉に小鳥はそう言つとそれでは…とぶち達とお風呂へ向かう。

それに真一は大家族のお母さんみたいだなと思つた後に部屋に戻る
と…

ドラグカリバー『ぐるるるる』

真一「…侵入者が…分かつた」

唸るドラグカリバーに真一はそう言つとカードデッキを取り出し、窓へ突き出すと腰にVバックルが装着される。

そして、右手にカードデッキを持ち、真司とは反対の変身ポーズを取る。

真一「変身！」

そう言つと同時に右手でVバックルにカードデッキを収めると真一に複数の鏡像が重なっていき、仮面ライダーリュウガに変身した。

そう、真一はリュウガが変身を解いた姿だつたのだ。

リュウガも龍騎がライダーベントのカードで呼び出したライダーだが、彼だけは元々はミラーワールドに生きるライダーであった。

現実では普通では活動出来なかつたがライダーベントで呼び出された事で普通に行ける様になつたのだ。

リュウガは腕を軽く振った後にミラーワールドへ飛び込んだ。

着いた後にリュウガは眉を潜める。

リュウガ「こいつ等は…ナイト達や龍騎が戦った謎の集団か…」

目の前の集団を見てリュウガはカードデッキからサバイブ・業火のカードを取り出すとBドラグバイザーは黒い炎に包まれた後にゴセイジャーのゴセイレッドが使うスカイツクソードのゴセイダイナミックカードを置く場所をドラグブラツカーの顔へと変えた感じの『Bドラグバイザー・ツバイソード』へと変わると龍の口部分を開くとそこにサバイブ・業火のカードをセットする。

BドラグバイザーTS「サバイブ」

音声の後にリュウガの姿は龍騎サバイブの肩を剣の様なアーマーに変え、色が銀色に変わった『仮面ライダーリュウガサバイブ』へと強化変身した。

強化変身が完了した後に龍の顔を前へスライドさせた後に現れた挿入口にアドベントカードを装填した後に戻す。

BドラグバイザーTS「アドベント」

ドラグカリバー「ぎやおおおおおおおお!!」

音声の後にドラグカリバーが現れ、少し大きくなり、足が出た『ドラグエクスカリバー』に変化するとリュウガSVの隣に立つ。

そしてお互いに集団を蹴散らして行く。

リュウガSVは剣を振るって切り裂き、ドラグエクスカリバーは尻尾や腕を振るい薙ぎ払って行く。

そしてリュウガSVは必殺技のカードを装填する。

BドラグバイザーTS「ファイナルベント」

音声の後にリュウガSVはドラグエクスカリバーの前に飛び上がり、すかさずドラグエクスカリバーは光の光弾を放つとリュウガSVはそれにキック体制で包まれて勢い良く直進する。

リュウガSV「はあああああ！！」

必殺技『ドラゴンエクスキック』が集団を貫くと爆発する。

それを見届けた後にリュウガは元に戻り、部屋に戻った。

時間が経って夕食

やよい「おおおおおおお」

でーんと置かれた豪華な料理にやよいは目を輝かせ、やよと共に涎が出ていた。

小鳥「あら？真一さんも一緒ですか？」

真一「1人だから一緒にされた様だ」

隣にいる真一に小鳥は聞き、真一はそう言う。

やよい「ほ、ほんとに食べちゃっていいんですか!?!」

女将「はい、どうぞー」

確認を取るやよいに女将は笑顔で言う。

やよい「いったただきまあーす!?!」

元気良く言って箸で刺身を取ろうとした瞬間…

バツ

やよいが取る前に素早く取った者がいた。

たかにや「(もむもむ)」

たかにやである。

女将「心配しなくてもたくさんあるから……いっぱい食べてね」

やよい「はいっ!」

フォークとナイフを持って本気モードになるやよいに女将はそう言う。つてやよいは元気良く返事した後に刺身を食べる。

やよい「おいしいねすうすうすう」

たかにゃ」「(じー)」「

顔を笑顔ではああああと輝かせてやよいは歓喜する。

やよい「妹や弟たちに食べさせてあげたいですっ!!」

小鳥「じゃあおみやげに買って帰りましょう?」

やよい「はいっ!!」

響「(ああ…確かにやよいの兄弟はこう言つの食べた事ないだろうな…)」

やよいの言葉に小鳥は笑顔でそう言い、やよいが元気良く返事する所を見て響は思い出して呟く。

ちなみに…

板長「(妹や弟たちに食わしてやりてえ…!)」

調理場でやよいの言葉に板長が感涙していた。

その後、色々と過ごして就寝タイム

亜美「いよーし真美、枕投げやろっじえー!!」

真美「おっけーい!受けてたっかんね!!」

やよい&やま(ぐー)「

未だ元気いっぱいの双海姉妹は枕を構えてお互いに投げた。

その間にたかにやが割り込んで2つ共キャッチした後：

たかにや「ぴー」静かに！！！！」#」

双海姉妹「ごみんなさい…」

ぶんすか怒るたかにやに2人は謝った。

こあみ「とかー」

こまみ「ちー？」

ちーか「たー？」

ちみか「みー？」

それに即発されたのかぶち達も枕投げをやるようだ。

こあみ「とー！ー！かつ！」

よろけながらこあみは枕を持って投げたが丁度中間でぼすっと落ちる。

こまみ「ちー！」

ちーか「たー！」

ちみか「みー！」

他の子もやるが同じであった。

小鳥「（カワイイなあ……）」

かえつぱ「ごじやる」

それに小鳥とかえつぱは和んだのであった。

小鳥「それじゃ、そろそろ寝ましようか？」

こあみ「とかー」

小鳥の言葉にこあみが答えた後にそれぞれ布団に入った。

小鳥「（うふふ、なんか幸せ……）」

左右をこあみとこまみに挟まれて小鳥はそう思った後に眠りに付いた。

なお、翌朝、小鳥が天国にのぼりかけていたが真一の処置により助かったのであった。

（オマケ）就寝タイムの時のゆきまこひび

雪歩「真ちゃん」

響「真」

真「あの…2人共…」

1つの布団で雪歩と響が真を抑えていた。

真「これって…」

真の言葉に2人は笑った後に布団をかぶる。

真「%\$#||#¥* ‘ ’ +#!!!」

ゆきば&まこちー&ちびき「ZZZZZZ」

声にもならない悲鳴をあげてる真を知らず、ふち達は仲良く眠るの
であった。

翌朝、真はぐったりしていて雪歩と響は顔がツヤツヤであった。

ミラー20：小鳥とアイドルと温泉旅行（後書き）

ユウスケ「後半に続く」

ワタル「真さん、大変ですね」

アスム「うんうん」

シヨウイチ「次はな…」

ミラー21：ぶちと釣りと小鬼？（前書き）

士「原作での旅行編後編だ」

カズマ「どうなるんでしょうね…釣り」

士「そうだな」

ミラー21：ぶちと釣りと小鬼？

亜美「えっ！？魚釣りできるの！？」

女将「はい！」

朝食を食べてる時、一緒に食べていた真一の言った事を女将に聞いた亜美に女将は頷く。

その亜美の隣でやよいとやよは魚を食べていた。

女将「近くに川が流れていて今の時期はいろいろ連れまますよ」

亜美「おー」

女将の説明に亜美はワクワクする。

小鳥「でも…危なくないんですか？」

こあみ「とー」

女将「はい、それほど深くはないですから」

頭にこあみを乗せて小鳥は聞くと女将は笑顔で言い…

女将「ただちよつと…小鬼がいます」

小鳥「こつ……」

たかにゃ「（もーぐもーぐもーぐもーぐ）」

続けて言った事に小鳥は冷や汗を掻く。

その後、一同は真一を含め、川釣りへ向かった。

一同「お〜」

真一「キレイな川だな」

目の前の川にそれぞれ感嘆の声をあげる。

小鳥「連れた魚は夕飯に出してくれるって」

たかにゃ「食！」

真美「よし！期待してていいかねピヨちゃん！」

女将から聞いた事を言う小鳥に真美は笑って言う。

亜美「どこでつる？」

真美「このへんでいいんじゃない？」

響「真く釣れた数で勝負するぞ〜」

真「負けないよ」

雪歩「わっ、私だって…」

それぞれが釣竿を持って行く中、やよいは何かゴソゴソ用意し…

小鳥「やよいちゃん」

真一「此処は海じゃないぞ」

水中ゴーグルと銛を装着したやよいに2人は注意する。

気を取り直し、一同は釣りをするのであった。

亜美「おっ」

ぐぐぐつと亜美の竿がしなったのに亜美と小鳥は気づく。

小鳥「亜美ちゃんすごい！もう連れたのね」

亜美「どりゃー！ー！ー！」

そう言う小鳥の言葉を背に亜美は釣竿を持ち上げる。

ザパー！ー！ー！

びちびち

なぜか釣竿の先にたかにゃが吊られていて、魚を啜えたり、手で捕まえていた。

その後、2人は小鳥に怒られ、たかにゃにいたってはかえっぱにたかにゃがぶちまで同じ事をしていたのを聞いたので長く説教されま

した。

ちびき「だぞー」

まこちー「ヤー」

ゆきば「zzzzz」

こちらちびき達はのんびりと川を見ていた。

すると…

ザパーン

川の中から赤いレイドラグーンが手に大量の魚を持って現れる。

それに真一はカードデッキを取り出そうするが…止めた。

Rレイドラグーン「ぶぐん」

ちびき「だぞだぞ」

まこちー「ヤー」

Rレイドラグーンはちびきの前に魚を置くとちびきは手を振り、まこちーも悪い奴じゃないと分かるとRレイドラグーンに手を振る。

魚を置いた後に2人にRレイドラグーンは手を振ると川を通過してミラーワールドに帰る。

真一「…珍しいミラーモンスターだな…」

「こあみ」とかつ!?!?」

それを見届けた後に真一はこあみの声に振り返ると、こあみの持つ釣竿がぐぐぐぐとしなっていた。

「こあみ」と…とがー!」

「こまみ」ちー!」

「ちみか」たー!」

「ちーか」みー!」

なんとか持ち上げようとすることあみにこまみとちみか、ちーかは気づき、こあみを手伝う。

「こあみ」とー!」

「こまみ」ちー!」

「ちみか」たー!」

「ちーか」みー!」

吊り上げようと踏ん張る4人だが…

ぶわっ

「悪戯カルテット」!?!?」

かえつぱ「ごじゃ!？」

逆に引きずり込まれそうになり…

真一「むん！」

そんな4人を真一が釣竿を掴んで逆に引っ張り、助けた後に魚を釣り上げる。

真一「大丈夫か？」

真一の安否の問いに4人は不満げだったが頷く。

真一「悪いな…今度は釣れる様に頑張るんだぞ」

頭を撫でてそう言うと真一は離れる。

やよ「うっうー」

そんなメンバーと離れてやよは寝そべって川を見ていた。

やよ「(じーーーーー)」

小鳥「何を見ているの?」

その光景が微笑ましいので小鳥はウッフと笑った瞬間…

バツシャアアア!!

目にも止まらぬ速さでやよは動き、魚を捕らえた。

ばっしゅ

小鳥「(すごいとってるー!?)」

やよの後ろで大量にビチビチ跳ねている魚に小鳥は戦慄する。

その後、真達も吊り上げたので夕飯は沢山のお魚料理が出たのであった。

やよい「おいしー?」

たかにゃ「(ガツガツガツガツ)」

亜美「そーいえば結局小鬼見られなかったね」

小鳥「まあそんなに簡単に見られるものじゃないし…」

幸せそうに食べるやよいとたかにゃの隣で焼き魚を一口食べた後に亜美が今朝聞いた事を思い出して言い、小鳥もそう言う。

やよい「こおにつてどんなのですか?みたことないかもー」

食べ終えたやよいが女将さんに聞く。

女将「ええと…たしか鳴き声は『あらー』とか…」

一同「あー…」

真一「（みづらさんか…）」

女将が思い出して言った特徴に全員は誰か分かった。

その後も詳しく聞くと…

証言その？…頭にツノが生えている。

証言その？…気がついたらいなくなる

証言その？…なんかこたぷーん

女将「…だそうです」

小鳥「（言えない…！関係者ですって言えない…っ！）」

真「（確実にみづらさんだね…）」

雪歩「（迷い方もあずささんに似てるよね）」

様々な証言に小鳥は冷や汗を掻いて目を逸らし、真と雪歩は冷や汗を掻く。

小鳥「どつしよつ…探したほうがいいかしら…？みづらさん…」

やよい「まかせてください！」

部屋に戻った後、みづらさんを探すのに悩む小鳥にやよいが名乗りあげる。

「やよい」「やよっ…！こたぶーんな音のほづですっ…！」「ー…！」

「やよ」「うっうー…！」

「やよ」に指示するとやよは駆け出し、外に出て行く。

「少…」

「みづらさん」「あー」

「やよい」「はいっ…！」

「小鳥」「…」

「やよ」に乗って来たみづらさんをジャカジャカと言う音が聞こえそうな程、やよいは笑顔で言う。

「真美」「ねー亜美ー、律っちゃんのおみやげはどーするー？」

「亜美」「んーどーしよっかー」

「お土産屋さんで亜美と真美が事務所の皆へのお土産を考えていた。

「真美」「ミキミキはー…この『おにぎり大好きセット』でいいけど…
ってかセットって何？」

「亜美」「んー…あっ」

「律子のお土産をどうしようか考えてる時、亜美が取ったのは…」

パーティ用メガネ

真美「たぶんつけながら怒るよソレ」

亜美「だよネー」

2人の脳裏にゴゴゴゴゴと音を背にパーティ用メガネをかけた律子が映った。

そして3日目の帰る日

やよい「お世話になりましたー」

やよいが代表で挨拶した後に小鳥達は車に乗り帰路に付くのであった。

小鳥「ふーなんとか無事に帰れそうね」

やよいとみづらさんを挟んで小鳥は安堵の息を吐く。

真美「遠足は家に着くまでが遠足だよー」

小鳥「ハイハイ、もー」

前に座っていて笑顔で言う真美に小鳥は苦笑する。

真「あれ？そう言えばこあみ達は？」

雪歩「いないね」

響「…もしかすると…また上とかじゃないか？」

雪歩と響に腕を抱き付かれていた真は周りを見てこあみ達がい
ない事に気づき、雪歩も見て言つと響がそう言つ。

かえつぱ「ごじやる」

正解であつた。

とりあえず、無事に帰れた。

龍騎「じゃあ楽しかったみたいですね」

小鳥「まあ楽しかったことは楽しかったですけど…」

話を聞いてアハハハと笑う龍騎に小鳥は苦笑する。

インペラー「それで、律子は何貰ったんだ？」

律子「あ、今から開ける所ですよ」

お守りを貰ったインペラーが律子に聞くとそう答えられ、律子は中
身を取り出すと…

出て来たのは般若の面であつた。

タイガ「(何でそのチヨイス!?)」

ゾルダ「(怖さ倍増しそうだね)」

ファム「（しかも早速使用してるわ…）」

龍美「（こっ、こわすぎです…）」

犀美「（あれで怒られたくないね…）」

まさかのお土産にそう思った後にドドドドドドドドドドの音が聞こえる程の威圧を放つ早速般若のお面を付けて双海姉妹を見る律子
がいた。

リュウガ「戻ったぞ」

龍騎「リュウガお帰り、休みどうだった？」

リュウガ「有意義だったぞ」

律子「代理プロデューサーお帰りなさい！！」

そこにリュウガが帰って来て、それに律子は威圧を消し、お面を仕舞うとバビュンとリュウガの前に立つ。

リュウガ「ああ…お土産だ。前、はるかさんので割れたお皿に似たのを見つけてな…」

頭を撫でた後にリュウガは箱を律子に渡す。

律子「あつ、ありがとうございます代理プロデューサー！！大事に
します！！」

小鳥「（あら？）」

喜ぶ律子だが、小鳥はその箱を見て首を傾げる。

小鳥「あれ、真一さんが持ってた箱よね…同じ所に行ったのかしら？」

疑問を感じながら小鳥は仕事に入ったのであった。

ミラー21：ぶちと釣りと小鬼？（後書き）

士「これで律子の怒った時の怖さが増したな」

カズマ「そうだねチーズ」

士「チーフだ」

シンジ「どっになるのやら…」

ミラー22・千早と王蛇とぶちとフリスティング(前書き)

士「今回は千早メインのお話だな」

カズマ「どっなるんでしょっね」

ミラー22：千早と王蛇とぶちとブラッシング

千早「えっ！？律子、今日カゼでお休みなの!？」

とある日、律子からかかって来た電話の内容に千早は驚く。

律子「ごめんねー……大丈夫かと思ったんだけどこじらせちゃって……」

ベッドで上半身起こしてコホと咳き込んだ後に律子は赤い顔で言う。

律子「悪いんだけど今日1日よろしくね」

戻って事務所

千早「でも今、事務所に私1人と寝ている王蛇さんしかいないのだけれど……どうしろと……」

ちひゃー「くっ」

そんな律子の言葉に冬なので冬毛になったちひゃーが見ている中、千早は困った顔をして言う。

律子『んー……グッドラック』

ガチャ、プープー

千早「律子!?!ちよつとねえ律子!?!」

そう言う言葉を送った後に切れた電話に千早は叫ぶ。

王蛇「ZZZZZZZZ」

あしゆなん「なのね!」

このちゃ「や」

せちゆな「めん!」

DG「グルル!」

ソファで寝ている王蛇の上で遊びに来ていたあしゆなんは跳ね、それをこのちゃとせちゆなにDGが見ている。

千早「(…大丈夫かしら…)」

それを見て不安に思った千早であった。

ちひゃー「くっくっ」

千早「はいはいブラッシングね」

ぺしぺしと自分の頭を叩くちひゃーに千早はブラシを用意する。

千早「ほら、じつとして」

ちひゃー「くにゃー!」

そう言った後に千早はちひゃーの髪をといで行き、その心地よさにちひゃーは和む。

2時間後

千早「おおおおお」

ブラシを持っていた右手を震わしている千早がいて、後ろではつやつやになった髪にご機嫌なちひゃーがいた。

あしゆなん「なのね！」

このちゃ「やー」

せちゆな「めん！」

王蛇「ん？お前等もブラッシングされたいのか？」

それを見ていたぶちま達のお願いに1時間前に起きた王蛇は聞き、ぶち達が頷いた後に分かったとブラシを持つ。

王蛇「んじゃあまずはあしゆなんな」

あしゆなん「ね！」

カムカムと手を振り呼びかける王蛇にあしゆなんは駆け寄る。

そして髪の部分をとぐ。

あしゆなん「なのね〜」

王蛇のブラッシングの心地よさにあしゆなんはほにゃ〜と和む。

D G「グルル…」

王蛇「ん？手慣れてるなだと？…こあみやこまみにちーかにちみかのもやってたからな…」

D Gの問いに王蛇はやりながら答える。

王蛇「終わり、次はせちゆな」

あしゆなん「なのね！（ふしゅー）」

せちゆな「めん！」

王蛇「ちよつと鶴の頭部分邪魔だから脱がすぞ」

あしゆなんが離れた後に座ったせちゆなにそう言つとぐいっと鶴の頭部分をぐいっと引つ張つてきゅぽんと脱がす。

その瞬間…

せちゆな「ちゃー！」

王蛇「…なんだこれ？」

自分の顔に張り付く孔雀の羽が付いた状態のせちゆなに王蛇は呟く。

別の場所で

龍騎「おーそうかそうか、王蛇と一緒に頑張ってるのかー」

電話先の千早の連絡に龍騎はそう言う。

伊織「あああああああ」

龍騎「えっ？いや俺は伊織のロケの手伝いをインペラーとタイガに
ガイと共にしてるんだ」

隣を必死に走っている伊織を横目で見て言う。

龍騎「ああうん…今ちよつと海外でー…ガイが放った牛に追われ
てる。それでインペラーは真っ先に踏まれてタイガに介抱され中」

伊織「あああああああ」

ドドドドドと来る牛の大群に必死に走りながら龍騎は言う。

ちなみにあふうが牛に乗ってる。

通話を終えた後に千早はある事を思い出す。

千早「あ、そうだね。春香なら今ヒマかもしれない…」

ちひゃー「くーー」

早速春香を呼ぼつと番号を押そつとした時…

春香「呼んだ！？千早ちゃん！」

千早「あらっ！？」

扉をバンと勢い良く開けて現れた春香に千早は驚く。

春香「で何するの？増やすの！？」

千早「え…あの」

春香「増やすの！？」

笑顔で迫る春香に千早は戸惑う。

春香「はるかさん！はるかさん！」

千早「ごめんね春香、呼んでおいてなんだけど帰って」

王蛇「後、いないぞ」

このちゃ「や〜」

はるかさんを探す春香に千早がそう言い、せちゆなをといた後にこのちゃの髪をときながら王蛇が補足して置く。

千早「どうしよう…音無さんがいてくれればいいのだけど…」

春香「じゃあ探してくるね」

千早「え……?」

呟いた千早に春香がそう言い、それに千早があっけに取られてる間に春香はスタンバイなみづらさんを頭に乗せ…

千早「ちよっ…」

慌てて止めようとする千早だが間に合わず、春香は両手をぱんつと合わせてると共にワープする。

雪歩「(〇□〇〇)」

まこちー「まきよ?」

へぶんずそーど「くわー?」

うおるたー「シャ〜?」

春香「あれ?」

みづらさん「あらー?」

なぜか春香とみづらさんは雪歩とまこちーとへぶんずそーどとうおるたーがゲストで出ていたラジオにワープしていた。

千早「まったく春香は…」

ワープした春香に千早は顔を抑える。

ちひゃー「くっ」

やよ「うっうー」

その隣でちひゃーが千早の手伝いでやよの髪の毛のブラッシングをしようとしていたが…

ちひゃー「！」

もっさりしているせいかブラシに髪が絡み付いてしまう。

ちひゃー「くっ！くっ！」

慌てていたせいかちひゃーにもやよの髪が絡み付いてしまう。

ちひゃー「くー…」

千早「ちよつとちひゃー大丈夫!？」

完全に絡まってしまって涙目なちひゃーに気づいて千早は慌てて救出にかかる。

千早「大丈夫？」

ちひゃー「(ぐず)」

左手にやよの髪の毛の先を持ってぐずるちひゃーの頭を諷めていると…

「やよ」「うっうー!」

千早「あっコラ!?!」

何かを見つけ駆け出すやよに千早は気づいて止めようとして…

みよーーん

千早がやよの髪の毛の先を掴んでいたので止まった後に…

びよーーん

その反動でやよが反対側に飛んで行く。

千早「はーあ、どうにか落ち着いたわ…」

ソファーにすっと座り、千早は一息を付く。

千早「あなたは手がかからないからいいわね…」

そして隣にいるゆきぼの頭をなでなでしながらそう言う。

ゆきぼ「……………」

なでなでが終わった後、ゆきぼはしばらく千早を見ていて…

千早「…はいはい」

おずおずとブラシと自分のしっぽを前へ出すゆきぼにこの子もかと思っただ後にやってあげた。

千早「あっ、もうお昼なのね」

ブラッシングしていてふと時計を見て千早は気づく。

王蛇「んじゃあそろそろ食べるか…」

このちゃ「やー」

千早「えーとご飯…は何食べてるのかしら？」

たかにゃ「(スツ)」

王蛇の言葉にこのちゃが同意して千早が考えてる時にたかにゃがある物を差し出す。

それは…とあるラーメン屋の出前表で注目とラーメンに丸が付けれれていた。

千早「(ホントこの子…貴音と同じ様にラーメン好きね…)」

注文したラーメンを食べながら千早は隣でずぞぞぞと食べるたかにゃを見てそう思ったのであった。

千早「はあ……けっこう疲れるわね」

椅子に座り、机にもたれながら千早はそう漏らす。

千早「(これを毎日やってる律子はすごいわ…私も…)(すっ…)」

そう心の中で呟いた後に疲れたせいかな千早はそのまま眠る。

それに気づいたちひゃーは他のぷち達を呼ぶ。

小鳥「あら」

ちひゃー「しー」

千早「すーすー」

事務所に帰って来た小鳥は寝ている千早にゆきぽに毛布をかけているのに気づき、ちひゃーが起こさないでと合図する。

龍騎「おーそうか大変だったんだな千早」

王蛇『ああ…』

王蛇からの連絡に龍騎はそう言う。

王蛇『んで、お前等はまだ海外か？』

龍騎「ああ、うんそうまだ海外だ」

王蛇の問いに龍騎はそう答える。

王蛇『それで今何してるんだ？』

龍騎「今？ああ…今な…伊織のガイの御仕置きを見てる所」

龍騎は目の前でドドドドドドドドと縄で縛られ、あふうと伊織が乗
ってる牛に引き摺られてるガイを見てそう言う。

「オマケ〜カゼでダウンしている律子の元へ…」

律子「う〜ん、大丈夫かな千早…」

舞「は〜い見舞いに来たわよ律子ちゃん」

律子「舞さん…」

舞「嫌な顔をしないでよ、もう1つのライバルとしてほって置けな
いでしょ？」

リュウガ「なんだそのもう1つのライバルって…」

律子「だ、代理プロデューサー!？」

ちずるさん「あらあらー」

律子「誰ですかこの子？」

リュウガ「ああ、新しいぷちまのちずるさんだ…どうもカゼに良い
事を知ってるらしいから連れて来た」

ちずるさん「うふふ」スツ（手には取れたたのネギを持っている）

律子「…ちょっと待ってください。まさか…」

舞「あー…あれね…」

ちずるさん「うふふw」

律子「えっ、ちょ…貫かれないいいいいいい！！！！」

リュウガ「？」

その後、舞さんによりちずるさんにされそうだった事を回避出来た律子であった。

ミラー22：千早と王蛇とぶちとフリンギング（後書き）

シンジ「やられたくないね…」

ワタル「やられたくないですね」

アスム「うんうん…」

ウラタロス「そうだね…」

ミラー23：響と鍋とくまあふう（前書き）

土「久々の更新だ」

カズマ「ちなみにこの話では高天原Aさんの所の『【でふおるまにあ・わーるど】ぷちま！？　くぷちます的な何か』のぷちたる・はざーど編を見ないと分からない部分もあるからそっちを見て置く事をお勧めするよ」

【でぶおるまにあ・わーるど】ぷちま!？ くぷちます的な何かで起こったぷちま風邪により一部のぷちどる達がそれ発症したが龍騎達の活躍で元気になった翌日のお話である。

ちびき「ぞーー」

美希「のーー」

龍美「ですー」

響「……………」

顔を緩ませている3人を響はじーと見ていたが…

美希「言つとくけどここは事務所だよ？」

響「え?あ…うん…」

コタツに入っていた美希にそう言われる。

美希「それにしても大変だったよね」

響「確かにちびき達が風邪を引いた時はビックリしたぞ」

龍美「ですね」

前日起きた事に美希はそう言い、響は同意して言う。

戻って来たメンバーで特にリュウガや龍騎にナイトのにメンバーは驚いて其の場に律子がいなくて良かったなとその時いたアイドル達はそう考えた。

なお、ちっちゃんはそれにくらりと倒れかけた。

美希「あ、みかんがなくなっちゃったの」

響「じゃあ自分が取ってくるぞ」

話してる内にみかんがなくなり、それに響が取りに行く。

響「お？ここかな」

みかんと書かれたダンボールを開けると…

あふう「zzzzzzzz」

みかんに埋もれてあふうが寝ていた。

美希「あつたー？」

響「寝てた」

龍美「何がですか？」

美希の問いに響はそう言い、龍美は首を傾げる。

響「そっとしておっつ……」

美希&龍美「何を？」

コタツに潜る響に2人は聞くが答えられず、そのまま2人は寝だつ。

小鳥「えーと、みかんみかん」

そこに小鳥が来て響が見たあふうの寝ているみかん箱に近づき開け…

響「しーしー」

小鳥「あ、はい」

起こさない様に注意する響に小鳥は答える。

響「別にいいんだけどさ、また怒られるぞ？」

美希「んーしーしー」

起こさない様に補充したみかんを剥きながら自分のに手を伸ばそうとする美希に響はそう言う。

美希「大丈夫大丈夫、今日は律子、カゼでお休み…」

ぽん

手をひらひらさせて言いかけた美希の頭に誰かが手を置く。

そして美希は振り返ると…

律子「(ニコツ)」

笑顔の律子がいた。

美希「……さん；」

言い直したが律子に叩かれました。

響「もうカゼは大丈夫なのか？」

律子「あー…一応ね。まだ調子悪いから今日はコタツは許可します」

龍美「…殴られ損ですね；」

倒れてる美希に冷や汗を流してる龍美に気にせず、律子はパソコンを起動させる。

律子「休んだ分の仕事もあるし」

ちびき「だぞ」

そう言った後にちびきが差し出した剥いたみかんを貰って礼を言った後に食べながら仕事をすする。

そうしているよ…

美希「んじゃ、お鍋にしよう？」

律子「は！？」

復活した美希が唐突に言った事に律子はあっけに取られる。

美希「だってホラ、お鍋だといろんなの入ってるから病み上がりにはもってこいな」

律子「いや…アンタが食べたいだけでしょ…」

リュウガ「だが確かに病み上がりの律子には丁度良いな」

ちずるさん「あらあらー」

美希の言葉に律子はそう言つと頭にちずるさんに乗せて通りかかったリュウガがそう言つ。

律子「代理プロデューサー!？」

美希「あつ、代理プロデューサーは分かってるね」

リュウガ「此処の所、律子に頑張つて貰ったからな元気に過ごして貰う為にも回復しないと」

驚く律子の隣で美希はそう言い、リュウガはそう言つ。

ちずるさん「うふふw」(ネギを構える)

律子「こつ、心遣いありがとうございます…」

響「変わったぶちまだな」

美希「ホントに変わってるの、ネギをどこから…」

その後、美希の悲鳴が響き渡った。

律子「あ、もしもしゃよい？ちょっとお願いがあるんだけど…」

リュウガも言うので折れた律子は早速やよいに電話をする。

律子「貴音もいるの？ちょうどいいわ…うん…そう…お鍋やるから…」

その後ろでちずるさんがちびきとにらめっこして、美希はぼへーとし、響は何か編んでいる。

律子「うん、食材だけ、あ、あとわりばしとコップも買ってきて」

やよいに買って来て欲しい物を伝えた後…

律子「お金は全部プロデューサーが出すからおかしもいいわよー」

龍騎「え？」

龍美「(どんまいですマスター；)」

そう伝えて通りかかった龍騎は一瞬時が止まり、龍美は心の中でそう言う。

やよい「……だそうです」

貴音「それはいいですね」

やよを抱えた貴音に律子からの用件を伝えたやよいは早速材料を買いに行く。

貴音「お菓子も買ってもいいそうですよ。いってらっしゃい」

やよ「うっうー」

貴音の言葉に見送られてやよはぴょんと飛び出してお菓子を取りに行く。

やよい「買ってきました!」

貴音「何鍋ですか」

本マグロを1匹まるごと入れて来たやよいに貴音はそう言い…

やよ「うっうー」

貴音「何菓子ですか?そもそもお菓子ですかソレ!」

そしてやよが持って来たモアイ像みたいな奴に貴音はツッコミを入れる。

その後、2人が来た後に鍋の準備にかかった。

ザジュ「…あ、つい暑い」

律子「あの…王蛇さん…なんでザジユちゃんを鍋に?…」

王蛇「気にするな、Aに聞いたが本人にはちよつと熱い温泉に入つてゐる感覚だそうだ…そろそろ良いな」

用意された鍋でぐすぐすと煮立つてる中に入つてるザジユに律子は冷や汗掻いて聞き、王蛇はそう返すと鍋からザジユを引き上げて氷水の傍に置く。

ザジユは頭に乗せた手拭いで顔を拭くと氷水の中に入る。

ザジユ「(ふにゅ〜)(」

ちびき「うわぁ〜凄くくつろいでますね〜」

美希「後凄く良い匂いがするね〜」

手拭いを頭に乗せてくつろいでるザジユにちびきはそう言い、美希はお鍋から漂う匂いにそう言ひ。

美希「じゃあ具材入れ……」

ちびき「だぞっ!」

早速入れようとする美希にちびきは止めて…

ちびき「だぞ!だぞ!」

美希「おおっ!」

入れる順を指示するちびきに美希は関心すると…

美希「なべ太夫なの」

貴音「いいえなべ星人です」

律子「はいはい」

リュウガ「後、それを言うなら」

美蟹「鍋奉行やで」

次々と言う美希と貴音にリュウガと美蟹がそう言う。

律子「あーっ食べた食べた」

ちびき「ぞー」

ザジユ「…満腹で満足まん」

美希「しあわせー」

ちづるさん「あらあらー」

鍋を食べ終えた後、律子達はお鍋の味を堪能した。

貴音「食休みもよいですが、後片付けも手伝ってください」

律子「あ、ごめんね、今 行くわ」

お鍋を片付けている貴音にそう言つと律子も片付けの手伝いをする。

あふう「ナーーーーー」

そこに毛布を羽織つたあふうが起きて来て涙目になっていた。

あふう「ナーーーーー」

響「しまった忘れてた!」

気持ちよく寝ていたので起こすのを忘れていた響は叫ぶ。

涙目なあふうに木枯らしが吹いたのは気のせいではないだろう…

あふう「ナーーーー」

律子「ごめんねー…あふうもお鍋食べたかったよねー…」

泣き掛けなあふうに律子は謝る。

律子「とりあえずおにぎり作ってくるわ」

響「じゃあおわびにさっき編んだコレあげるぞ」

律子がそう言つておにぎりを作っている間に響は編んでいたのをあふうに着せる。

そして律子が戻ってみると…

もそつとしたのを着たあふうがいた。

響「くまあふう！」

律子「（くま…？）」

インペラー「びみよーな顔してるな…」

あしゆなん「なのね！」

持ち上げて本人曰くくまあふうを見せる響に律子は疑問を感じ、あしゆなんを頭に乘せたインペラーはあふうの表情を見て言う。

この後、くまあふうコスチュームはあふうの冬場のコスチュームに入ったのであった。

ミラー23・響と鍋とくまあぶっ(後書き)

ワタル「と言う訳で登場くまあぶっ」

アスム「次はお正月の奴ですけどその前にですね…」

シヨウイチ「だな」

ユウスケ「次回を待ってるよ！」

サイドミラー4：戦士のプレゼント配り（前書き）

カズマ「プレゼント配りだね」

モモタロス「プレゼント配りも最初からクライマックスだぜー！」

サイドミラー4：戦士のプレゼント配り

龍騎「皆ー！遅れてごめん！」

電王とキバの世界と並列している世界、サンタワールドに龍騎は集まってるメンバーに頭を掻いて言う。

ディケイド「遅いぞ城戸」

クウガ「何かあったの？」

龍騎「いやー：A君と一緒にぶち達やアイドルの皆に他に来ていた人達にプレゼントを渡してて…」

ディケイドの後のクウガの問いに龍騎は遅れた理由を話す。

響鬼「それならしょうがないな」

ブレイド「多いから大変だったろ」

龍騎「ああ、けれど喜んでくれる笑顔を見たいから疲れは吹き飛ばさる」

響鬼とブレイドの労いの言葉に龍騎はそう言う。

電王超CF「今回も電王サンタが届けるぜ！」

WCJX（翔太郎）「行くぜフィリップ」

WCJX「ああ、プレゼントを渡しに行こう」

アギト「楽しみですね」

カブト「おばあちゃんが言っていた。プレゼントは子供達の笑顔だと」

キバ「ホントですね」

キバット「ホントこの時だけ渡とられるよな！ユーノを見守るのも良いがな」

キバ「まあまあ、ユーノ君はタツロットが見てるんだし」

キバット「そうだな！後でクリスマスパーティーの様子を映したのを見ようぜ」

響鬼「おっ、良いね」

それぞれワイワイ話した後にサンタが来る。

サンタ「メリークリスマス！今年もありがとう手伝ってくれて！」

クウガ「いえ！俺は色んな人が笑顔なのを見たいからしてるんです！」

アギト「うんうん」

サンタの言葉にクウガはサムズアップし、アギトも同意と頷いている。

クウガ「それじゃあ一号先輩達も頑張ってるし！行こうか！！」

電王超CF「よっしゃあ！行くぜ行くぜ行くぜ！！」

クウガの号令の後に11人のライダーは様々な世界の人たちへプレゼントを運びに行く。

聖なる夜にメリークリスマス

サイドミラー4：戦士のプレゼント配り（後書き）

シヨウイチ「そんな訳でクリスマス話だな」

カズマ「ちなみにリイマジメンバーである俺達は自分達の世界でプレゼント配ってました」

ユウスケ「色々大変だったな」

シンジ「ですね」

ミラー24・律子と舞と真一とちっちゃんの初詣(前書き)

ライダーズ「新年明けましておめでとございます!」

インペラー「今回もライぷち!頑張って行くぜ!」

タイガ「よろしくね」

ミラー24：律子と舞と真一とちっちゃんの初詣

律子「あつ、あの代理プロデューサー…」

リュウガ「ん？何だ律子？」

876プロとの合同での新年パーティをしていた際、律子に声をかけられてリュウガは聞く。

律子「あつ、あの…初詣、一緒に行きませんか？」

リュウガ「初詣か…そうだな、しばらく休みだし良いだろう」

律子の誘いにリュウガはそう言う。

それに律子は顔をパーと輝かせる。

舞「（成る程ね…）」

それを一緒に参加していた舞が聞いていたが…

そして朝

律子「舞さん、よくやりますね」

舞「うふふ、リードはさせないわよ」

今日は髪を下ろして黄緑の着物を着た律子に紅い着物を着た舞は笑

って言う。

????「遅れてすまない……」

律子「あつ、代理プロデューサー？」

睨んでいて後ろからした声に律子は振り返ると……ちっちゃんを抱えた変身を解いた真一がいた。

律子「だつ、代理プロデューサーですか？」

真一「ああ、これが証拠だ」

聞く律子にそう言って真一は懐から自分のカードデッキを見せる。

舞「確かにリュウガのだね」

真一「この姿では辰戸 真一と名乗っている。ちよっとちっちゃんを連れて来るのに遅れたんだ」

律子「そうだったんですか」

舞が頷いた後に真一はそう言い、律子は残念そうな顔をするがしよ
うがないやと苦笑する。

そんな訳で3人とちっちゃんは初詣の為に歩き出す。

真一「…2人共、何で抱き付くんだ？」

ちっちゃん「めっ」

頭にちっちゃんを乗せた真一は左右で抱き付いている律子と舞にそう聞く。

律子「えっと、はぐれない様にです」

舞「良いじゃない。こんな美人と美少女に抱き付かれて本望でしょ？」

恥ずかしげに言う律子とあっけからんに言う舞に真一は…

真一「周りの視線が痛いんだが…」

周りから嫉妬の視線を受けながら真一は言う。

舞「あはは、見せ付けてやりなよ」

律子「あの、迷惑ですか？」

真一「迷惑ではないが…まあ、早く行こう」

笑って言う舞に律子は不安げな顔で聞き、真一はそう言った後に神社へ早く行く様に言った後に3人は早く行く。

真一「此処だな」

舞「うひゃあ、多いね」

律子「そうですね」

ちっちゃん「め」

目の前を見て真一は言い、人の多さに舞はそう言い、律子とちっちゃんも同意する。

すると、真一はある人物を見つける。

龍美「初詣、初詣」

美穂「ほら、真司」

真司「はいはい」

美白「色々と回りましょうね」

劍崎「大変だな真司」

巧「そうだな」

契約モンスターズと美穂に引っ張られてる真司と赤貧トリオの2人である劍崎と巧に…

こあみ「にーちゃー！」

こまみ「にーちゃー！」

ちーか「にーちゃー！」

ちみか「にーちゃー！」

王蛇「分かっている。お参りは逃げないぞ」

あしゆなん「なのね!」

インペラー「じつとしとけよ」

タイガ「ホントに懐かれてるね」

悪戯カルテットと行く王蛇とあしゆなんを頭に乘せたインペラーに
タイガがいた。

舞「他の皆も来てたんだね」

真一「俺達も済ませるか」

律子「そうですね」

ちっちゃん「めっ!」

その後、4人はお参りをしたのであった。

真一「そうだ律子にちっちゃん、お年玉だ」

舞「私からもね」

律子「あつ、ありがとうございませす」

ちっちゃん「めっ」

ミラー24・律子と舞と真一とちっちゃんの初詣（後書き）

ファム「と言う訳でお正月小説だったわね」

ゾルダ「そうだね」

アビス「ちゃっかり出てるな」

ミラー25：ぶちとアイドルと正月行事（前書き）

ネス「そんな訳で正月話だよ」

士「だな」

カズマ「始まるよ」

ミラー25：ぶちとアイドルと正月行事

それは、春香の一言で始まった。

春香「・・・というわけで本日は！！大新年会をはじめましょーうっ
！！」

龍騎&律子&美蟹「はい？」

呼び出されたメンバーで上記の3人が代表で声が漏れる。

リュウガ「律子、なぜそれを？」

春香「あふうちゃんは事務所で悲しい思いをしてたんですよ！かわいそうじゃないですか！だから今日はあふうのお正月ですっ！ねー？」

あふう「ナニヨー」

リュウガの問いに春香はあふうの頬を引っ張りながら言う。

龍騎「あれ？けど確か・・・お正月の間のお世話・・・」

律子「・・・お正月、春香に世話を頼んでいたはずだけど？」

思い出す龍騎の前に律子は亜美達が旅行お土産に渡した般若のお面をスチャと装着して言う。

ダッ！

インペラー「春香は逃げた！しかし周り込まれた！」

ガイ「律子のハリセン攻撃！効果は抜群だ！！春香は倒れた！」

犀美「何このポケモンの様な流れ？」

鳥火「気にするな」

それを見ていたインペラーとガイのナレーションに犀美がツッコミ、
鳥火はそう言う。

春香「一年の計は元旦にあり！！もうすぎてるけど、新年大書き
初め大会ー！！」

起きた春香はそう言うって半紙を掲げて言う。

ちなみに春香が書いたのはごめんなさいであった。

あふうの場合

あふう「ナノ」

ゾルダ「おー見事なおにぎりだね〜」

春香「あふうちゃん絵が上手だね〜！書き初めじゃないけど」

綺麗なおにぎりを書いた

びよびよの場合

びよびよ」「ぴっ」

ベルデ「『商売繁盛』か」

春香「おーさすがマジメだねえー」

びよびよはマジメに経営のを書いた。

ゆきぼの場合

ゆきぼ「……」

春香「………うん？」

インペラー「穴か？」

タイガ「穴じゃない？」

ゆきぼ「（コクコク）」

ライア「アタリの様だな」

ゆきぼが書いたのに春香は一瞬疑問詞を浮かべ、その隣でインペラーとタイガの言葉にゆきぼは頷く。

春香「えー次は羽根突き大会です！」

頭に羽子板を加えたあふうを乗せて両手に羽子板を持った春香がその言う。

最初はあふうとたまたま来ていたちっちゃんである。

あふう「ナノー」

ちっちゃん「め……」

元気良く羽子板を構えるあふうとは逆にちっちゃんは重たそうであった。

あふう「ナノツ！」

ちっちゃん「め……」(ふるふる)

あふうが先行で羽を打ち上げるとそれを返そうとちっちゃんは持ち上げようとするが持ち上がらず……

ぶんっ

ガッ

あふう「ブツ！」

タイガ「あふうちゃん!？」

勢い良く振ろうとしたちっちゃんの手から羽子板がすっば抜けてあふうの頭に命中する。

あふう「ナーーー」

春香「おーよしよし」

ちっちゃん「めっ！めっ！」

律子「何？重くて振り回せない？」

ナイト「他のぶち達と違って力がないんだな」

あふうを諫めている春香を尻目にちっちゃんの弁解を律子は言い、
ナイトはそう言う。

律子「うーん…？あっ」

顎に指を当てて考えた律子はある物をちっちゃんに渡す。

ちっちゃん「め…」

何時も律子が使っハリセンであった。

びゅっおおおびゅ

あふう「あふう」

インペラー「はええ…」

凄まじい音を鳴らして振るつちっちゃんにあふうとインペラーは冷
や汗を流す。

ある程度進んで次はぴよぴよとゆきぽである。

ぴよぴよ「ぴっ

ゆきぽ「……」

2人はそれぞれ良い勝負をして行き…

カンッ

タイガ「あれはアウトかな？」

ゆきぽが打った羽が外に出た事にタイガがそう判断した時…

ぴよぴよ「ぴっ

雪歩「!?!」

真「ぴよぴよ!?!」

響「あれじゃあ落ちちゃうぞ!?!」

それにぴよぴよはぴよんとジャンプして窓に出て羽を打ち返すと…

3人「!?!」

ふよふよと飛んで戻るのに3人は冷や汗を流す。

メオ「（飛べたんで!?!なるな…）」

戻って来たびよびよを見てそう思ったメオであった。

そして大将戦

律子「なんで私なんですか…」

ガイ「そう言うなって」

律子とガイが対決するのであった。

ガイ「よオオオし律子勝負だ！！俺が勝ったらリュウガをダーリンと呼んで貰うよー！！」

律子「ダッ……」

春香「おおっ」

リュウガ「なぜ俺が出る？」

龍騎「うんうん」

翼「はあ…」

ガイの言った事に律子は顔を赤くして春香は感嘆の声を上げる隣でリュウガと龍騎がそう言うと言つと翼は眉間を押さえる。

結果は恥ずかしがった律子が勝利しました。

春香「お次はモチつきですよモチつきっ！」

それを見てインペラーとタイガが驚いてる隣で王蛇がそう言つとモチを返す役はオーディンがやり、どンドン作つて行く。

あふう「ナーーーーー」

出来上がったモチが焼けるのをあふうはじいじいと見る。

あふう「(ぷーーーーー)」

そしてお餅がぷくぷくと膨らむとあふうは頬を膨らませる。

ゆきば「(ぷーーーーー)」

その隣で龍騎と交代して休憩のゆきばが同じ様に頬を膨らませてその頬を押さえて面白い顔をする。

あふう「(ぶつ)」

律子「平和でいいわねアンタら」

それに吹いたあふうを見て律子はそう言う。

律子「ちよつと作りすぎたかしらね……」

春香「まだ作つてる……」

お餅の山を見てそう呟く律子の隣で春香はまだ突いてるゆきばを見て呟く。

律子「まあ、今回は春香にしてはいい提案だったわね」

春香「えへへー」

律子の言葉に春香は照れる。

律子「まあ、それはさておき、モチ米10キロに杵とつす……七輪にさっきの羽子板セットもろもろ……」

その途中で春香に背中を向ける律子に春香は冷や汗を掻き……

律子「……その予算、どこから……出たのかしらぁアア？」

春香「(だらだらだら)」

そして般若のお面を纏って振り返った律子に春香はさらに冷や汗を流す。

インペラー「…これ、Aの所に持って行くか」

王蛇「そうだな、前のお餅のお返しに行くか」

その後、春香が叩かれた後にインペラーと王蛇はこあみとこまみと共にAの所に持って行ったのであった。

ミラー25：ぶちとアイドルと正月行事（後書き）

士「凄いなお餅の量」

カズマ「そうですね」

シンジ「次はそんなお正月での女の子が嫉妬しちゃうお話…かな？」

ミラー26・真とあずさともっちりまこちー（前書き）

士「言っで置く。今回は女性が羨ましがるかもしれないお話だ」

カズマ「確かに羨ましがりますね」

ミラー26・真とあずさとまつちりまじちー

前回から翌日

真「たっだいまーまっごちいー!?!」

まこちー「ヤーー」

元気よくドアを開けてまこちーにそう言う真の後に…

響「おーっす遊びに来たぞーおかしもあるぞー」

雪歩「こっ、こんにちわまこちーちゃん」

まこちー「ヤー」

続いてまこちーに元気に挨拶する響と雪歩が入って来る。

響の持っているお菓子に反応してまこちーは手を伸ばす。

まこちー「ヤーー」

でぷと言つ擬音が聞こえかねないお腹で…

響&雪歩「(なんか太ってるー!?!?)」

真「何?」

正月太りしたまこちーに響と雪歩が驚いてるのに真は聞く。

真「そ、そんなに太ったかなあ…？」

まこちー「へへっ」

響「うん、太ってるぞ」

雪歩「分かる程太ってるよ真ちゃん…」

意外と言う心情を含めた真の問いに響の膝でじゃれてるまこちーを見て2人はそう言う。

響「ていうか、お正月はどういう生活をさせてたんだ？」

真「えーと」

響の問いに真は思い出しながら紙にお正月のまこちーの生活を書く。

お正月でのまこちー

すいみん ゴハン ねる ゴハン ねる おやつ ねる ゴハン
すいみんに戻る

真「いたって普通だよ？」

響「どこのニートね？」

雪歩「これはどつかと思っよ」「…」

そう言う真に響と雪歩はツッコミを入れる。

真「…まあたしかに、ボクも最近ジム行ってないし…」

よっと軽く体を動かした後によしっ！！と言い…

真「まこちー！ジム行くよー！」

まこちー「まきよ」

ダイエットしよう！と決めてジムに行く事にしたようだ。

それでまこちーも返事した後に起き上がるうとし…

まこちー「ヤ……（ふるふる）」

お腹がつかえて起き上がれないようだ。

真「……カワイイからこのまま」

響&雪歩「ダメ」

まこちー「ヤ……」

そのまこちーにふんにやりとなる真に2人はそう言う。

その後、響と雪歩と別れ、真とまこちーはスポーツジムに行った。

真「さー着いたよー」

肩に下げたカバンの中に入ったまこちーにそう言った後に真は手短

な場所にまこちーが入ったカバンに降ろす。

真「じゃあボク着がえてくるから、ちょっとそこで待っててね！」

まこちー「ヤーー」

そう言っつて運動できる服装に着替えに離れる真をまこちーは見送る。

まこちー「ヤーー」

????「あーー？」

そんな待っているまこちーに近寄るのは…

着替え終わって戻って来た真が見たのは…

あずさ「ウフフぶにぶにー」

みづらさん「あーー」

ちづるさん「あらあーー」

まこちー「キヤツキヤツ」

まこちーのお腹をぶにぶにしているあずさにそれを見ているみづらさんとちづるさんがいた。

あずさ「あらダイエット？それはたいへんねー」

みづらさん「あらあーー」

ちづるさん「うふふ」

どこたゆるんな擬音をさせて真から聞いた事にちづるさんとみつらさんを抱いたあずさはそう言う。

真「あずささんはダンスレッスンですか？後、みつらさんやちづるさんは付き添い？」

そんなあずさ達にまこちーを抱き締めた真はいる理由を聞く。

あずさ「最初は家の近くのコンビニに行こうとー」

真「……ああ」

あずさの言葉に真はまたかと思った後…

あずさ「ーーそれで角を曲がったらここにー」

真「（あずささん、それ軽く次元超えています）」

続けてあずさの口から放たれた言葉に真は心の中でツッコミを入れる。

真「それじゃ、まずは準備体操から」

まこちー「ヤーーー」

あずさ「はーーーい」

みづらさん「あらー」

ちづるさん「あらあら」

せつかなのでと参加するあずさ達と共に真はまこちーのダイエットを始めるのであった。

最初に腕をあげて背伸びをするのだが…

こけっ

腕を上げた後にまこちーは後ろにこけ、その後は起き上がれないでじたばたする。

これは無理だと真は判断して次になわとびをさせる。

まこちー「ヤーーーーー」

早速まこちーに合う長さのなわとびを持たせたが…

まこちー「ヤッ」

ぺちと言つ地面になわとびのなわが当たつてのそつと越えると言つまこちーの隣であずさと共に綺麗に飛んでるみづらさんとちづるさんを見て真は顔を押さえる。

真「うーん、なわとびで飛ぶのもダメ、運動もダメか…」

あずさ「ねえ真ちゃん、ダイエットするならこれとかどうかしらー？」

考え込んでる真にあずさがどたぶつぶつぶと擬音が聞こえそうに
振動マシンを使いながら勧める。

まこちー「?」

と言いついで真はまこちーをちっちゃい子用の振動マシンに乗せてオ
ンにする。

ブイイイイ

まこちー「ヤヤヤヤヤヤヤヤヤ」

それと共にまこちーは振動マシンと共に揺れる。

30分後

まこちー「ヤヤヤヤヤヤヤヤヤ」

真「うん……なんかごめんね……?」

振動マシンから降りてメトロロームの様に揺れてびびりびびり
と歩いて来るまこちーを見て真は思わず謝った。

3日後

真「……てな感じで3日間やったらこうなった」

響「早っ!?!?」

雪歩「まこちーちゃんって痩せ易い体質なのかな?..」

腰に手を当てて仁王立ちする元通りのまこちーに響は驚き、雪歩はそう言う。

真「ついでに空手を教えたんだけど……」

響「ついでって……」

真の言葉に響が呆れるとけど…と真は言葉を切つて間を空けた後…

真「どこをどう間違えたのか、プロレス技を覚えちゃった」

まこちー「ヤー」

響「ていうかなんで自分技かけられていただだだ!!ギブギブ!!」

真が喋っている間にまこちースペシャルなプロレス技を響にかけ、かけられた本人はギブギブとタップする。

それを雪歩が黒い笑顔で見ていた。

インペラー「(こわっ!)」

それを見たインペラーはそう心の中で言う。

龍騎「プロレス技を覚えたんだなまこちー」

ベルデ「はっはっはっ!プロレスか」

響「笑い事じゃないぞ！メチャクチャ強いんだから」

顎に手を当てる龍騎の隣で腕を組んで笑うベルデに腰を抑えながら響はそう言う。

ベルデ「よーいし、どの程度が見てやるうじゃないか！かかってこいまこちー」

まこちー「ヤーーー」

インペラー「知らんぞ俺は」

構えるベルデにインペラーがそう言った後…

まこちー「へへっ」

ベルデ「おっ？」

まこちーはぴとっとベルデの左足を掴むと…

ぶんっ！

ぎやるるるるる

勢いよくベルデを後ろに投げ、それによりベルデは回転しながら地面に叩き付けられる。

王蛇「見事な水車投げだ」

オーディン「まったく…」

インペラー「言わんこつちやない…」

気絶しているベルデを見て王蛇は素直に感嘆し、オーディンとインペラーは呆れる。

ちなみにベルデは全治3週間になったのであった。

真「まーでも今回で思い知ったよ。今度はちゃんと食後には運動させるよ……」

響「うむ、アイドルたるもの体重管理はあたりまえだぞ」

雪歩「そうだね」

腕を組んで反省する真に響はそう言い、雪歩も同意する。

響「その点自分はーー」

ぐううううう

さらに言おうとした響と雪歩のお腹から音が鳴り、それに2人は顔を赤くすると…

響「忙しかったから朝食食べてないだけだし！ほほ本当だぞ！？ダイエツトじゃないからね！？」

雪歩「そうだよ真ちゃん！ー」

真「あつ、うん…」

顔を赤くして必死に言う2人に真はそう言うしかなかった。

その後、まこちーと共に運動する響と雪歩の姿が時たまあったのであった。

ミラー26・真とあずさともちりまこちー（後書き）

士「ダイエットは大変だよな」

カズマ「それを3日で痩せるまこちーは凄いですよねチーズ」

士「チーフだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0720v/>

仮面ライダー龍騎～ライダーとアイドルとぷちどる日常～

2012年1月14日00時50分発行